
I・000・S - インフィニット・オーズ・ストラトス -
コントローラー・X

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I・O O O・S インフィニット・オーズ・ストラトス

【Nコード】

N 6 0 5 9 X

【作者名】

コントローラー・X

【あらすじ】

女性にしか使えない世界最強の兵器、IS インフィニット・ストラトス。

しかし、世界で唯一ISを使える男がいた。

今、この世界に《誕生》した《欲望のIS》と男の物語が始まる。

プロローグ（前書き）

初投稿なので文章が目茶苦茶だと思いますが、暖かい眼差しで読んでくれると嬉しいです。

プロローグ

夜、とある高層ビルの会長室。そこには2人の青年と、椅子に座っている1人の男性がいた。

「明日がIS学園へ転校だったな、竜馬君」

椅子に座っている白髪混じりの男性の名は、黒木 白黒。日本に数多くあるIS^{メルダ・ファウンデーション}開発企業の会長である。

「はい、白黒さん！」

そして、返事をした黒髪の青年……龍東 竜馬は元気に答えた。

「いや、もうすぐ俺の開発したISが日の目に出るなんて、こっちも緊張してきたなあ……」

白衣を羽織った青年……黒木 影宮はそう言いながら右手を胸に当てながら緊張していた。

「息子よ。竜馬君のISは……」

「これだよ」

そう言いながら影宮は、ポケットから直径3cm、厚さ6mmの銀色のメダルを取り出した。表に十字の模様、裏は三つ円が横に並んだ模様が描かれているメダルだった。

「待機状態になってるが、呼び出せばすぐに展開できるからな」

影宮はメダルを竜馬に渡すと、竜馬はメダルにある小さな穴に赤い

リボンを通して首に掛けた。

「……？そのリボンは……」

「あ、小2の転校する時に友達から貰ったんです。『いつまでも、私たちは友達だ！』って……」

竜馬は目を閉じて思い出していた。転校する事が決まりこの学校での最後の授業、ポニーテールをした女の子に友達の証として貰ったリボンの事を……。

「影宮さん、白黒さん、今までお世話になりました」

そして目を開けて、影宮と白黒に感謝の言葉を述べた。8歳に両親を亡くし自分を引き取ってくれた白黒と、実の兄のように相談に乗ってくれた影宮に。

「ハッハッハッ！竜馬君、長期休暇に入ったらまた戻って来なさい。ここはもう、君の家なんだからな」

白黒は笑顔で言うと、竜馬は「はい！」と嬉しそうに言った。

「アレが完成したら届けるから、それまではセルで頑張ってくれ。期待してるぞ」

影宮は竜馬の肩に手を置きながら言った。

「はい。これからもドロイドや武器の開発、頑張ってください」

「ああ、そっちも《オーバーズ》を頼むぞ」

「はい！」

二人は固い握手を交わし、会長室を出てそれぞれの部屋に戻っていた。

主人公設定（11/09訂正）（前書き）

主人公のプロフィールと設定です。

主人公設定（11/09訂正）

名前：龍東 竜馬 りゅうとうりょうま

年齢：15歳

性別：男

所属：1年1組

好き：大切な人や友達的笑顔、麺料理（パスタもOK）

嫌い：大切な人や友達を傷つかせる存在、ゴージャ

趣味：プラモデル、旅行

マイペースな性格だが、誰でも優しく接する事が出来る。
成績は中の上だが、なかなかの切れ者らしい。

身体能力は高く、天性の格闘センスを発揮させる。

千冬とは小さい頃よく遊んでもらっていた。

8歳の頃に両親を事故で亡くし、知り合いのIS開発会社「メルダ・
ファウンデーション」会長、黒木 白黒くろくろに引き取られる。

引き取られると同時に、今いた小学校を転校してしまった。

箒とは同じクラスの友達だったが、転校当日に箒はリボンを《友達
の証》として竜馬に渡した。

転校した学校では鈴、弾、蘭と出会い、親友になった。

中学校には通わず通信教育をしていた。そのため、白黒の仕事の邪魔にならないように着いて行き、世界中回った。

13歳の時オーストラリアで東と出会い「君にはISを使える才能があるね」やったじゃん、バイバイ！」等と言われた。

世界中を回った時に鈴と再会、ある事件の後に千冬と再会している。

その後、会社にあるISを起動することができて世間に発表された。

01話【男とクラスメイトとIS学園】（前書き）

やっと1話の完成……のはずが、本文がめちゃくちゃな部分があったので修正しました。

01話【男とクラスメイトとIS学園】

メルダ・ファウンデーション 駐車場

「竜馬、準備ができたぞ」

「ありがとうございます、影宮さん」

影宮は、愛用の黒ベンツに竜馬を乗せていた。

「ゲート前でいいんだな」

「はい。そこから担任の方が案内に来てくれるから大丈夫ですよ」

「そうか。じゃあ、出発だ！」

そして、二人を乗せたベンツは駐車場から出発した。

IS学園 ゲート前

「……まだかなあ」

影宮にゲート前まで送ってもらい別れて10分、竜馬は担任の到着を待っていた。

（IS学園の職員って、全員が女性だったな。担任も美人なのかなあ……）

そう思っていると、こちらに近づく女性に気がついた。黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているが決して過肉厚ではないボディライン。

「あっ！」

竜馬はその女性を知っていた。白黒の仕事でドイツへ行った時に面識があったのだ。

「すまない、遅くなってしまったな」

「千冬さん！お久しぶりですっ！！」

竜馬は女性…織斑 千冬に笑みを浮かべてお辞儀をした。

「ああ、ドイツで会った以来だな竜馬。黒木会長は元気か？」

「はい。白黒さんも影宮さんも、相変わらず元気ですよ」

「ふっ、そうか」

千冬は軽く微笑むと、二人は歩き始めた。

「束に聞いたが、まさかお前がISを使えるとはなあ……」

「僕も最初は驚きました。2年前に束さんと会って、『君にはISを使える才能があるね』よかったじゃん、ブイブイ!』って、急に言いましたからねえ……」

竜馬は束との思い出をしみじみとすると、千冬は小さく溜め息を吐いた。

「全く、束は相変わらずか。……その様子から見ると、基礎知識と訓練は十分そうだな」

千冬は改めて竜馬を見た。3年前の竜馬の体つきとは違い、がたいが良くなっていた。

「束さんの言葉から今に至るまでは、ISの勉強を中心にしましたからね。それにこれも」

そう言うと、竜馬は首に掛けてあるメダルを千冬に見せた。

「これが、お前の……っ」

千冬は何か言おうとしたが、教室の前まで来てしまった。

「まあ、後で話す。今はここで待機しろよ」

「はい、ちふ……じゃなかった。織斑先生」

竜馬は千冬を織斑先生と訂正して言うと、千冬は小さく微笑みをした。その後、千冬が教室に入りSHRが始まった。

（数分後）

1年1組

「それではSHRを終了する………と言いたところだが、ここでまだ自己紹介をしていない奴がいる」

そう言い終わると、クラス全員がざわめいた。

（入学式早々に転校生？ いったい誰だ？）

その一人、ポニーテールが特徴の女子……篠ノ之 箒は考えていた。

「入れ」

「はい、失礼します」

千冬は廊下で待たせている竜馬を呼ぶと、扉が開いた。
竜馬が入ると、まずクラス全員が固まった。

（え………？ あい………つは………）

そして、箒は目を見開いていた。

「自己紹介をしてくれ」

「はい。えっと…、龍東 竜馬です。よろしくお願いします」

竜馬はそう言つと微笑んで、軽く頭を下げた。

「「「「……………」」」」

「……………」

だがクラスの反応が無く、竜馬は頭にハテナマークを浮かべたような顔をした。

だが次の瞬間……

「「「「……………」」」」

「き？」

「「「「キヤアアアアア！！！！」」」」

「ほわっ！」

突然の黄色い叫びに竜馬は後ずさりし、所々声が聞こえた。

「やったわ！男子よ男子！」

「しかもウチのクラス！」

「「竜馬くん！こっち向いて〜！」」

「凄くイケメンね！嫌いじゃないわっ！！！」

「あ、あははは……」

こんな場面に遭遇した竜馬も、流石に苦笑いするしかなかった。

「うるさいぞ馬鹿者共！……まったく。毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ……」

クラスを静めさせると、千冬は溜め息を吐いた。

「龍東、お前の席は篠ノ之の後ろだ」

千冬は窓際の席を見ながら言うと、竜馬は席に近づいた。そして簞と目が合うと、微笑んで言った。

「8歳の時以来かな。久しぶり、簞」

「あ、ああ……。久しぶりだな、竜馬……」

二人は握手をしようとした瞬間……

――バシッ――

「あ痛っ！」

「喜びの再会は後にしろ」

竜馬の頭に出席簿が叩き付けられ、握手が出来なかった。

休み時間 屋上

1時間目の授業が終わり、竜馬と箒は屋上に来ていた。教室ではクラス全員だけではなく、2・3年の先輩も詰めかけていたため箒と話が出来ないの、箒を連れて屋上へとやってきた。

「8年ぶりかな、最後に会ったのって……」

「あ、ああ……そうだな……」

竜馬は話しかけたが、箒は顔を赤らめて頷いた。

「それにしても……」

「な、何だ」

竜馬は箒を見つめると、箒は更に顔を赤らめた。

「うん、やっぱり箒にはポニーテールが似合ってるね。可愛いよ」

「か、かわっ、可愛い！？嘘を言うなっ！……」

「ははっ。嘘じゃないよ」

「む、む……」

竜馬は微笑みながら言うと、箒は顔を真っ赤にして俯いた。

「あ。あとこれ……」

竜馬は首に掛けてるリボンを箒に見せると、箒は懐かしむように見ている。

「懐かしいな。まだ持ってたのか…」

「ああ。友達の証を無くすなんて、出来ないよ」

「ふふつ、全くだ。無くしてたのなら、私の竹刀が黙ってないからな」

「おお怖い…」

二人はふざけながらも、久しぶりの再会を喜んでいた。

—キンコンカンコン—

「あ、もう時間か」

「そうだな」

授業開始のチャイムが鳴り響き二人は屋上の扉まで行くと、扉の前で竜馬は止まり、笑顔で箒に利き腕の拳を突き出した。

「これからよろしく、箒」

「あぁっ！」

箒も笑顔になり、竜馬の拳を自分の拳に突き出した。
これが、竜馬の親友の証である。

2時間目 教室

箒 Side

私は小学生の頃、道場に通うクラスの男子がいた。そいつの名前は
龍東 竜馬。

同年代と試合して負けなしの私が唯一、勝てなかった奴だ。

最初は、「次は勝つ！」と、私が目標にする気持ちぐらいしか思わ
なかった。

でもある日、私が男子達に【男女】と言われて虐められた時に、竜
馬が男子達に向かって言うてくれた。

「なに男が女の子を虐めてるんだよ！そんな最低な事して、恥ずか
しくないのかよ！」

それからだ。私が竜馬を目標としての気持ち以外に、あいつを意識

し始めた。

竜馬は強いだけじゃなく、老若男女誰にでも優しく、あいつの笑顔はみんなを優しい気持ちにしてくれること。

そして……誰よりも……かつこいいのだと……。

ただその日、道場で竜馬と稽古をしていた時に雪子叔母さんが息を乱して入ってくると、涙を浮かべて竜馬に言っていた。

「竜馬くんの……ご両親が、交通事故で……っ!」

私は目を見開いた。嘘だ!あの優しい竜子さんと人柄の良い竜治さんが亡くなっただなんて。

その話を聞き終わる頃、竜馬は意識を失ってしまった。

数日後、竜馬のご両親の葬式が終わった頃に白黒さんが尋ねてきた。

白黒さんの息子、影宮さんは姉さんの研究者仲間でたまに顔を合わせた程度だ。

尋ねてきた理由は、竜馬を引き取りに来て、今の学校を転校してしまうと言っていた。

それを聞いた夜、私は布団のなかで泣いた。

竜馬が引越す日、私はある決心をしていた。あいつに告白すると、決心していた。

だが、いざ言おうとした時…

「い、いつまでも、私たちは友達だ!!」

私は臆病だ……あれだけ決心したのに、竜馬を前にしただけで心臓が壊れそうだった。

「……。ありがとう」

だが、それを聞いた竜馬は目に涙を溜めながら、私の好きな笑顔をしてくれ、親友の証をしてくれた。

それを終わると、私は髪を結んでいたリボンを竜馬に渡し、そして別れた。

あれから8年、私は竜馬を忘れる事はなかった。

だが2年前、ISを使える男が現れたとニュースを見て驚いた。

竜馬だった。成長はしているが、あの笑顔を私は忘れなかった。

IS学園に入学し、姉さんの友達の千冬さんが担任で驚いたがさらに竜馬が転校してきて、更に驚いた。

休み時間にいろいろ話をしようとしたが、短すぎてあまり話せなかった。でも、親友の証をして私は思った。

私は今でも……竜馬が好きだ！

休み時間 教室

「へえー、りゅーくんってあのメルダに居候してたんだ」

「メルダって、あのメルダ・ファウンデーションでしょ？」

「やっぱりISを使える男子ってスゴイなあー」

2時間目が終了すると、竜馬はクラスの女子に質問攻めにされていた。上から、布仏 本音、相川 清香、谷本 癒子が喋っており、本音の言う《りゅーくん》とは竜馬の事である。

「そうだなあ、あとは「ちょっと、よろしくて？」……ん？」

会話中、後ろから声をかけられた竜馬は振り向いた。話しかけてきた相手は、わずかにロールがかかった金髪のロングヘアの女子だった。

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「えっと……（何なんだこの人。いきなり突っ掛かってきて……ん？この人は……）」

突っ掛かってくるてきた女子に竜馬は戸惑うが、ベントツ車内で読んでいた1組の生徒リストで同じ顔だったのを思い出した。

「たしか……、セシリア・オルコットさんだよね？イギリス代表候補生で、入学試験で教官を倒した……」

「あら、ご存知でしたのね？」

「まあ、クラスメートの名前くらいは覚えないと失礼だしね。まさか代表候補生と同じクラスになるとは、僕も最初は驚いたよ」

竜馬は右頬を掻きながら言うと、セシリアは人差し指をびしっと竜馬に向けた。

「そう！本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。それは分かってますわよね？」

「まあ筈にも久しぶりに会えたし、たしかにラッキーかも……」

そう言うと、セシリアの目がややつり上がり竜馬に迫っていった。

「わたくしよりも友人と会えた方が幸運って、どういう意味かしら！？」

「え、えつと……まあ落ち着いて」

「こ、これが落ち着いていらね——」

ーキンコンカーンコンー

セシリアの話に3時間目開始のチャイムが割って入った。

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！」

セシリアは一方的に言うと、竜馬に背を向けて自分の席に戻った。

一方、箒は……

（りり、竜馬が、わわわ私と会えて……らららら、ラッキーって〜）

……俯いて悶えていた。

3時間目 教室

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

3時間目、教壇には千冬が立っていた。尚、1・2時間目の授業を教えていたのは副担任の山田 真耶である。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決め

ないといけないな」

思い出したように千冬が言う、クラスがざわざわと色めき立っていた。しかし、竜馬は冷静にしていた。

（代表者が……。対抗戦とか出れるから、データを取るには良い役所かな）

そう考えていると、女子の一人が手を挙げて言った。

「はい。龍東くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思いますー」

「では候補者は龍東 竜馬……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

話が進むと、筈は竜馬に言った。

「いいのか？竜馬」

「何が？」

「これではお前が代表者になるが……」

「んー……まあ良いけどね。男が乗るISなんて、いろいろと経験を積みそうだし。なにより……」

「なにより？」

「面白そうだ」

二カッ！と笑みをした竜馬を見て、箒は微笑んで「まったく…変わってないな」と言った瞬間、教室の後ろにバンッ！と音がした。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

音の正体は、机を叩いて立ち上がったセシリアだった。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに……このセシリア・オルコットにそのような屈辱を１年間味わえとおっしゃるのですか！？」

セシリアは怒涛の剣幕で言葉を荒げると、癪にさわったのか箒が言った。

「うるさいぞ。少しは落ち着いたらどうだ」

「貴女はお黙りなさい！ＩＳランクＣの貴女に、Ａのわたくし意見だなんて図々しいですわ！」

「なっ…！何だと——」

セシリアの言葉に、箒は怒りの表情で立ち上がった瞬間、それは起こった。

「いい加減にしないか——！」

「っ！」「」

大声に驚いた箒とセシリアは、声がした方に目を向けた。そこには、

セシリアを少し睨むように見ている竜馬だった。

「黙って聞いていれば……。僕を馬鹿にしたり、侮辱するなら良いよ。だけど、親友を侮辱だけはするな！」

「竜馬……」

筭は竜馬を見て驚きと嬉しさを感じていた。まるで、昔に虐められたところを助けてくれたように。

「な、なにかと思えば……。大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとつては耐え難い苦痛で——」「イギリスだって大してお国自慢がないくせに。あるのは世界一まずい料理の連続覇者ぐらいだろ」なっ……………！？」

竜馬が言った一言で、怒髪天をつくと言わんばかりのセシリアが顔を真っ赤にして怒りを示していた。

「あっ、あっ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「先に侮辱したのは君だろ！？」

睨み合いのなか、セシリアはバンツ！と机を叩いて人差し指を竜馬に指した。

「決闘ですわ！」

「ああ、いいよ」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い……………いえ、奴隷にしますわよ」

「真剣勝負に男も女も関係ないよ。手を抜くほど腐ってないよ」

「そう？何にせよちょうどいいですね。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの实力を示すまたとない機会ですわね！」

セシリアが言い終わると、竜馬はある事を言った。

「んじゃ、ハンデはどのくらいつけたらいいかな？」

「……………はい？」

竜馬が言った一言にセシリアはア然としたが、その瞬間にクラスからドツと爆笑が巻き起こった。

「り、竜馬くん、それ本気で言ってるの？」

「女尊男卑の今、男が女より強かったのって大昔の話だよ？」

クラスの女子は話しかけるが竜馬は動じなかった。

「ふふつ、日本の男子はジョークセンスがありますのね。むしろ、専用機を持つわたくしがハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ」

そう言つと、セシリアは左耳に付けてあるイヤークアスを竜馬に見せた。どうやら、あれがセシリアのISのようだ。

「ハッハッハッハッ！」

だが、竜馬は気にせず笑っていた。

「……やっぱり、ハンデ付けた方がいいかな？」

「はあ！？だからそれは、専用機を持つたくしが——」だから、専用機を持つてたらハンデを付けていいんでしょ？」……え？」

竜馬の言葉に、セシリアや箒を含むクラス全員が静まり返った。それをよそに、竜馬は首に掛けてあるリボンを外し、メダルをセシリアに見せた。

「ま、まさかそれは…」

「ああ。僕の専用機だよ」

「ええええええ！！！」

クラス全員が驚き叫ぶと、コンコンと何か音が聞こえていた。

「あれ？何でしょうか……」

真耶は音のする方に目をやると固まった。窓を見ると、黒い小さな鳥型ロボットが32インチ薄型テレビを持って窓を突いていた。

『何やら面白そうな事が始まるみたいだな』

画面に映し出されたのは、影宮だった。

「影宮さん。どこでそれを……」

『細かい事は気にするな！それより、専用機と闘えるなんていいじゃないか。頑張れよ！』

「はい、頑張ります！」

影宮は親指を立てて健闘を祈ると、竜馬も親指を立てた。そして、鳥ロボットはテレビを持ちながら空に飛んでいった。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第3アリーナで行う。龍東とオルコットはそれぞれ用意をしておくように」

ぱんつと手を打った千冬は話を締め、授業を再開した。

02話「同棲と代表決定戦と誕生のオーバース」(前書き)

2話ができました。

やっとISがたよ……。戦闘シーンが難しいです……。

02話「同棲と代表決定戦と誕生のオーバーズ」

放課後 学園内

授業が終わり、竜馬は一人で学園内を探索していた。

「それにしても、ものすごい視線だな……」

中庭を歩いているだけで、竜馬は女子の視線を集めていた。元々IS学園は女しかいなかったので無理もない。

「今日で全部回るのは無理だな……。ん？」

竜馬は立ち止まると、黒い自販機を見つけて近づいていった。

（ここにもベンダーがあるんだ。形状から見ると販売専用型か……。よし！）

そう思うと、竜馬は意識を手に集中するとメダルが5枚現れた。首に掛けてあるメダルと同じ形だが、裏の模様は5枚全て違っていた。共通するなら、全て生き物が描かれていた。

これがIS専用メダル…セルメダルである。

「……………」

竜馬はISのメダルを自販機にかざすと、硬貨投入口とは別の投入口が中央に現れた。同時に飲み物が全て、赤、緑、水色、黄と、色とりどりの缶に変わった。

「この場合は、タカにするかな……」

言いながら全てのセルメダルを投入し、赤い缶を5本買った。

「そんじゃまあ……」

竜馬は、プシュツ！と缶を1本開けた。すると……

【TAKA・KAN】

『キュイー！』

『『『『キュイー！』』』』

赤い缶は鳥型ロボットに変型し、残りの缶も同時に変型した。

これが、メルダ・ファウンダー^{ベンダー}シヨンの製作の可変型缶ロボット《カンドロイド》と、カンドロイド販売機である。

「学園の施設・設備の場所を調べてくれ。あと、学園にあと何台ベンダーがあるのかも頼むね」

『キュイー！』

そう言われたタカ・カンドロイド達は手分けして飛び立ち、竜馬は見届けたあと再び歩き始めた。

廊下 職員室前

日も暮れる頃、竜馬はタカ・カンドロイド達が集めた施設の場所をメモに記入しながら歩いていると、前から真耶が歩いて来た。

「あつ、龍東くん。何しているんですか？」

「さつき学園の施設等を調べてました。ここは広いから、迷わないように一様……」

竜馬は書きかけのメモを見せると、真耶は頷いた。

「そうですか。実は寮の部屋の事ですが……個室の方が用意出来てなくて、1ヶ月程相部屋になってもらいますね」

そう言った真耶は部屋番号の書かれた紙と鍵を渡した。

「届いた荷物は部屋にありますから、時間を見て部屋に行ってくださいね。それじゃあ私は会議があるので、これで」

「はい。さようなら、山田先生。また明日」

竜馬は頭を下げると、寮に向かって歩きだした。

寮

「1025室……ここか」

竜馬は紙に書かれた番号と見比べると、数回ノックした。

「……………いないのかな？」

返事が無かったのでドアに鍵を差し込むが、ドアは開いていた。

—ガチャ—

「失礼しまー……おお！」

竜馬は部屋に入ると驚いた。大きめのベッドが二つ並び、そこいらのビジネスホテルよりも遥かにいい部屋だった。

「荷物は…これだな」

竜馬は机の下に置いてあった荷物を開け、中にあるものをチェック

した。

「えつと……着替えに携帯充電器、iPad、セルメダルケース……ん？」

すると、箱の底にはオレンジ色の缶と黒の缶があった。

「新型カンドロイドか……。後で開けてみる」「誰かいるのか？」……「っ！！」

竜馬は突然、奥の方から声が聞こえて驚いていると扉が開いた。

「ああ、同室になった者か。これから1年、よろしく頼むぞ」

出てきたのは、体をバスタオル1枚を巻いてタオルで長い髪を拭いていた、今日再会を果たした親友だった。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ「ほつ、箒!？」之……えっ?」

自己紹介をしようとした筈は、聞き覚えのある声を聞いてきよんとした。

「り、りよう……ま……？」

「あつ、あぁ……」

2人は顔を真っ赤になった次の瞬間……

「い、いやあああああ！……！」

―ドゴォン―

「あべしっ！」

真っ赤な顔をした箒の強烈なアッパーカットが、竜馬の顎にクリンヒットし、そして……

―バタリ―

「りっ、竜馬！？しっかりしろ、竜馬！」

そのまま竜馬は気絶をしてしまい、箒は慌ててしまった。

〵十数分後〵

「ごめん！本っ当にごめん！」

「いや、私の方こそすまない。もう頭をあげてくれ」

目を覚ました竜馬は理由を箒に話し、ひたすら謝罪をしていた。尚、箒は竜馬の気絶中に寝間着浴衣に着替えていた。

「と、とりあえず、同室になるのだから色々決めておかなければ
ならないな……」

「そ、そうだね……」

二人は顔を合わせるが、頬が赤かった。あの場面を思い出すので無理もない。

「ま、まずシャワー室の使用時間だが……」

「ああ、箒が先でいいよ。剣道部に入ってるし、終わったあとさっぱりしたいしね」

「そ、そうか……」

「……………」

「な、何見ている……」

「ん？ やっぱり箒って、浴衣とか似合ってるなーと思ってね」

「にあっ……………！」

不意に言った竜馬の言葉に、箒は顔を真っ赤にして立ち上がった。

「箒？ どうし……………」
「あ、ああそうだ！ そのジュースを貰うぞ！」
……………え？」

竜馬の言葉を遮った箒は、竜馬の机に置いてあったオレンジ色の缶を手に取った。

「ああ、それは！」

「ん…？」

止めようとした竜馬だが、箒は缶のプルタブを開けてしまった。すると……

【KUJAKU KAN】

『クジャクー』

「きゃっ！」

突然の出来事に、箒は後ろに下がった。目の前にいるのは、後ろでカッターを回転させて飛んでいるカンドロイド……クジャク・カンドロイドである。

「箒、大丈夫か？」

「あ、ああ……何なんだコレは？」

「ソレは影宮さんの発明品だよ。使用者のサポートをする為に開発してみた」

【GORIRA・KAN】

『ウホッ！ウホッ！ウホッ！』

そう言いながら、竜馬は黒い缶……ゴリラ・カンドロイドを起動させた。

「そうか。……なあ、竜馬。来週の試合だが……」
「箒、頼みがあるんだ」……な、なんだ？」

話の途中、竜馬は真剣な顔で箒を顔を見ながら告げた。

「付き合ってほしい」

「——え？」

この時、箒は世界が止まる音を聞いた。

（翌日）

放課後 道場

「ごめん、遅くなった……よ？」

「……………」

授業を終えた2人は、胴着姿で道場にいた。尚、竜馬の胴着は影宮に届けて貰った。

「どうしたの、箒？」

「……何でもない」

「？」

箒は頬を膨らませて不機嫌だが、竜馬は首を傾げるしかなかった。

（何が「付き合ってほしい」だ！特訓の相手ではないか！私はてつきり、その……………」

箒は不機嫌の理由を心の声で叫んでいたが、後になるにつれて心の声は小さくなっていった。

「——き……箒！」

「はっ！」

箒は我に返ると、竜馬は心配そうに見ていた。

「体調が悪いの？やっぱり、止めた方が……」

「ただだ、大丈夫だ！！ほら、さつさと防具を着ける！」

「あ、ああ……」

箒の態度を気にしたが、竜馬は自分の黒い防具を着けた。
箒も赤い防具を着け、2人は向き合った。

「箒と打ち合うのは、本当に久しぶりだな」

竜馬は親友と一緒に、剣道をした頃を懐かしく思い目を閉じ……。

「そうだな。私はもう、昔の私とは違うぞ」

箒は片思いの人と、また打ち合う事が出来て小さく微笑んだ。

「それじゃ……」

竜馬は目を開いたが、いつもと違い、真剣な眼差しをしていた。そして……

「お願いするよ、全国大会優勝者さん！」

「よし、こい！」

特訓が開始された。

1年1組

「……………」

同時刻、セシリアは教室の窓から空を見上げていた。

（あの男も専用機を持っているなんて……）

男……竜馬の発言した専用機の所持を聞いて、セシリアは考えていた。

「……………！（フルフル）」

だがセシリアはその考えを消して、自分の勝利した事を考えた。

（まあ……例え専用機でも、わたくしの勝利は見えてますわ。このわたくし、セシリア・オルコットと《ブルー・ティアーズ》が……）

そう思いながら、セシリアは左耳のイヤークラスを優しく撫でた。

「ねえねえ、道場で篠ノ之さんと竜馬君が剣道で打ち合ってるみたいよー!」

すると、廊下から話し声が聞こえてきた。

「ホント！篠ノ之さんって、去年の剣道全国大会で優勝したんですよ。竜馬君、勝ち目ないんじゃないの？」

「そりゃそうだけど、面白そうじゃない。はやく行きましょー!」

話していた女子達は道場へと向かった。

（篠ノ之さんがねえ……。面白そうですわね。あの男がボロボロで泣いているのが目に浮かびますわ）

その話を聞いたセシリアは意地悪な笑みをして、教室を出ていった。竜馬と箒が特訓している道場へと……。

道場

セシリアは道場に来ると中を見た。すると、剣道は終盤に差し掛かっていた。

「はああああっ！」

箒は竹刀を上段に構えて走り込み、竜馬に迫る。だが竜馬は一步も動かずにいた。そして…

ーバシィィィンー

竹刀の音が、勢いよく響いた。

「なっ……！」

セシリアは一瞬の出来事に驚いた。

箒が竜馬の面を打ち出そうとした瞬間、竜馬が急に箒の懷に飛び込み胸を打ち込んだ。

「……」
「……」
「……」

ギャラリーは2人に拍手を送ると、2人は面を外した。互いの顔にはうつすらと汗をかいていた。

「ふう……。これで8勝2敗。腕を上げたね、箒」

「むう……。これでは竜馬の特訓と言うより、私の特訓ではないか」

「そうかな？ 僕も最初取られた時は焦ったけど……」

「だが、そこから5連勝したではないか……」

そう言うと、箒はシュンツと小さく落ち込んだ。

「まあまあ、落ち込まないの………ん？」

ふと、竜馬はギャラリーの中にいたセシリアを見つけると、声を掛けた。

「オルコットさん。来週、良い試合をしよう」

「……………ふんっ」

竜馬は微笑みながら言ったが、セシリアはそっぽを向いて道場を後にした。

「…まだ怒ってるのか——」竜馬、何を見ている！——え？」

箒は不機嫌そうな顔をして竜馬を呼んだ。

「どうしたの箒？」

「休憩は終わりだ。続きをするぞ」

「分かった。そうしようか」

そして、試合が再会された。

その約1時間後、訓練は終了した。ちなみに、竜馬の結果は総合で24勝6敗だった。

夕方 食堂

「…いただきます」

訓練後、竜馬と箒は一度部屋に戻って用事を済ませ、食堂へ行つて夕食を取っていた。ちなみに、箒は焼き魚定食を取っており、竜馬は……

「まさかIS学園でコレが食べれるなんて……」

竜馬の前にあるのは、うどんの上にライス、さらにカレーが掛けられておりトンカツがトッピングされていた。コレが、巷で人気急上昇の定食……カツカレーうどん定食である。

「美味しいなあ。特に衣の湿った感が凄く好みだ……」

「よく食べれるな、その量を……」

「いっぱい動いたからね。よく食べれるよ」

竜馬は笑みを浮かべたが、箸を置いて箸を見た。

「箸、また時間があったら剣道に付き合ってくれるかい？」

「ああ、いいぞ」

「ありがとう。頼りにしてるよ」

竜馬は微笑みながら箸に話した。

「ああ……。 (竜馬が頼ってくれている竜馬が頼ってくれている竜馬が頼ってくれている……) 」

平然と答えたが、頭の中では幸福に満ちていた。

「翌週 月曜」

放課後 第3アリーナ・Aピット

代表決定戦当日、竜馬はISスーツを着てAピットで待機していた。

「もうすぐか…」

「龍東、準備はいいか？」

竜馬は後ろを振り返ると、そこには千冬、真耶、箒がいた。

「織斑先生、どうして此処に？」

竜馬は質問すると、真耶が答えた。

「龍東さんのISのデータがまだありませんので、実物を見せてもらいますね」

「そうなんですか。箒は何で来たの？」

「わ、私は竜馬に激励をだな……」

箒は顔を赤くしながら言った。

「そっか。ありがとう」

「龍東、ISを展開しろ」

「はい。（……行くよ、オーバース）」

千冬の言葉に、竜馬は目を閉じて心の中で相棒を呼んだ。すると、メダルが輝いて竜馬を包み込んだ。

光が消えるとそこには、両肩と背中に浮かんでいる甲冑のようなスラスターと、ベルトの正面と上に何かを入れる溝がある黒いISを装着した竜馬がいた。

「コレが龍東くんの……《オーバース》」……え？」

ふと、真耶は後ろを振り向いた。そこにいたのは、白衣を羽織った男だった。

「……影宮」

「あの時ぶりだな千冬さん。いや、ここでは先生かな？」

「どうして此処にきた」

「俺が開発したISのお披露目だしさ、映像よりも生で見たいんだよねー。はいコレ」

そう言いながら、影宮は真耶にオーバースの資料を渡した。

「竜馬、頑張って勝てよ」

「はい！」

影宮の言葉に答え、竜馬はピット・ゲートに進もうとすると、箒に話し掛けた。

「箒」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ……ああ。勝ってこい」

竜馬はその言葉に笑顔で応え、ゲートを出た。

アリーナ・ステージ

「あら、逃げずに来ましたのね」

ステージには、セシリアが腰に手を当てて待っていた。
彼女は専用機……ブルー・ティアーズに身を包み、手には2mを超える長大なレーザーライフル《スターライトmk?》が握られていた。

試合は既に始まっているので、いつ撃つてきてもおかしくない状態だった。

「最後のチャンスをあげますわ」

すると、セシリアは腰に当てた手を竜馬の方に、びつと人差し指を突き出した状態で向けた。

「チャンス？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくつてよ」

そう言ったセシリアは目を笑みに細めた。すると、オーバーズの情報から、セシリアが射撃モードに移行し、セーフティのロック解除を確認した。

「……親友と約束したんだ。この勝負、負けるわけにはいかないよ」

竜馬が言い終わると、右手に展開されたエネルギー刀ラスライトを構えた。

「そう？残念ですね。それなら……お別れですわね！」

——キュインッ——

言い終わる直後、セシリアはスターライトmk?を竜馬を撃ち抜こうとした。

「よつと」

だが竜馬は弾丸を回避すると、スラスタの出力を上げてセシリアに近づいた。

「甘いすわ!」

そう言うと、ブルー・ティアーズのフィン・アーマーから自立起動兵器《ブルー・ティアーズ（別名ビット）》を展開した。

「ちっ!」

竜馬は近づくのを止め、ビットの回避に集中した。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で!」

そして、ライフルとビットによる射撃の嵐が、竜馬に襲い掛かる。

「だったら…!」

竜馬はラズライトでビームを弾きながら、左手にマシンガン《カービンM5S》を展開。そして、1つのビットに弾丸を放った。

「本体よりも先に叩く!」

だがビットはカービンM5Sを回避し、撃ち落とせなかった。

「そこだ!」

「なっ！」

だが、竜馬はビットの回避予測軌道にラズライトを投擲し1つ破壊すると、セシリアは驚いた。

「なかなかやりますわね！」

「そりゃどうも……っ！」

セシリアは更に残りのビットを全て展開すると、竜馬は回避に専念した。

アリーナ・Aピット

「はああ……。すごいですねえ、龍東くん」

Aピットでは、リアルタイムモニターを見ていた真耶がため息混じりにつぶやいていた。

「武装の展開が速いな。だいたい500時間の稼働で身についたみたいだな」

「正確には、503時間19分だけだな」

千冬の言葉に答えた影宮は、どこか楽しんでた。

「……………」

筈はモニターにうつる竜馬を見つめていた。

（私はまだ、お前と並ぶことが出来ないのか…………竜馬……）

アリーナ・ステージ

「2機目貰い！」

一方、竜馬は2機目のビットの破壊に成功していた。

「そんな…！」

セシリアは驚いてるなか竜馬はラズライトを構え、セシリアの懷に飛び込もうとしてスピードを上げた。

「これで、終わりだ…「かかりましたわ！」…何？」

セシリアはニヤリと笑うと、腰部から広がるスカート状のアーマー

が展開した。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは6機あってよ！」

しかも、先程のレーザー射撃を行うビットではなく、ミサイル弾道型を放った。

「くそっ！」

竜馬は咄嗟に両手の武器をミサイルに投げて直撃を免れたが、爆風により引きはがされた。

「初見でこうまで耐えたのは、貴方が初めてですわね」

煙が晴れると、セシリアはビットを自分の周りに浮かべさせていた。

「ですが、貴方は武器も無く丸腰同然。わたくしに勝つ事は不可能ですわ」

「……………フッ」

セシリアの言葉に、竜馬は笑っていた。その瞳は、まだ勝負を諦めていなかった。

「何が可笑しいのですの？」

「いや、凄いなと思ってね。それに、本気を出さないと失礼だと思つて…ね」

すると、竜馬の左手に1枚のセルメダルを出していた。

「だから、ちょっと本気をだすよ！」

そしてセルメダルをベルトの上にある投入口に入れ、右手をベルトの前にスライドさせた。すると……

——カポーン——

ベルトから音が鳴り響き、白と緑が混ざった光の球体に身を包まれた。そして光が収まると、そこにいた。

黒いヘッドギアはU字型カメラアイとカプセル状のヘルメットが合体したバイザーに変化。

両手、両足、背中、胸と、合計10個のオーブが付いた装甲。そう、オーバースは姿を変えていた。

アリーナ・Aピット

Aピットでは、影宮以外が竜馬の変化に驚いていた。

「う、これは！」

真耶はディスプレイを見て驚いた。そこにはオーバースの情報が載

つてあると同時に、“《バース・モード》起動”と載っていた。

アリーナ・ステージ

「な、ISの姿が変わった!？」

セシリアは目の前の事実に驚愕していた。ISの姿が変わるのは1
ファースト・シフト
次移行しか知らなかった。だが、竜馬のオーバーズはそれを済んでいる。

「さて…。行こうか、バース!！」

竜馬は相棒…オーバーズ・バースモード（別名バース）の右手に展
バースバスター
開した携行型火器を撃ちながらセシリアに突っ込んだ。

「くっ、ブルー・ティアーズ!」

セシリアはミサイルを発射するが、バースバスターによって全て撃ち落とされた。そこにすかさず、ビットを2機多角的な直線起動で竜馬に接近させた。

「この距離なら、コレがいいかな!」

竜馬はバースバスターを収納すると、またメダルをベルトに挿入した。すると……

【CRANE ARM】

音声と共に、右腕にはクレーン状の武器が展開された。

「あらよつと！」

竜馬はクレーンアームを降ると、先端のワイヤークレーンが発射され、2機のビットのスラスターを破壊した。

「なんですってー！」

セシリアが驚くなか、竜馬はクレーンアームをセシリアに向けて放った。

「イ、インターセプター！」

だがそこは代表候補生。クレーンが当たる直前、ショートブレード《インターセプター》で受け流した。

「きゃっ！」

だが竜馬のパワーが高く、セシリアはインターセプターを落としてしまった。

「よしっ！」

竜馬は攻撃を当てたことに、ガッツポーズを取った。

「迂闊でしたわ……。わたくし、貴方を侮っていましたわ」

「そりゃどうも」

すると、竜馬はクレーンアームを収納してバースバスターを展開させた。

「僕には、もう失いたくないものがある。守りたい友がいる。いまはまだ自分の手が届く程しか守れないけど、それでも…命に変えて守ってみせる！」

そう言いながら、竜馬はバースバスターのバレルポッドを銃口に接続した

「……そうですか」

セシリアは目を閉じた。自分よりも大きな負けられない理由を聞き、彼の勝負に賭けた覚悟を聞き、セシリアは思った。強くなりたい……。竜馬のように。

「……なれますか？」

「ん？」

「わたくしも、貴方のように強くなれますか？」

すると、竜馬は笑顔で答えた。

「ああ、強くなれるさ。だけど、今はこの勝負が終わってからだね！」

「!?!?……そうでしたね。なら、わたくしの全力を、貴方にぶつけます！」

そう言ったセシリアはシールドエネルギーを僅かに残し、全てをスターライトmk?に注いだ。

「そうか。だったら僕も、応えないとね！」

【CELL BURST】

竜馬はバースバスターのトリガーを引くと、強力なエネルギー弾が発射された。

「コレが、わたくしの全力ですわ！」

同じく、セシリアも最大出力のレーザーを発射した。

——ドカアアアアン——

2つの弾丸は巨大な爆発をして2人を巻き込んだ。

ービイイイイー！ー

そして終了のブザーが鳴り響くと、煙は晴れて2人は浮かんでいた。
そして……

『勝者、龍東 竜馬！』

勝負が決まった。

アリーナ・Aピット

「ふう。なんとか勝てた……」

竜馬がピットに着くと、影宮は竜馬に近づいた。

「よっしゃ！よくやったぞ竜馬！」

「影宮さん。どうでしたか？」

「初陣としては上々かな。バースC L A W sの単一仕様能力も出来てみたいだし。まあ強いて言うなら、他のC L A W sも披露してほしいかなー」

「ははは…、頑張ってみます」

竜馬は苦笑いを見ると、オーバースを待機状態のメダルにした。ちなみに、バースのワンオフ・アビリティは『エネルギー・ドレイン・アタック』（略してE・D・A）と言い、C L A W sの攻撃に当たったI Sや武器のエネルギーを、バースのシールドエネルギーに変換する能力である。

「竜馬…」

「あ、箒！」

竜馬は箒に気付くと、ゆっくり近づいた。

「箒、勝ったよ」

「ああ、よく頑張ったな」

2人は拳と拳を突き出すと、笑いあった。

「いいお友達ですね」

「……そうですね」

真耶の返事に千冬は応えたが、別の事を考えていた。

（2次移行無しで姿を変えるISなんて聞いた事が無い。それに、
セカンド・シフト
バース・モードになる前の姿。あれではまるで……）

千冬はオーバーズが初めて展開された姿を、あるISと重ねていた。細部は若干違うが、それは自分が初めて纏ったISに酷似していた。

（まさかあれは…）

「織斑先生……、どうかしましたか？」

「ん？いや、何でもないですよ山田先生。私は先に戻りますので、これで…」

そう言うと、千冬はピットから出ていった。

～夜～

寮 セシリアの部屋

その夜、あのクラス代表決定戦が終わったセシリアは、シャワーを

浴びながら物思いに耽っていた。

（負けて……しまいましたね……）

負けてしまった……。だが不思議と後悔はしなかった。

（……………）

セシリアは竜馬のことを思い出す。誰にでも向ける優しい笑顔と、強い意志の宿った瞳を。

他者に媚びることのない眼差し。それは、不意に自分の父親を逆連想させた。

（父は、母の顔色ばかり伺う人だった……）

幼少の頃からそんな父親を見て、セシリアは『将来は情けない男とは結婚しない』と決めていた。
しかし……

（…………… 龍東…………… 竜馬……………）

彼は自分に勝った。セシリアは竜馬の強い瞳に、その言葉に吞まれていった。

『命に変えて守ってみせる！』

『ああ、強くなれるさ』

父とは正反対のように強く勇ましい瞳が、あの優しい笑顔を忘れられなかった。

「龍東、竜馬……」

セシリアは竜馬の名前を口にしてみると、胸が熱くなるのを感じていた。

どうしようもなくドキドキとして、そつと自分の唇を撫でてみると、形のいい唇は触れられることを望んでいたかのように不思議な興奮を生み出した。

（わたくしは知りたい……もつと貴方のことを……竜馬さん………）

浴室には、ただただ水の流れる音だけが響いていた。

（翌日）

休み時間 教室

S H Rでクラス代表が発表され、休み時間にはクラスメートが竜馬の前に来て話をしていた。

「これでクラス対抗戦が面白くなるね」

「そうだよー。せっかく世界で唯一の男子がいるんだから、同じクラスになった以上、持ち上げないとねー」

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。1粒で2度おいしいね、龍東くんは」

クラスメートの話しに、竜馬は苦笑いをするしかなかった。

「あの、竜馬さん……」

すると、竜馬の下にセシリアがやってきた。

「やあ。先日はお疲れ様、オルコットさん」

（…竜馬…さん？）

筈はセシリアの言葉に違和感を感じた。

「は、はい。……そのことなのですが……申し訳ありませんでした！」

セシリアは急に、深々と頭を下げた。

「わたくしが少々、冷静さが欠けていたために、あのような失礼なことを……」

「ああ、気にしてないよ。あの時、僕も酷いこと言っちゃったし…

…こっちこそゴメン」

「……………お優しいですね」

竜馬の謝罪に、セシリアは頬を赤くして小さく言った。

「ん？」

「な、なんでもありませんわ。それで、宜しければもう1度、自己紹介をさせていただきませんか」

「ああ、構わないよ。改めまして、龍東 竜馬だ。よろしく」

「わたくし、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットです。セシリアと呼んでください」

2人は握手をすると、竜馬は利き腕の拳握った。

「ん」

「え？」

竜馬はセシリアにも同じように拳を作らせると、竜馬はセシリアの拳を自分の拳に突き当てた。

「これで今日から親友だね。よろしく、セシリア」

親友の証をした竜馬は、セシリアに笑顔を向けた。すると、セシリアは竜馬の利き手を両手でしっかり握った。

「はい！あの……そ、それですわね、本日の放課後……ふ、ふたりっきりで特訓を——」

「バンッ——」

いきなりの音に驚いた竜馬は、音の方に目を向けた。そこには、異様に殺気立った瞳をした箒だった。

「あいにくだが、竜馬の相手は足りている。“私が”、直接頼まれたからな」

“私が”を特別強調した箒はセシリアを睨んだが、セシリアは正面から受け止めて視線を返していた。

「あら篠ノ之さん。貴女が竜馬さんに教えるより、わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間が特訓に付き添えば、それはもうみるみるうちに成長を遂げますわ」

「なんだとっ！」

「なんですの！」

竜馬は箒とセシリアの様子を見て、ヤレヤレと心で思った。

「ねえ、りゅーくん。止めなくていいの？」

「まあ親友と親友のじゃれあいみたいだし、大丈夫だよ。いやー、仲良しは良いことだねー」

「「私^{わたくし}はこいつ（この人）と仲良しじゃない！（ありませんわ！）」
」

竜馬の言葉に、箒とセシリアは同時に言った。

メルダ・ファウンデーション 地下技術開発室

同時刻、メルダ・ファウンデーションの地下にあるISの技術開発室で、ある開発をしていた。

「影宮局長。全セルメダル1500枚の準備が完了しました」

1人の研究員は影宮に近づき報告した。

「そうか。では、起動だ」

「はい！」

研究員は走り去ると、影宮はアクリルケースに入れられた物を見た。それはセルメダルとは違い、15枚全てに色があるメダルだった。

「起動開始！」

影宮の発言により、研究員はレバーを引いた。

すると、別室で用意された1500枚のセルメダルは光の粒子となり、ホースを辿って15枚のメダルに吸収されて激しく輝いた。

「……………」

光が収まると、影宮はアクリルケースにある赤いメダルを手にとった。

「これでコアメダルの完成だ。あとは竜馬に届ければ……………フハハハッ」

そう言うと、影宮は子供のような笑みを浮かべていた。

オリジナルIS設定（11/17 更新）（前書き）

追加項目

・バースCLAWS一部

オリジナルIS設定（11/17 更新）

▼機体名：オーバース

▼操縦者：龍東 竜馬

▼開発者：黒木 影宮

▼待機状態：メダル

▼特殊機能：メダルチェンジ

▼基本装備

プリセット

エネルギー刀

リズライト

狙撃ライフル《ドミニオン》

アウエーション

双槍

▼後付武装

イコライザ

ショットアックス《バーンブレイズ》

雑刀《真機鉄》

マシンガン《カービンM5S》

ショットガン《ライオットS3》

ビームガン《マグナムブラスター》

ビームマシンガン《アサルトAR4C》

ハンドガン《スカウト》

ハンドガン《レッドホーク》

ライフル《シューターSR35S》

レーザーライフル《プリズム》

ビームショットキャノン《メテオ》

ハイパーマシンガン
実弾機関銃

ハイパーガトリング
レーザー機関銃

シヨットキャノン《アース》

4連ランチャー《フォークラスターL》

広範囲爆撃ランチャー《メガデス》

高電圧弾ランチャー《ブリッツ》

ガイア
大斧

ソニックアックス
ブースター内蔵型斧

高電圧ハンマー《タケミカツチ》

アカツキ
苦無

エネルギーナイフ《カレッカ・エッジ》

ブレイブ
打突強化鉄甲

各種グレネード

各種カンドロイド

両肩と背中に甲冑のような非固定浮遊部位型の推進機が合計3機、
腰部にメダルチェンジツール《オーバース・ドライバー》を装着し
ているのが特徴の万能型IS。

バースロット
拡張領域が第2世代ISの4・6倍だが、高いコストを持つメルダ
インストール
製の武器のみを量子変換しているので、それほど空いてない。

特殊機能は、ドライバー上にあるセルメダル投入口と、ドライバー
正面にある3つのメダルをはめ込む溝にコアメダルを入れることで、
オーバースの姿と性能が一気に変化させる。

●オーバース・バースモード

▼プリセット

バースバスター
携行型火器

▼イコライザ

バースCLAWS

グレネード各種

カンドロイド各種

▼ワンオフ・アビリティー

《エネルギー・ドレイン・アタック（E・D・A）》

オーバースがドライバーにセルメダルを投入して変化した姿。

背中のスラスターが無くなりスピードは落ちたが、全身に装甲が付加されて防御力が上昇している。

バースモード状態ではプリセットはバースバスターのみになり、イコライザが専用武器《バースCLAWS》に変化され、グレネードとカンドロイド以外のイコライザが仕様不可能になる。

ワンオフ・アビリティー《E・D・A》は名前通り、一部のバースCLAWSを相手ISが武装に当てる事でエネルギーを自身のシールドエネルギーに変換する。

▼バースCLAWS

両腕と両足、胸と背中、合計6個で構成されているバースモード専用武装。

威力が高く、一部の武装でワンオフ・アビリティーを発動させる。

・クレインアーム

右腕に装着される武装。ワイヤーフックを伸ばして離れているモノに当てたり、引き寄せる事が出来る。

・カッターウイング

背中に装着される武装。ブースターが付いているのでバースのスピードを補える他、取り外してブーメランのように投げる事も可能。

・キャタピラレッグ

両足に装着される武装。悪路でも難無く走行出来る他、無限軌道の連続ヒットにより高い威力を持つ。

・シヨベルアーム

左腕に装着される武装。バースCLAWSの中で1番の出力を持つ。シヨベルはモノを掴む事も可能で、重いモノでも軽々持ち上げる。

・ドリルアーム

右手に装着される武装。高速回転によって相手を継続的に攻撃出来るので、ワンオフ・アビリティーとの組み合わせでは最適である。クレーンアームと接続可能。

・ブレストキャノン

胸部に装着される武装。バースCLAWS唯一の遠距離武装で、セルメダルを数枚ドライバーに投入してエネルギーを送り込むことで威力が上がる。

●オーバース・オーズモード

▼プリセット

メダジャリバー
大剣

▼イコライザ

ライドベンダー
可変型自販機

グレネード各種

カンドロイド各種

▼ワンオフ・アビリティー

各コンボによって変化する

オーバースが3枚のコアメダルをドライバーにはめ込んで変化した姿。

全身の装甲が、胸部の円形プレートオーリングサークルの装甲に描かれている3種類の生物をモチーフにした装甲になっている。

オーリングサークルからISスーツに引かれている、頭部・四肢に伸びてあるエネルギーラインドライブ流動路からエネルギーを送る事によって、各部の特徴能力が発動する。

125の形態変化の中で1色のコアメダル3枚を使用した姿を《純正コンボ》、基本コンボを除いた姿を《亜種コンボ》と言われる。

コアメダル

オーバース・オースモードに変身する為に使用する5種類3枚組のメダル。

▼頭部：ハイパーセンサーの性能を上昇させる他、スラスタ等ユニットを形成しているのが特徴。

○タカ

小さな赤い羽をモチーフにしたヘッドギア《タカヘッド》と、背中の装甲に赤い翼状の固定型スラスタ二対を形成するコアメダル。タカヘッドとスラスタにエネルギーを送り込むと、赤い空中投影ディスプレイ《ホークアイ》を起動して、風の流れや光学迷彩をしているモノを見つけた事が可能。

○クワガタ

クワガタの顎をモチーフにしたアンテナ《クワガタヘッド》と、両肩の後ろに垂れ下がった緑の巨大なツノのアンロック・ユニットを各1本ずつ形成するコアメダル。

クワガタヘッドにエネルギーを送り込むと、自分を中心に視野を全方位360度見る事が出来る《スタック・アイ》が発動する。

ツノにエネルギーを送り込むと、ツノが上を向いてクワガタの顎のような形になり電撃を中距離に放つ事が出来る。そのまま挟む事も可能。

○ライオン

黄色いヘッドホンに水色のサングラスが付いた《ライオンヘッド》と、両肩横に浮かんでいる左右非対称のアンロック・ユニット（右は外側がギザギザなリング型ユニット、左は獣の顔型ユニット）を形成するコアメダル。

リングにエネルギーを送り込むと、広範囲に放出される強烈な光熱ライオネルフラッシャーが発動可能で、相手の目をくらませる。

○サイ

白銀のヘルメットにサイのような巨大な角を1本付いている《サイヘッド》を形成するコアメダル。

角の《グラビドホーン》はゾウレグと組み合わせることで、ソナ

ーのように相手を感知する事が出来る。

○シャチ

背鰭のような突起と2個のライトが付いたヘッドライト《シャチヘッド》と、背中に2本のボンベとホースを形成するコアメダル。ボンベにエネルギーを送り込むと《カムイ》と呼ばれるナノマシン入りの水を放出可能で、浴びせたISや武装に異常をもたらす。ヘッドライトにエネルギーを送り込むと《オルカエコー》を発動して、相手の熱源を感知する事が可能。

▼腕部：全装甲に専用武器が装備されているのが特徴。

○トラ

黄色の腕部装甲トラアームを形成するコアメダル。両前腕部に装備された折り畳み式鉤爪状武器は、エネルギーを送るトラクローことによって真空波を発生させる。

○カマキリ

緑の腕部装甲カマキリアームを形成するコアメダル。両前腕部に装着されているブレード《カマキリソード》は逆手に持つて使用される。

○ゴリラ

銀の腕部装甲を形成するコアメダル。両前腕部に装着されているガントレット状の武器は、ゴリハコーンロケットパンチのように射出する《バゴーンプレッシャー》が可能。

○ウナギ

青い腕部装甲を形成するコアメダル。
ウナギアーム

両肩には電気を生み出しており、武器や腕を強化出来る。

両肩に備わっている着脱可能な鞭状の武器《電気ウナギウィップ》
ボルタムウィップは、高圧電流を帯びた鞭を放つ事が出来る。

○クジャク

赤い腕部装甲を形成するコアメダル。
クジャクアーム

左腕に装備されている手甲型エネルギー解放器タジャスピナーでのエネルギー弾を放出出来る。

又、タジャスピナーは開閉可能。最大7枚のメダルをはめ込める事が可能で、それを右手でスキャンする事で《ギガスキャン》を発動できる。

▼脚部：推進力上昇の他に、キック力等も上昇しているのが特徴。

○バツタ

緑の脚部装甲を形成するコアメダル。
バツタレッグ

足裏にはバーニアが内蔵されており、圧縮空気を噴射する《シヨートバーニア・ブースト》が使用できる。

緊急回避や、踏み付けた瞬間に使って相手を弾き飛ばす事も可能。

○チーター

黄色い脚部装甲を形成するコアメダル。
チーターレッグ

エネルギーを送り込むと太腿に取り付けられたマフラーからスチームが吹き出し、超高速で移動出来る。

○ゾウ

黒い脚部装甲を形成するコアメダル。
ゾウレッグ

エネルギーを送り込むと強力な踏み付け《ズオーストップ》を発動して、でかい振動を与える。

○タコ

水色の脚部タコレッグ装甲を形成するコアメダル。

エネルギーを送り込むとその場に留まる事が出来る《オクトスパイク》を発動出来る。

○コンドル

赤い脚部コンドルレッグ装甲を形成するコアメダル。

爪先に《ストライカーネイル》と踵に《ラプタードエッジ》が付いており、ラプタードエッジからは真空波を出して切り付ける事が可能。

●オーズ・タトバコンボ

▼使用メダル

タカ・トラ・バッタ

▼ワンオフ・アビリティー

無し

▼必殺技

タトバキック

オーバース・オースモードの基本となるコンボ。

能力のバランスが良いので、相手を選ばずに戦える。

そこから他のコアメダルに変えて戦うのが、このコンボの基本戦法。

03話「オカマとパーティーとコアメダル」(前書き)

第3話ができました。

タイトル通り、苗字は変えてますが、あのキャラが出ます。

それと、メダル関連のネタや兵器も出していきますので、分かってくれたらうれしいかも。

それではどうぞ！

03話「オカマとパーティーとコアメダル」

6時間目 第1アリーナ・ステージ

4月の下旬、竜馬達は第1アリーナにて授業を受けていた。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。龍東、オルコット。試しに飛んでみせる」

千冬の言葉に竜馬達はすかさず反応し、ISを展開させた。尚、竜馬との対戦で損傷したセシリアのブルー・ティアーズに装備されているビットは、完全に修復が終わっていた。

「龍東、お前はバースモードに変更しろ。その状態のスピードは見たが、バースの状態はそんなに見てないからな」

「分かりました。では……」

竜馬はセルメダルを出すとベルトに投入して、右手をベルトの前にスライドさせた。

「カポーンー」

光の球体に包まれると、オーバースは姿を変えてバースになった。

「よし、飛べ」

千冬は確認すると、竜馬達に指示をした。2人は急上昇するが、若千竜馬は遅れていた。

『どうした。データ上の出力ではオーバースの方が上だぞ』

千冬は通信回線から竜馬に言った。

「モードが変更して出力が減ってるんですよ。CLAWSを展開すればデータと同じぐらいになりますか……」

『そうか。よし、いいだろう。展開後は最高速度で飛んでみる。いいな』

竜馬は「はい」と答えると、竜馬はセルメダルをベルトに入れた。

【CUTTER WING】

音声と共に、背中には鋭い刃がある翼状の武器が展開され、ブースターを起動させた。カッターウイング

『お速いですわね』

飛行中、セシリアはプライベート・チャンネル個人間秘密通信を開いた。

「まあ、ウイング自体は微調整すれば今よりも速くなるけど、僕の腕じゃあ、まだコレが精一杯かな」

言いながら竜馬は旋回飛行をしていると、セシリアに近づいて話し

掛けた。

「セシリアは放課後、予定あるかな？ 狙撃の訓練をするから指導してほし……」
「本当ですか！」……う、うん」

竜馬の言葉を遮る様に、セシリアは驚きと嬉しさの顔をして言った。
あの試合以降、何かと理由を付けては竜馬と練習をしており仲が縮まっていた。しかし竜馬に対して態度が柔らかくなった分、箒に対しては硬くなっていた。

「分かりましたわ。それでは放課後、第3アリーナでしましょ——」

『竜馬っ！ いつまでそんなところにいる！ 早く降りてこい！』

いきなり通信回線から怒鳴り声が聞こえたので、竜馬は驚いた。すると地上では、真耶がインカムを箒に奪われてオタオタしていた。

『2人共、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から10cmだ』

「了解です。では竜馬さん、お先に」

そう言うとセシリアは直ぐさま地上に向かい、完全停止を難無くクリアした。

「流石だね。んじゃ、僕も……」

それを確認した竜馬も急降下するために速度を上げた。

（よし、ここで停止準備）

だが、地表50cmに来たところでトラブルが起こった。

ーガンッー

「痛っ！」

ードスッー

竜馬は急に後頭部を痛みに襲われた。そのせいで、地上に俯せで墜ちてしまった。

「らしくないぞ、竜馬」

「痛っつ。何だ何だ？」

腕を組み目尻をつり上げている筈をよそに、竜馬は後ろを見た。

『キューー！』

そこに飛んでいたのはタカ・カンドロイドだったが、色は赤ではなく黄色になっていた。

（黄色のタカ！まさか……）

竜馬は黄色いタカ・カンドロイドを見て、ある人物を思い出した。

「竜馬、聞いてるのか！」

箒の言葉に竜馬は我に返ると、箒は続けざまに言った。

「どうしたんだ竜馬。らしくないしつぱ……」「大丈夫ですか、竜馬さん？お怪我はなくて？」……ムッ……」

箒の言葉を遮るように竜馬の前にセシリアが立ち、竜馬に手を差し出した。

竜馬はその手を取ると、姿勢制御をして上昇した。

「ああ、あの高さぐらい大丈夫だよ……」

「そう。それは何よりですわ」

セシリアは「うふふ」と楽しそうに微笑むと、それを見た箒は不機嫌そうに言った。

「……ISを装備していて怪我などするわけがないだろう……」

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISを装備していても、ですわ。常識でしょ？」

「お前が言うか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮を被っているよりマシですわ」

——バチバチバチッ——

2人の視線が激しくぶつかり、火花を散らす様だった。

クラスの大半の女子はその様子を見て“、男子を取り合うような場面”として見ていたが……。

（うーん。ハイパーセンサーにこんな機能あつたっけ？）

しかし、その男は全く別の事を考えていた。

「あのタカは……もういないか……」

竜馬は辺りを見ると、黄色いタカ・カンドロイドはいなくなっていた。

「おい、馬鹿者共。邪魔だ。端っこでやっている」

すると、千冬は箒とセシリアの頭をぐいっと押しのけて、竜馬の前に立った。

「龍東、その状態で武装を展開しろ」

「はい」

「よし。では始めろ」

そう言われ、竜馬は辺りに人がいない事を確認すると、相手に銃火器を向けるイメージをした。そして一瞬爆発的に光ると、その手にはバースバスターが握られていた。

「いいだろう。次は近接武装を展開しろ。確かC L A W Sにしか無かったな」

「分かりました。では…」

竜馬はバースバスターを収納すると、セルメダル2枚を取り出して、ベルトに投入した。

【CATERPILLAR LEG】

【SHOVEL ARM】

音声と共に、左腕には巨大なショベル状の武器と、両足には無限軌道型移動補助武器が展開された。

展開が完了すると、竜馬はキャタピラレッグで移動しながらショベルアームを豪快に振って、更にキャタピラレッグによる蹴り技を披露した。

「ふむ……。基本武器の展開は悪くないがC L A W Sはその倍か……。時間短縮が出来ないのは厄介だな」

「通常の展開とセルメダルによる展開ではシステムが違い過ぎますので……。すみません」

「まあいい。セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

セシリアは左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出した。一瞬爆発的に光ると、その手にはスターライトmk?が握られていた。

「流石だな、代表候補生。……ただし、そのポーズはやめろ。横に向かつて銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがコレはわたくしのイメージをまとめるために必要な……直せ。いいな」……っ！……はい」

セシリアは反論の余地は大いにあるような顔をしていたが、千冬の一睨みによって話が終わった。

「次は近接用の武装を展開しろ」

「は、はい……」

（……ん？）

竜馬はセシリアの顔色が変わったことに気付き、試合の時にインターセプターを展開する際、時間が掛かっていたことを思い出した。

（時間が掛かるということは、今まで射撃戦闘しかしてないのかな。こりゃあ、狙撃訓練のお礼に近接訓練をしてあげようかな……）

そう思うと、ヤケクソ気味にインターセプターを叫んだセシリアに気付いた。

「………何秒掛かっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらう

のか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ですから、問題ありませんわ！」

「ほう……。龍東との対戦では懐に入り込まれそうな場面がいくつか見られたが？」

「あ、あれは……。その……」

セシリアの言葉は歯切れの悪くなり、ゴニョゴニョとまごついていた。

竜馬はその様子を見てみると、セシリアにキツ！と睨まれ、プライベート・チャンネルが送られた。

『貴方のせいですわよ！あ、貴方が……。わたくしに飛び込もうとするから……。せ、責任を取っていただきますわ！』

「？」

セシリアの言葉に、竜馬は頭を傾げた。

「……時間だな」

千冬は腕時計を見ると、授業の終了間近だった。

「今日の授業はここまでだ。すぐに着替えて教室に戻るように」

千冬はそう言うと、女子全員は更衣室に行った。尚、竜馬は反対方向の更衣室へ行っていた。

放課後 ゲート前

「おかえり〜タカちゃん♪」

授業終了の1時間後、ゲート前には背中に三日月のエンブレムが付いている黒いジャケットを着た、ガタイの良い男がいた。その男の手には、黄色のタカ・カンドロイドが置かれていた。

「竜馬ちゃんの授業は終わったみたいねっ♪んじゃ、会いに行きましょー!」

男はゲートを潜り、クネクネと歩いて行った。

第3アリーナ・ステージ

「……………」

竜馬は現在、地表約100mにあるバルーンを狙撃ライフル《ドミニオン》で狙っていた。
周りには、バルーンの破片がいくつもあり、元の数が多いのが分かる。

「バンッ——」

すると、ライフル特有の音が鳴り響き、少し遅れて最後のバルーンが割れた。

「ふう……………」

「素晴らしいですわ、竜馬さん」

「いや、ここまで出来たのはセシリアのおかげだよ。ありがとう」

「い、いえ……………それほどでも……………」

竜馬の言葉に、セシリアの顔は赤くなった。

「それじゃあ、次は近接訓練をしようか」

「あの……………、わたくしは余り近接戦闘は……………」

「大丈夫だよ。僕も近接武装を展開するから同じさ」

そう言うと、両手にはエネルギーナイフ《カレッカ・エッジ》が握られていた。

「……分かりましたわ。では、お手柔らかにお願いしますわ」

セシリアもインターセプターを展開させた。

「それじゃ、行く…「龍東くん!」…ん?」

竜馬は声の方に振り向くと、真耶がこちらに近づいていた。

「山田先生。どうしたのですか?」

「あのー……龍東くんにお客様が来ているのですが………」

「お客さん?」

「でも……あまりにも怪しい動きをしていたので、警備員の方たちと一緒に応接室に待たせているんです」

(……………まさか)

竜馬は確信してしまった。1時間前に見た黄色いタカ・カンドロイド、怪しい動きの男、それらのキーワードが完全に一致する人物を知っていた。

「分かりました。今から向かいますね」

「はい。それじゃ、先生は会議があるから」

真耶の姿を見届けると、セシリアが近づいていた。

「どうかしましたか？」

「ああ…。僕にお客さんが来てるって言われたから、ちょっと行ってくるね」

「でしたら、わたくしも一緒に行きますわ」

「あー……。まあ、いいけど……」

「……？」

竜馬の態度に、セシリアは不思議そうに思った。

「んじゃ、ピットに戻ったら通路の自販機で待ち合わせようか」

「ええ、分かりましたわ」

そして、2人はそれぞれのピットに戻った。

通路

「あれ？箒」

着替え終えた竜馬は待ち合わせ場所に着くと、箒と鉢合わせた。箒は部活後なのか、胴着姿だった。

「訓練は終わったのか？」

「終わったというか、なんかお客さんが来たから中断したんだ」

「客？影宮さんか？」

箒がそう言つと、竜馬は憂鬱そうな表情をした。

「いや、違ふと思う。多分、予測が正しかったらお客さんは……」
竜馬さん「……」

竜馬の言葉を遮り、セシリアがやってきた。

「あら、篠ノ之さん。何かわたくし達にご用ですか？」

「……竜馬、どういうことだ？」

箒は竜馬に話し掛けると、不機嫌オーラが垂れ流していた。

「ん？ああ、セシリアも一緒に行くんだって。そういえば、箒は何処に行くんだ？」

「私は職員室に用がある。それだけ……」

言いかけるが、箒は手を口に当てて考えていた。

「……………箒？」

「よし、私も一緒に行こう」

「なっ！」

箒の言葉にセシリアは驚いた。

「箒も？まあ応接室は職員室に近いか……。セシリアも良いよね？」

「え、ええ……………いいですわ」

まごついたセシリアだが、心の中では少し余裕だった。

（まさか篠ノ之さんに出会うとは、予想外でしたわ。でも、竜馬さんとの実戦訓練はわたくしとしか一緒にできませんですし、まだまだ余裕ですわ！）

対して、箒は少し焦っていた。

（セシリアも一緒だったとは……。早く訓練機の使用許可を貰わないと、竜馬ともっと一緒にいらなくなる！）

一方、竜馬はある人物の事を考えていた。

（ここって女子しかないからな……。あの人、大人しくしてくれるかなあ……………）

3人はそれぞれ思いながら、応接室に向かった。

応接室

3人は応接室の前に来ると、竜馬はドアをノックした。ドアが開くと、そこには千冬が立っていた。

「来たか。ん？篠ノ之とオルコットも一緒か…」

「織斑先生。どうしてここに？警備員がいるって山田先生が……」

「ああ……。アイツが担任を出せとうるさいから、私が呼ばれたんだ。そのあとで戻って行った」

「竜馬ちゃん！久しぶりねえっ」

すると、千冬の背後から声が聞こえた。そこにいたのは、ゲート前にいた男だった。

「ひ、久しぶりです、京水さん」

竜馬は男……京水の名前を呼ぶと、京水はクネクネ動きながらこち

らにきた。その動きを見た3人は若干引いていたが、セシリアは竜馬に話し掛けた。

「あ、あの……竜馬さん。こちらの方は……」

「あ、ああ……。この人はメルダでIS武器開発局の主任で……」

「須藤 京水すどう けいすいよ。よろしく、あんた達は……竜馬ちゃんのお友達？」

「は、はい。わたくしはイギリス代表候補生のセシリア・オルコットと申します」

「……ジー……」

すると、京水はセシリアをジーっと見つめた。

「あ、あの……「いい身体してるじゃない……」……えっ!？」

京水の言葉にセシリアは数歩下がったが、京水は同じ歩数で近づいた。

「でも……私の方が……おっぱい大きいわ……」

「あ、あ、貴方……! 初対面で失礼じゃありません——「私の方が、おっぱい大きいわ!」——ひいっ!？」

京水の叫びにより、セシリアは竜馬の背中に隠れた。

「りよ、竜馬……大丈夫なのか、あの変なオッサン——「変なオッ

サン！——うわっ！！」

箒の言葉により、京水は血相を変えて箒に近づいていき言った。

「言ったわねっ！！あんたレディーに対して最大の侮辱をつ！！ムツキイイイイイイ！！」

「し、失礼しました！？」

京水の豹変ぶりに、箒は謝罪をしながら竜馬の背中に隠れた。

「あーヨシヨシ。……京水さん。僕に何か用事ですか？」

竜馬は箒とセシリアの頭を撫でながら、京水が学園を訪問した理由を聞いた。

「あらいけない、私ったら熱くなっちゃったわ……。はいコレ」

すると京水はリュックの中から黒いホルダーと資料を取り出すと、竜馬に渡した。

「コレって……まさか！」

竜馬はホルダーの中を確認した。そこにはカラフルなメダルが15枚と、セルメダルが9枚はめ込まれていた。

「そう！コアメダルが完成したから持ってきたわ」

「そうだったんだ。でも、完成したら影宮さんが持ってきてきそうだけどなあ……」

「影宮ちゃんに頼まれたのよ。実際はそうしたかったみたいだけど、急な仕事が入っちゃったからね」

京水はクネクネと動きながら言った。

「あと、明日は土曜日よね。昼頃に影宮ちゃんが来てコアメダルの性能テストするみたいだから、予定空けといてね」

「そうですか。分かりました」

「それじゃあ私は帰るわね。早く帰って新しい武器の最終調整しないといけないから……じゃあね、竜馬ちゃん！」

京水はヌルヌルと動きながら応接室を出た。

「……大丈夫？2人とも」

竜馬は箒とセシリアの心配をした。

「す、凄い剣幕だった……」

「こ、怖かったですわ……」

2人を見て、竜馬は苦笑いをするしかなかった。

夕方 寮 竜馬・箒の部屋

京水と別れた後、竜馬とセシリアは寮に戻ってきて部屋にいた。箒はというと、職員室に用があるので今はいない。

「コレが、コアメダル……」

竜馬はメダルホルダーにある赤いコアメダルを手にとると、じつくりと見た。

「……………」

「竜馬さん。どうしましたか？」

「ん？ああゴメン。やっとオーバースのコアメダルが届いたからじつくり見てた」

「……1つ聞いても、いいですか？」

「何？」

「このメダルって、一体何ですか？試合の時や、今日の授業にも使っていましたし」

セシリアはメダルホルダーのメダルを指差した。

「そっだなあ……」

竜馬はそう言うと、セルメダルを手にとった。

「これはセルメダル。バースモードに展開する時に使う他に、CLAWSの展開、バースバスターの弾丸にも使うメダルだよ。あと他に……」

良いながら、竜馬は机に置いてある水色の缶を手にとった。

「コレを買うのにも使うかな」

【TAKO KAN】

『タコー!』

プルタブを開けると、脚を回転しながら飛んでいるカンドロイド……タコ・カンドロイドを起動した。

「まあ! かわいらしいですわ」

「よかったらあげようか? あ、でも新しい方がいいか——」ほ、本当ですよ!?!? ——な……ん?」

竜馬はセシリアを見ると、眼をキラキラさせて竜馬を見ていた。

「こ、こちらの物を貰ってもいいんですの!?!?」

「え？新しい方がいいとおも——」「いえいえいえ、それが良いのですわ！？」——……そ、そう？」

「はい！」

「まあ……良いか。はい」

竜馬はタコ・カンドロイドを元に戻してセシリアに渡した。

「ありがとうございます！！一生大事にしますわ！！」

セシリアはタコ・カンドロイドを大事そうに持った。

——ガチャ——

「……何をしている」

部屋の扉が開く音がすると、少々ご機嫌な箒が制服姿でいた。

「おかえり箒。用事は終わったの？」

「ああ。訓練機の使用許可を貰ったぞ！今度の訓練は、剣道からISに変更だ」

箒は許可書を竜馬に見せていると、セシリアは心の中で焦っていた。
（くっ……！まさか、こんなにあっさりと訓練機の使用許可が下りるだなんて……。コレでは、竜馬さんとふたりっきりの時間が大幅

に減ってしまいますわ!」)

「…セシリア、どうかした?」

「い、いえ! なんでもありませんわ!」

「そう? んじゃ、コアメダルについては食堂で話すよ」

そう言つと、竜馬は立ち上がって部屋を出た。

「おい竜馬! 私は帰ってきたばかりだぞ。少し待て……っておい!」

「り、竜馬さん! お待ちになって!」

竜馬を追うように、箒とセシリアも部屋を出た。

食堂

竜馬達は食堂に着くと、それぞれ夕食を持って同じテーブルに座った。ちなみに箒は焼き魚定食、セシリアはパスタ、そして竜馬は和風おろしハンバーグ定食だ。

「…成る程な。つまりコアメダルはオーバースの装甲を完全に化するメダルなのか」

「うん。資料には確か、セルメダル100枚分の力があるコアメダルを3枚使って、オーバースを変化させるんだ。この場合は変身って言っのかな…」

「100枚ですか……。随分高いですね……」

セシリアは食堂に着く前に、セルメダルの値段について質問していた。

セルメダル1枚の価値は、日本円で約1万円と言っていた。その100枚分で作られたコアメダル15枚で1500万円……。1体のISにそれほどの資金を注ぎ込むとは、セシリアはとても驚きを越えて呆れたように言った。

「そういえば、2人は明日どうするの？僕は性能テストをするから特訓が出来ないけど…」

すると、箒は頬を赤くして言った。

「け、見学しても良いか？」

「ん？別に良いけど……」

「そうか！よし……部活の用事が終わったらすぐ行くぞ」

「ああ、分かった…」「でしたら、わたくしも見学しますわ！」「…ん、セシリアも？」

竜馬の言葉を遮るように、セシリアも若干頬を赤らめて言った。

「ああ、いいよ」

「ありがとうございます（篠ノ之さん……。竜馬さんとふたりつきりにはさせませんわ!）」

3人は約束を交わすと、夕食を食べ終えて部屋に戻った。

竜馬・箒の部屋

「そうだ。箒、コレを持ってて」

2人は部屋に戻ってくると、竜馬は緑色のカンドロイドを箒に渡した。

「ん？このカンドロイドは何だ？」

「用事で遅くなったりしたら、それで連絡して」

「ほう。連絡手段に使うカンドロイドか…」

【BATTA・KAN】

筈はカンドロイド……バッタ・カンドロイドを起動すると床でピヨンピヨンと跳ねた。

竜馬はバッタ・カンドロイドを手にとると、オーバーズのメダルをバッタ・カンドロイドに当てた。

「これで僕のプライベート・チャンネルとリンクしたから、いつでも連絡ができるよ。はい」

「そうか。その……ありがとう……」

「ふふつ。どういたしまして」

ーコンコン、コンコンー

「ん？誰だろ……」

竜馬はノックの音に気付くと扉を開けた。

「ヤッホー、龍東くん」

「相川さん。どうしたの？」

扉を開けると、そこには清香がいた。

「実はね……1組全員は食堂に集合って言われてるから、準備が終わったら来てね。それじゃ、私は先に行くね」

清香は手を振りながら去っていった。

「どうしたんだ？」

「なんか1組は食堂に集合だって」

「そうなのか。では、行くとするか」

「ああ。行こうか」

2人は部屋を出て、食堂に向かった。

夜 食堂

「というわけでっ！龍東くんクラス代表決定おめでとう！」

「「「おめでと〜！」「」」

「パン、パンパーン！」

「……………えっ？」

食堂にやってきた竜馬は、突然のクラッカー乱射に啞然とした。食堂には確かに1組のメンバーが揃っており、壁にはデカデカと《龍東 竜馬クラス代表就任パーティー》と書いた紙がかけていた。

「さあさあ！主役はこっちに座ってね。あとコレね」

クラスの1人が竜馬を上座に座らすと飲み物を渡した。竜馬の両隣には箒とセシリアが座っていた。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと。ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

各自飲み物を手にやいのやいのと盛り上がっている中、竜馬は辺りを見渡した。

（明らかにクラスの人数が多過ぎるなあ……。あっちにいるのって2組の人だし……）

「人気者だな、竜馬」

竜馬の隣にいた箒が話し掛けたが、少し不機嫌そうにしていた。

「ん？どうだろうなあ……。男がクラス代表になったから珍しがってるだけじゃないかな？」

そう言つて竜馬はジュースを飲んだ。すると、竜馬に近づく女子がいた。制服には黄色のリボンをしていたので、2年生だと分かった。

「はいはい、新聞部です。話題のイケメン新入生、龍東 竜馬君に特別インタビューをしに来ました〜！」

新聞部が来た事にクラス一同は盛り上がった。

「あ、私は2年の黛 薫子。新聞部副部長やってま〜す！はいこれ名刺」

「あ、これはどうも……」

「ではではズバリ龍東君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

薫子はボイスレコーダーをずっと竜馬に向けて、無邪気な子供のように瞳を輝かせた。

「えーと……な、なったからには、優勝目指して頑張ります！」

「お！いいね〜。捏造のしがいがあるよ」

（本人の前でスゴイこと言うなあ……）

そう思ふなか、次に薫子はセシリアにボイスレコーダーを向けた。

「それじゃあセシリアちゃん。龍東君と試合した時のコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが……」

…仕方ないですわね」

と言いつつ、セシリアは満更でもなかった。

「コホン。ではまず、わたくしが——「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」——って！さ、最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当に捏造しておくから。よし！龍東君の強さに惚れたからってことにしよう」

「なっ、な、ななっ……！？」

薫子の一言に、セシリアは顔をボツと赤くなった。薫子は気にすることなく、懷からデジカメを取り出した。

「はいはい、とりあえずふたりならんでね」。写真撮るから」

「ん？」

「えっ？」

2人は薫子の言葉に反応した。しかし、セシリアはどこか喜色を含んで弾んでいるようにも聞こえた。

「注目の専用機持ちだからねー。ツーショットもらつよ。あ！握手とかしてるといいかもね！」

そう言いながら薫子は竜馬とセシリアの手を引いて、そのまま握手まで持つて行った。

「あ……………」

握手をすると、セシリアは頬を赤くして竜馬をジロジロと見た。

「?どうしたの?」

「べ、別に、何でもありませんわ」

「……………むう」

それを見ている筈は、不機嫌オーラ垂れ流しだった。

「……………筈?」

「何でもない」

そう言って、筈はそっぽを向いた。

「それじゃあ撮るよー。40×13÷1000は?」

「えっと……………0——」「ぶー、時間切れ。0.52でしたー」——
「そんな……」

——パシャツ——

デジカメのシャッターが切られると、竜馬は周りを見た。

「……………みんな凄いなあ」

なんと！1組の全メンバーが撮影の瞬間に、竜馬とセシリアの周りに集結していた。ちなみに、竜馬のすぐ隣には箒が立っていた。

「あ、あなた達ねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー！」

「クラスの思い出になっていいじゃん。ねー」

「「「ねー」「」」

「う、ぐ……」

クラスメートはニヤニヤとした顔で口々にセシリアを丸め込むように言うと、セシリアは苦虫をかみつぶしたような顔をしていた。

「……………」

竜馬はその様子を見て首を傾げた。

かくして、就任パーティーは夜10時過ぎまで続くのだった。

（翌日）

昼 食堂

「いただきます」

土曜日、午前中の授業が終わって竜馬達は昼食を取っていた。ちなみに、箸はうどん、セシリアはサンドイッチ。そして竜馬は、洋食器に入っているラーメンだった。

「竜馬さん。何故ラーメンをフォークで食べるのですか？」

「セシリア、コレはラーメンじゃないよ。ラ・メインだよ」

「ラ、ラ・メイン……ですか？」

「うん。そもそもラ・メインは——「おっ！見つけたぞ」——ん？」

食堂にいた生徒は、全員その声の方を見た。そこにいたのは、影宮だった。

「影宮さん。もう来たんですか？」

「まあな。早くオーバースを改修したくて、早めに来た」

「そうだったんだ……」

「ああそれと、コイツ達もな」

影宮は懷から2個カンドロイドを取り出したが、通常とは異なっていた。

1つは、上下が赤と黒のカンドロイド。もう1つは、上下が黒と金のカンドロイドだった。

「起きないマジユ、シベラー」

【AI・KAN】

影宮はプルタブを開けた。すると起動したカンドロイドは側面に小さな画面が出てくると、両横に小さな腕、底面には小さな足が出てきた。

『（～A～）ふぁ～……。よく寝たぜ』

すると、赤と黒のカンドロイドから声がすると、上には2本の小さな赤いツノが生えて、画面には顔文字が映っていた。

『「――」おはようございます、マスター』

さらに、黒と金のカンドロイドからは後ろに小さな金色の羽が生えて、画面には某爆弾男のような顔が映っていた。

コレが、カンドロイドの中で唯一人間に近い感情を持った高性能AI搭載型カンドロイド……《AI・カンドロイド》の《イマージュ》と《シベラー》である。

「イメージにシベラーまで……」

「んじゃ、俺は先に第1整備室に行くからな。食べたらずぐに来てくれよ」

そう告げると、影宮は食堂を出た。

「第1整備室ね……。そんじゃまあ、すぐ食べ終わらせるか！」

そう言って、ものの3分でラ・メインを平らげた。

第1整備室

「……………」

竜馬が食堂に出て1時間が経つ。

現在整備室では、影宮とメルダ・ファウンデーションの研究員数名によるオーバーズの改修作業が終盤に差し掛かっていた。

作業の理由は、15枚のコアメダルをオーバーズに取り込む為にバスのスロットの改良、及び拡大をしている。

「……………よっし！作業完了」

影宮はそう言うと、オーバースに取り付けられていた無数のコード
が取り外された。作業が終わると、竜馬はオーバースの空中投影デ
イスプレイを見て驚いていた。

「凄い……武装展開時間が更に短縮されてる。おお！バースCLA
Wsの同時展開が3個から6個全部出来るようになってる！」

「よし、早速テストだ。第4アリーナに向かおうか」

「はい！」

すると、整備室のドアが開かれた。

「やっと終わりましたか」

「あ、セシリア。待たせてゴメンね」

整備室に入ってきたのはセシリアだった。整備室には立入禁止とさ
れていたため、セシリアは待つ事しか出来なかった。

「今から第4アリーナに行くからセシリアも——『PRRRR！』
——あつ、箒からだ」

竜馬はプライベート・チャンネルを開いた。

『竜馬か。用事が済んだから今からそちらに行く。何処に行けばよ
い』

「今から第4アリーナに向かうところだよ。改修作業が終わったか

ら、そこで性能テストさ」

『分かった。私もすぐに行くからな』

そう告げると、竜馬は箒のバッタ・カンドロイドの電源を切った事を確認して、プライベート・チャンネルを閉じた。

「んじゃ、行くか」

影宮はそう言うと、第4アリーナへと向かった。

第4アリーナ・ステージ

ステージにはオーバーズを展開した竜馬、影宮、ISスーツ姿の箒とセシリアがいた。尚、ピットには千冬と真耶、メルダの研究員達がモニターを見てデータを記録していた。

「それじゃあ竜馬、ドライバーにコアメダルをセットしてくれ」

「分かりました。……………」

竜馬は集中すると、ベルトの溝が輝きだした。

「オーズモードの基本となるメダルは、タカ、トラ、バッタだぞ」

「……………」

竜馬はベルトに集中すると、正面にある3つの溝に赤のコアメダル…タカメダル・黄のコアメダル…トラメダル・緑のコアメダル…バッタメダルがはめ込まれた。

「バースモードと同じ様に、右手をベルトにスライドすればOKだ」

「……………！」

竜馬は右手をベルトにスライドすると、竜馬の周囲に3枚のコアメダルが回った。そして……………

【タカ！トラ！バッタ！　タ・ト・バ！　タトバ　タ・ト・バ！！】

不思議な歌と共に、竜馬は金色の光に包まれた。光が収まると、竜馬はオーバースとは形状が異なる装甲を纏っていた。

身体の胸部には円形プレートオーラングサークルの装甲と、頭には小さな赤い羽をモチーフにしたヘッドギア《タカヘッド》が装着され、背中トラアームの装甲には赤い翼状の固定型スラスタバッタレッグが二対あった。更に腕部の黄色い装甲、脚部の緑の装甲が纏っていた。

コレが、オーバース・オーズモード（別名オーズ）の基本形態……オーズ・タトバコンボである。

「な、なんだ？さっきの歌は……」

箒は先程の不思議な歌に疑問を持つが、影宮は気にせず言った。

「ああ歌は気にしないでくれ、箒ちゃん。そんなじゃ、早速テスト開始だ。…………ポチツとな」

影宮はポケットから取り出したスイッチを押すと、竜馬の周りに球体のターゲット・ユニットが5体出現した。

「今からユニットを動かすから全て破壊するんだ。ただし、2体は光学迷彩を機能させるからな。…………スタート！」

影宮の合図に全ユニットは動き出し、そのうちの2体は上昇したのちに光学迷彩によって姿を消した。

「…………速いすわね」

セシリアはユニットを冷静に見ていた。ユニットは不規則な起動で素早く動いていた。

「行くよ、オーズ！」

そう言うと、竜馬はスラスターを起動して飛び立った。そのスピードはオーバースに比べると、段違いの速さだった。

『腕に意識を集中すれば、装甲に取り付けられてる武器が使えるぞ！』

「はい！…………っ！」

通信回線から聞こえる影宮の言葉通りに竜馬はトラアームに意識を集中させた。

するとサークルに描かれたトラが光りだして、そこからISスーツに引かれている頭部・四股に伸びているエネルギー流動路がトラアームに注ぎ込まれた。そして両前腕部にある折り畳み式鉤爪状武器が展開された。

「ハッ！」

竜馬はトラクローをユニットに切り付けると、ユニットは爆発を起こした。

『次は脚部だ。脚部はどれも特殊だから、使いこなせば試合でも有利になるぞ』

「了解！……」

竜馬はバッタレッグに意識を集中した。すると、サークルに描かれたバッタが光りだし、ラインドライブがバッタレッグに注ぎ込まれた。

「うおっと！」

すると、バッタレッグの足裏に内蔵されたバーニアが起動して、一気にユニットに近づいた。

「あれは瞬間加速！
イクニッション・ブースト」

箒はその行動を見て驚いた。すると、影宮は動作の説明を言った。

「いや、正確にはショートバーニア・ブーストと言うんだ。足裏のバーニアから発生した圧縮空気が噴出されて、最大3回は使用出来る。緊急回避の他に、相手を踏み付けた時に使えば……」

「成る程！その瞬間に使えば、相手を遠くに弾き飛ばせる！」

箒はそう答えると、影宮は箒を見て微笑んだ。

「せいかゝい！箒ちゃんには1ポイントあげよう。おっ、言ったそばから……」

再び竜馬を見ると、箒が言ったようにユニットがバツタレッグに踏み付けられ、遠くに飛ばされたあと爆発した。

『それじゃ次。各ヘッドはハイパーセンサーの性能を格段に上げるぞ。今から隠れているユニットを探して破壊するんだ』

「分かりました。……………」

竜馬は集中するとサークルのタカが光りだし、ラインドライブがヘッドギアとスラスターに注ぎ込まれた。すると目の前に赤い空中投影ディスプレイ《ホークアイ》を出現させた。見るとそこには光学迷彩を起動しているユニットが見えていた。

「あそこか！」

竜馬はトラクローに集中すると爪が輝きだした。

「ハアアアアッ！」

そして叫びと共に腕を大きく振ると、トラクローから真空波が発生してユニットを真つ二つにして爆発させた。

「よっし！あと2体……」

竜馬は残りのユニットを確認した。1体は光学迷彩を起動していて、もう1体は今までのユニットより装甲がデカかった。

『次は必殺技だ。ドライバーに集中して右手をスライドさせるんだ』

「必殺技？だったらあのデカイ奴に……っ！」

竜馬は意識をベルトに集中して、右手をスライドさせた。次の瞬間

……

【SCANNING CHARGE！】

ベルトから発生された音声と共に、竜馬とユニットの間を赤・黄・緑のリングが出現した。

「ハアアアアアア！」

竜馬は赤・黄・緑のリングを潜り抜けると、ユニットに強力な蹴りタトバキック技を繰り出した。

ドッカアアアアアン!!!!!!!!!!

タトバキックを喰らったユニットは巨大な爆発を起こした。

第4アリーナ・ピット

「凄まじい威力ですね。コレだったらシールドエネルギーを一気に削り取られますねえ……」

先程のタトバキックを見ていた真耶は驚いているが、千冬は冷静だった。

（確かに威力は良いが、相手の攻撃で途中中断されたりしたら意味がないな……。まあ、相手の動きを止めたら別か……）

「あ、織斑先生！次は基本武器を使用するみたいですよ」

真耶はモニターを見て言った。すると、竜馬の右手には大剣が握られていた。

第4アリーナ・ステージ

竜馬は大剣をまじまじと見てみると、鞘付近にはセルメダル投入口が備わっていた。

『そいつは《メダジャリバー》と言って、京水が昨日完成させたオーズの基本武器だ。威力は近接ブレード並だがセルメダルを入れてから右手をスライドさせると威力が急上昇するぞ』

「了解！」

竜馬はホークアイに映っているユニットを追い掛けながら、メダジャリバーにセルメダルを2枚セットした。そしてメダジャリバーを右手でスライドさせると……

【DOUBLE！ SCANNING CHARGE！】

メダジャリバーから発生した音声と共に、刀身は青白い光りを発生させた。

「ハアアアッ！」

竜馬はスラスターを最大にしてユニットに近づくと、メダジャリバーを豪快に切り付けてユニットを撃破した。

『よし。これでターゲット全て破壊完了だな。竜馬、いったん降りてこい』

「分かりました」

そう言って、竜馬は影宮達のところに戻った。

「竜馬さん。お疲れ様です」

竜馬が戻ってくるとセシリアと箒が近づいていた。

「やはり凄いな……。違う性能を持ったオーバースを短時間で自分のモノにしてしまうとは……」

「いや。これも影宮さんや京水さん、IS開発局の皆さんが改良したからだよ。ありがとうございます、影宮さん」

竜馬は笑顔を見せて、影宮に感謝を述べた。

「いいってことよ。……次は2対2の実戦テストをしてもらう。箒ちゃん、竜馬と組んで貰えるかい？」

「わ、私でいい——「ちょっとお待ちください!——ムッ」

セシリアに話を遮断されて、箒は頬を小さく膨らました。

「何故わたくしではダメなのですか! イギリス代表候補生のセシリア——「ああ……箒ちゃんは1ポイント持っているから選んだんだよ。ただそれだけ」——え?」

セシリアは思い出した。確かに、箒にはポイントを持っていた。

「で、では……相手には誰を?」

「それは……コイツ達さっ!」

【A I K A N】

そう言いながら、影宮はイメージジュとシベラーを起動させた。

「2人共、実戦テストを行うから手伝ってくれ」

『（ハ　ハ　了解だぜ!」

『「ハ　ハ」かしこまりました、マスター』

「そんじゃまあ、お前達のユニットを出すか……」

——パチンッ——

影宮は指を鳴らすと両隣に2体のユニットが出現したが、ターゲット・ユニットとは全く違った。

1体は紅い装甲をしていて、頭部は白いラインの入ったカブトのような角が特徴で、両腕にはセシリアのスターライトmk？並の長大な砲身が右に2本、左に1本装備された射撃型のユニット。

もう1体は蒼い装甲をしていて、頭部はクワガタの顎のようなバイザーが特徴で、右腕にはソード、左腕にはハンマーが装備された格闘型のユニットだった。

そして影宮はイマージュを紅いユニット、シベラーを蒼いユニットの背中にセットした。

「2人にはコイツ達…… KBT NF：カイゼルと、KWG NF：ルミナスの2体と戦ってもらうぜ！」

「分かりました。箒、がんばろうか！」

「ああ！」

竜馬と箒はカイゼルとルミナスを見て、闘志を沸かせていた。

04話【ドROIDとテストと亜種連発】

第4アリーナ・Bピット

現在、竜馬と箒はBピットにて待機していた。尚、セシリアはルームメイトと約束していたのを思い出して寮に戻っている。

「……まさか、竜馬が学園に来るまでに訓練していた相手が《ハーフ・ドROID》だったとは……」

「まあ、元々メルダは《ドROID》を発明した会社だからね。訓練相手にはよかったよ」

そう聞いた箒は、ステージで出会ったカイゼルとルミナスを思い浮かんだ。

ドROID……メルダ・ファウンデーション会長、白黒が開発した無人A.Iロボットの事であり、医療機関・工場産業・軍事企業等に提供されている。

特に人間と生物を掛け合わせた姿をしているハーフ・ドROIDは軍事企業で訓練機として採用されており、最近ではISとの訓練において最適なユニットである。

「しかしステージに仕掛けを施すと言っていたが、まだなのか？」

「んー……。まだ連絡が来てないから——『おい！』——……あつ、来た」

するとピットのモニターが起動して、影宮から連絡が入った。

『準備完了だ。そっちはどうだ』

「はい、こっちも準備OKです」

竜馬は箒を見てみると、箒は既に打鉄を装着していた。それを確認した竜馬も、オーバースを展開した。

「行こうか、箒！」

「ああ！」

2人はピット・ゲートに進み、ステージに出撃した。

第4アリーナ・ステージ

ピットから飛び出した竜馬達の前に紅と蒼のユニット……カイゼルとルミナスを動かしているイマージュとシベラーが浮かんでいた。

『お久しぶりですね、竜馬殿……』

「ああ。今日も特訓、よろしくたのむよ」

『御意』

竜馬の言葉にシベラーはコクリと頷いた。

『久々だからって遠慮はしねえぜ！オレは最初っから全開だ！』

一方、イマージュは戦う事で興奮していた。

「箒、作戦の確認だよ。箒にはカイゼルを任せるよ。あのロングライフルは威力は高いけど……」

「分かっている。懷に飛び込めばライフルは使えないしな……」

箒はカイゼルの両腕に装備された長大な砲身を見た。2 mを超す銃火器は、懷に入ればその威力を発揮されない……。故に、竜馬は剣術が得意な箒にカイゼルを当てさせたのだ。

『んっ？何みてんだ侍オンナ！』

イマージュは箒の視線に気付くと、左腕のロングライフルを向けた。

「相変わらず好戦的だ……」

イマージュの様子を見ると、通信回線から竜馬の声が聞こえた。

『今回のルールだ。“タトバコンボと純正コンボ以外を使って闘ってみる”。さあ、ドライバーにコアメダルをはめ込むんだ……』

「（亜種コンボのみか……）了解しました」

竜馬はベルトに集中すると、タカメダル・バッタメダル・そして緑のコアメダル…カマキリメダルをセットして、右手をベルトにスライドした。

「いくぞ！」

【タカ！カマキリ！バッタ！】

音声と共に光りに包まれると、竜馬はオーズの姿になった。だが、先程とは決定に違う箇所があった。タカヘッド、バッタレッグは同じだが、両腕部が緑の装甲になっていた。
カマキリアーム

「今度は歌が流れないな…」

筈はタトバコンボに発声していた不思議な歌を聞いていたが、今回は流れていないのを不思議と思った。

「タトバと純正のコンボ以外は、あの歌は流れないんだ」

「そうなのか…」

「さあ、もうすぐ開始だよ」

2人は話し終わると、イメージユとシベラーに再び向き合った。

『では……………始めっ！』

影宮が宣言するとシベラーは前進し、イマージュは上昇した。

『シベラー・ルミナス……参ります!』

『イマージュ・カイゼル……撃ちまくるぜ!』

イマージュは右腕のツインロングライフルを竜馬に撃ったが、竜馬はショートバーニアで加速してシベラーに迫った。

「まずは……カマキリだ!」

両腕のラインドライブが輝き、竜馬はそれを注ぎ込んだ。すると、両前腕部に装備されているブレード《カマキリソード》を展開して逆手持ちでシベラーに切り掛かった。

『なんのっ!』

シベラーも右腕のソードでカマキリソードを受け流すと、左腕のハンマーで殴り掛かった。

「よつと!」

だが竜馬は右足でハンマーを蹴り飛ばすと、左足でシベラーを踏み付けた。

『ぐあっ!』

踏み付けた瞬間バーニアを発動させて、シベラーを弾き飛ばした。

『何やってんだシベラー!』

イマージュは再び竜馬を狙おうとした。

「させるかあっ！」

『なっ！いつのまにっ！』

しかし箒がそれを阻止しようと、刀型近接ブレードで切り掛かった。

「（懐に入った！）これで……………っ！！」

懐に入ろうとした瞬間、箒は左から来た衝撃によって真横に飛ばされた。

『残念だったな侍オンナ！長大な銃火器が懐に弱いのは、大昔のことだ！』

そう……イマージュは懐に入れそうになった瞬間、左腕のロングキャノンの砲身を横に振って箒を飛ばしたのだ。

「これでは迂闊に入り込めないか……」

『では、ワタクシがお相手しましょう……』

「ッ！」

飛ばされたシベラーは箒に目標を変えると、イグニッション・ブーストを起動して一気に距離を詰めた。

「逃がすか！」

竜馬はバッタメダルとカマキリメダルを、青いコアメダル…ウナギメダル・黄色のコアメダル…チーターメダルに変更して右手をスライドした。

【タカ！ウナギ！チーター！】

すると、カマキリアームとバッタレッグが変化した。
両腕部は青い装甲、ウナギアーム脚部は黄色の装甲チーターレッグに変更された。
竜馬は脚部にエネルギーを送り込むと、太腿部分に付けられているマフラーからスチームが吹出し、ものすごいスピードでシベラーに追い付いた。

「待てっ！」

『なんという推進力！これがコアメダルの力ですか……』

シベラーが関心するなか、竜馬は両肩に装着された武器《電気ウナギウィップ》を取り出してシベラーに巻き付けた。

『なんとっ！』

「捕まえた！ウオオオッ！」

竜馬は力いっぱい電気ウナギウィップを振り回すと、シベラーをイマーシュに向けて投げ飛ばした。

『ちよちよちよ、こっちくんぐはっ！』

2体はぶつかって下降していくが、地表スレスレのところで姿勢制御をして地面に着地した。

「よし、いまなら!」

箒はシベラー達を追撃しようと地表に降り立った。

―ドツカアアアアン―

「なっ……うわっ!」

地表に降り立った瞬間、爆発が起こった。

「箒!」

竜馬は箒と同じ場所に降り立つと、イメージ達に目を向けた。

『掛かりましたね。このステージ帯には、ISしか反応しない《ランドマイン》を仕掛けていますよ!』

『オレ達はドロイドだからランドマインは反応しねえ仕掛けよお!』

イメージはそう言うと、両腕による乱射を行った。

「くっ!箒、一度離れよう」

「あ、ああ……」

2人はその場から急上昇して、弾丸の雨を避けた。

「厄介な仕掛けだなあ……」

竜馬はホークアイでステージを見渡すが、ランドマインは探知出来なかった。

「どうする？ 地表に降りると、また爆発を喰らうぞ……」

「……………おっ！ この組み合わせなら……」

竜馬はコアメダルの情報をディスプレイで見ていると、銀のコアメダル…サイメダルとゾウメダルの情報に目を向けた。

『おいシベラー。追い掛けなくていいのか？』

『追い掛けたところで2対1になるのがオチです。ここは、相手が接近したら仕掛けましょう……』

『分かったよ。お、噂をすればだ……』

イメージは見ると、竜馬達が再度接近していた。

『では、ワタクシは篠ノ之殿を……。イメージは竜馬殿を頼みます』

シベラーは箒に向かって飛び立った。

「それじゃあ箒、足止めの方を頼むね」

「ああ！……しかしそれで爆弾を把握出来るのか？」

「ああ、僕を信じて！」

竜馬はタカメダルとチーターメダルを変更すると、サイメダルとゾウメダルに変更して右手をベルトにスライドした。

【サイ！ウナギ！ゾウ！】

竜馬は頭部と脚部を変更した。

頭部は白銀のヘルメットにサイのような巨大な角が1本付いている
《サイヘッド》に、脚部は黒い装甲ソウレグに変わっていた。

「ハアアアッ！！」

竜馬はサイヘッドとゾウレッグにエネルギーを送り込みながら、そのまま地表に急降下した。

―ズドオオオオン！―

その瞬間、ゾウレッグによって巨大な地響きがステージに起こった。

『わっ！とっ！とっ！』

ステージに立っていたイマージュは大きな揺れによって体制を崩した。

「……見つけた、ランドマインの位置！」

竜馬はオーズから送られた地形情報を見ると、十数個の光り……ランドマインがあった。

ゾウレッグによる踏み付け技によって振動波を起こし、サイヘッドスオーストップの角が跳ね返った振動波をソナーのように感知して、ランドマインの場所を見つけたのだ。

「危ないモノは先に潰す！」

竜馬はサイメダルとウナギメダルを、緑のコアメダル…クワガタメダル・赤いコアメダル…クジャクメダルに変えてスライドした。

【クワガタ！クジャク！ゾウ！】

すると、サイヘッドとウナギアームは変化した。

頭部には、クワガタの顎をモチーフにしたアンテナ《クワガタヘッド》と両肩の後ろに垂れ下がった緑の巨大なツノのアンロック・ユニットを各1本ずつ形成しており、両腕の装甲は赤く左腕に手甲型エネルギー解放器が装備された《クジャクアーム》に変更された。

「ハアッ！」

竜馬はタジャスピナーをランドマインが埋まっている方に向けると、タジャスピナーはエネルギー弾を発射してランドマインを爆発させた。

『喰らいやがれっ！』

イマージュは銃口を向けて撃ってきたが、竜馬は急上昇しつつ巨大なツノにエネルギーを送り込んだ。するとツノは展開して、ツノの先が上を向いた事によってクワガタの顎のようになった。

「お返したっ！」

竜馬はツノの先っばから電撃を発生させて、イマージュに放った。

『アババババババッ！』

イマージュは電撃をもろに喰らってしまい、一時的に行動が停止してしまった。

「また動くようだけど……」

竜馬は上を見上げると、箒とシベラーが激しい戦いをしていた。

「でえええい！」

『ハアアアッ！』

箒の刀とシベラーのソードが互いにぶつかり合い、火花を散らしていた。

『流石は篠ノ之流……なかなかの腕ですね』

シベラーは一度間合いを取ると、箒は息を整えて再び構えた。

「いや、私はまだまだ修行が足りない。もっと強くなって……」

すると箒は、ちらつと竜馬の方に目を向けた。その時、若干頬は赤く染めているのをシベラーは見ていた。

『……成る程。しかし、竜馬殿は鈍感ですよ……。それも超のつく程の方です』

「っ！そ……それは……」

箒は一瞬驚くが一度目を閉じて直ぐ開くと、その瞳には決意が宿っていた。

「それでも、竜馬の隣に立ちたい！これからも……その先も！」

言い終わると、箒はシベラーに突っ込んで行った。

『フフッ…。応援しますよ、篠ノ之殿！』

同じく、箒を迎える為シベラーも突っ込んで行く……………その時だった。

「はあっ！」

ービュンッー

「何っ！消えた！」

箒は確かにシベラーを切り付けた。だがその感触は無く、シベラーは消えていた。

「いったい何処に……………っ！」

その時、箒は後ろに気配を感じると刀を横に薙ぎ払った。

ーガギンッー

「…光学迷彩か」

ぶつけた音が響くと、箒の目の前にシベラーが徐々に姿を現した。

『ほう……ルミナスのオールオーバーを見破るとは……』

「オール…オーバー？」

『御意』

シベラーはまた離れると姿を消した。

「ちっ……また消えた」

箒が言い終わると、何処からかシベラーの声が聞こえた。

『このルミナスが持つ機能です。ハイパーセンサーに反応しない完全隠蔽機能……』

箒はハイパーセンサーを最大にするが、シベラーを見つけれなかった。

『参りますっ！』

「っ！」

その言葉を開始に、箒はいくつもの攻撃を加えられた。

『これで……最後です！』

オールオーバーを起動しているシベラーは、箒の後ろに回り込み突っ込んできた。

「させないっ！」

『何……うおっ！まぶしい！』

シベラーは声の方を見ると強烈な閃光が目に入ってしまった、オールオーバーが解除してしまった。

「今だ……箒！」

「竜馬……！うおおおおっ！」

箒は姿を現しているシベラーに刀で切り付けると、シベラーの推進部に当たって徐々に下降していった。

「ナイス、箒！」

「竜馬……。その装甲はなんだ？」

箒は竜馬を見ると、頭部の装甲とユニットが変化していた。頭部には黄色いヘッドホンに水色のサングラスが付いている《ライオンヘッド》に、両肩横に浮かんでいる左右非対称のアンロック・ユニットが形成されていた。ちなみに、右は外側がギザギザな形のリング型ユニット、左は獣の顔型のユニットになっている。

「ああ……オールオーバーは確かに強力なステルスだけど、強烈なエネルギーを浴びせると機能を止めるんだ。だから、このコアメダルならいけると思って……」

竜馬は黄色いコアメダル……ライオンメダルを指差した。

「…これでテストは終了だな。2体は戦闘の続行が——」「いや、ただだよ」——「え？」

竜馬は箒の言葉を遮ると、下に視線をやった。箒は竜馬が見ている方を見ると、シベラーがイメージユに近寄っていた。

『大丈夫ですか、イメージユ…』

シベラーは若干電気を帯びているイメージユに近づくと、イメージユはゆっくりと言った。

『…まだ…痺れるけど……何とかな……』

『ワタクシは推進部をやられました…』

『…んじゃ、いっちょ“アレ”でもすつか？』

『“アレ”…ですか……。良いでしょう』

シベラーの言葉にイメージユはカイゼルの背中から出て、AI・カンドロイドに変形した。

『（…）もつと暴れたかったけど、仕方ねえ……。オレは一足先に戻るぜ…』

そう言いながら、イメージユはその場から転送されて戻った。

『……来ましたか』

シベラーが振り向くと、竜馬と箒がすぐ近くに停滞していた。

「シベラー……、次はどうするの？」

竜馬は次に来る事を知っていたが、あえてシベラーに向かって聞いた。

『今のワタクシは速く飛べません。しかし……』

シベラーは指を弾くと、カイゼルから音声が届いた。

【認証信号確認。カイゼル、変形展開を開始】

「来る！」

「なっ！竜馬！」

竜馬は箒の前に回ると、箒の腕を掴んで抱き寄せた。そして、そのままゾウメダルを青いコアメダル…タコメダルに変えてスライドした。

【ライオン！クジャク！タコ！】

すると、ゾウレッグは青い装甲の脚部タコレッグに変わり、エネルギーを注ぎ込んだ。その時だった……

「飛ばされないで！」

「あ、ああ！」

シベラーはカイゼルと共に光りに包まれると、強烈な暴風が発生して竜馬達を襲った。

しかし竜馬がタコレッグにエネルギーを注ぎ込んだ事で、地表でも空中でもその場所に留まる事が出来る《オクトスパイク》が発動していた。

「……おさまったようだね」

竜馬は暴風がおさまった事を確認すると、箒に話し掛けた。

「……箒？」

竜馬は返事をしない箒を見ると、箒は顔を真っ赤にしていた。

（り、竜馬……せ、積極的過ぎるぞ！ まま……ま、まだここ心の準備ががが……！）

「……大丈夫？」

「っ！ あ、ああ……。助かったぞ、竜馬」

「これくらい……ね。でも、もうすぐ終盤だ……」

竜馬はシベラーの方に目をやると、シベラー……もといルミナスはカイゼルの装甲を身に纏い空中に停滞していた。

『ルミナス、カイゼル・アームズとの合体を確認しました。………お待たせ致しましたね、竜馬殿』

「いや、何となくそれをすると思ったよ。それに、僕が使っていないコアメダルも残り3枚だしね……」

そう言うと、竜馬はベルトのコアメダルを全て変更した。ライオンメダルを青いコアメダル…シャチメダルに、クジャクメダルを白銀のコアメダル…ゴリラメダルに、タコメダルを赤いコアメダル…コンドルメダルに変更してスライドした。

【シャチ！ゴリラ！コンドル！】

ベルトから音声が鳴り終わると、全ての装甲が変更された。

頭部は背鰭のような突起と2個のライトが付いているヘッドライト《シャチヘッド》と背中^{ゴリバコーン}に2本のボンベとホースが形成していた。

更に両腕は巨大なガントレット状^{ゴリラアーム}の武器が装着された銀色の装甲に、脚部の装甲には爪先と踵に金色の爪と《ラプタードエッジ》^{ストライカーネイル}が備わっている《コンドルレッグ》に変更されていた。

『おい竜馬！』

「影宮さん？」

すると、プライベート・チャンネルから影宮が話し掛けてきた。

『今、使ってるコアメダルが最後だな。さっき京水から送られた武器をオーバースにインストールしたから、使ってみな…』

言い終わると、竜馬の目の前に送られた武器情報が送られた。だがそれを見て、竜馬は知っていた。

「《ライドベンドー》！」

そう…可変型自販機ライドベンドーだった。

『自動操縦可能だってよ。まあ使ってみてくれ』

「分かりました」

影宮は通信を切ると、次に箒に通信回線を開いた。

『箒ちゃん。もうすぐ終わるところで申し訳ないけど……、箒ちゃんはその場で待機してくれ』

「何故ですか？まだ私は戦えます…」

『今から高速戦闘に入るからな。その打鉄じゃあ無理だろうっねー』

「そ、そうですか…」

そう言われて、箒はしょんぼりとした。

『……お話は済みましたか？』

一方、シベラーは竜馬達が影宮との通信を終わらせるのを待っていた。

「ああ。待たせたね」

竜馬はすぐ横にベンダーを呼び出すと、セルメダルを投入してバイク形態にした。

『では……行きます！』

シベラーはカイゼルの大型ブースターを起動すると、ものすごい速さで飛び立った。

「こっちも……行くかな！」

竜馬もライドベンダーに乗ると自動操縦にしてシベラーを追い掛けた。

（竜馬……）

第はその様子を見て、空を見上げていた。

第4アリーナ・Aピット

「いい具合だな……」

一方、Aピットにいる影宮はオーバーズのデータを取っていた。

「……………」

しかし、千冬はモニターに映る竜馬を見て考えていた。

（あれほどの装甲を変えるIS……聞いた事がないな。さらにメダルの組み合わせで戦況を有利に進める技術と戦い方……。竜馬、お前は……）

すると、千冬は2年前を思い出していた。…竜馬と数年ぶりに会った懐かしさと、竜馬に起こった暗い過去を……。

「…織斑先生？」

「……！ああ、どうしましたか？山田先生……」

千冬は真耶の言葉に気付くと、真耶は話し続けた。

「大丈夫ですか？何か考え事をしていたみたいですけど……」

「大丈夫だ。それより、何か動きがあるようだ」

千冬は再びモニターを見ると、シベラーが高速で竜馬に突進をしていた。だが竜馬は回避すると、後ろに回り込んだ。

「あのスピードを何とかしないと、竜馬は勝てんな」

千冬はコーヒを飲みながら、モニターの竜馬を見た。

第4アリーナ・ステージ

「くっ……やっぱり速いな……」

現在竜馬はシベラーの後ろにいたが、シベラーのスピードに付いてくのがやっとだった。

「何かないか……」

竜馬は装着しているコアメダルの情報を調べていると、シベラーのスピードが上がって竜馬を引き離れた。

『この距離なら……』

シベラーは直ぐさま反転し、両腕の銃口を竜馬に向けて撃ってきた。

「うおっ！」

だが竜馬は回避すると、一旦距離を取った。

「ふう……危なかったなあ………ん？」

すると、竜馬はディスプレイに映っている情報を見た。

「シャチメダル……。成る程、やってみる価値はあるか……！」

情報を読み終えた瞬間、竜馬は反転してシベラーに突っ込んで行った。

『何か仕掛けますか………だったら、返り討ちにするまでです！』

それを見たシベラーも、竜馬を迎え撃つため突っ込んだ。

『ハアアアアアッ！』

ぶつかる間際、竜馬はシベラーのすぐ横を通り過ぎるその時だった。

「………今だ！」

直ぐさま竜馬はポンベにエネルギーを送り込むと、ホースから水が噴出してシベラーに浴びせた。

『水？そのような攻撃でワタクシがやられるとでも……』

「………フッ」

『………なにを……。ッ！』

竜馬は笑みを見せた瞬間、シベラーは異変を感じた。

『何っ！全システムが機能低下！ブースター、オールオーバー、更にライフルが使用不可！……………あの水か！』

シベラーは急な事態に慌てたが、異常の原因をすぐに見つけた。

「凄い効き目だな、この《カムイ》って…」

竜馬はホースを握りながら、シャチメダルに載っていた情報を思い出す。

カムイ……ポンベに入っているナノマシン入りの水で、相手に浴びせるとシステム障害を起こしたり、武器や特殊武装等を使用不可能にする特殊機能である。

「今がチャンス！」

竜馬はライドベンダーから飛び降りると、シベラーの懐に向かって行った。

『ッ！甘いですよッ！』

シベラーは懐に入られそうなところで、右腕の砲身を横に降って竜馬にぶつけようとした。

「それは効かないよ！」

だが竜馬はコンドルレッグにエネルギーを送り込むと、左足を蹴り上げて爪先にあるストライカーネイルで砲身を真っ二つに切り落とした。

『くっ…!』

「まだまだあ!」

更に、右足を踵落としの要領でラプタードエッジから真空波を放ち、シベラーの左腕の砲身を根元から切り落とした。

『ぐあっ!』

「これで最後!」

竜馬はシベラーを踏み付けて落下させると、ベルトに集中してからスライドした。

【SCANNING CHARGE】

音声の後、竜馬は輝きを放っている両腕をシベラーに向けて前にだすと、装着されていたゴリバゴーンはロケットパンチのように射出する《バゴーンプレッシャー》を繰り出した。

『ぐあああっ!』

シベラーはバゴーンプレッシャーに直撃すると、ルミナスの背中からシベラーは出てきた。

「よつと…」

竜馬はシベラーをキャッチすると、ルミナスは機能を停止して地表に落ちる瞬間転送された。

『「Ｔ　Ｔ」参りました…』

「……ふう。影宮さん、終了しました」

『ご苦労さん。ピットに戻って来てくれ』

竜馬は指示を受けると、簾のもとに向かった。

夕方 寮

第４アリーナでの性能テストを終えて、竜馬と簾は部屋に向かっていた。

「ふう…… やつと終わったあー」

竜馬は背伸びをしていると、結果を思い出していた。
性能テストの結果……。

「コアメダルの機能がある程度使い熟してたな。もっと戦って、デ

「タをたくさん取ってくれ！」

……と、影宮が言っていた。

「箒、今日は一緒に戦えて楽しかったよ」

「そ、そうか。それはなによりだ」

「…箒、顔が赤いけど大丈夫？」

「だ、大丈夫だ！ほら、部屋に入るぞ…」

真っ赤な顔をした箒は、自分達の部屋に入った。すると……

『「――」お帰りなさいませ、竜馬殿、篠ノ之殿』

竜馬の机の上に、シベラーがいた。

「シベラー！どうしてここに？」

『「――」今日から竜馬殿と共にいると、マスターから任務を与えられました。ですので……』

『「――」今日から、よろしくお願いします』

シベラーは竜馬達に頭を下げると、竜馬は近づいていった。

「そうだったんだ。こちらこそ、今日からよろしく」

『「――」はい……』

竜馬はシベラーと握手すると、親友の証をした。

「私も、今日からよろしくだな」

『「っ」はい！篠ノ之殿もよろしくお願いします』

『「ー」<「竜馬殿の事、頑張って下さいね」

「なっ！」

シベラーはウインクをしてから言うと、箒は顔を赤くした。

「ななな、何を言うんだ！」

「バシッ——」

『「。。」ひでぶっ！』

「ドコォン——」

「……あ」

箒は恥ずかしさのあまり、シベラーにビンタをして壁に減り込ませてしまった。

「シ、シベラー！」

そして、竜馬の叫びが寮内に響いた。

04話【ドROIDとテストと亜種連発】（後書き）

とりあえずコアメダル15枚を一気にだしました。

コアメダルの詳しい性能は、IS設定で記載しておきます。

05話【日曜とデパートと竜馬の過去】（前書き）

出来ました！けどぐたぐたです……

05話【日曜とデパートと竜馬の過去】

夕方 竜馬・箒の部屋

「それでさあ…その時影宮さんが……」

「ふふふっ…。それは面白いなあ……」

夕日が差し込む部屋で、竜馬と箒は互いの身体を寄せ合って談笑していた。

「しかし良かったのか？今日は影宮さんと約束をしていたのだろう？」

「いいんだよ、それはまた今度で……。今日は箒と一緒に過ごしたいんだ…。これからも……いつまでも……」

そう言った竜馬の頬は、わずかに赤く染まっていた。それは……夕日の色だけではないように見えている。

「竜馬……」

「箒……」

2人しかいない部屋で、お互いに相手だけを映した瞳……。そこに言葉はいらなかった。

「ん……」

箒は目を閉じると、やや唇を上向きに突き出した。竜馬もそれを確認すると、ゆっくりと顔を近づけた。
オレンジ色の光景の中、2人の影が徐々に重なって……………

早朝 竜馬・箒の部屋

「……………むっ……………？」

箒は目を覚ますと、天井を見ていた。

現在日曜の早朝6時40分。普段は朝練をしている箒だが、昨日のオーバーズの性能テストに参加したので今日は休んだ。

「……………」

箒はまだ半分寝ているが、数回瞬きをしたところで意識が戻ってきた。

「夢……………か……………」

夢だと分かってがくりと頭を下げると、箒は隣のベッドを見た。

「……………竜馬？」

しかし、竜馬の姿は無かった。

「…何処に行つたんだ？」

箒はベッドに起き上がると、竜馬の机にシベラーが缶モードで置かれていた。

「……………」

【A I K A N】

少し考えた後、箒はシベラーを起動した。

「——」おはようございます、竜……………」

「「？」……………篠ノ之殿。何故、篠ノ之殿がワタクシを起動したのですか？」

「……………起きたら竜馬がいなかったのだが、何処にいるか知ってるか？」

「「——」あ……。おそらく早朝トレーニングに行かれてますね」

「そうなのか？」

意外な言葉に、箒は少し驚いた。

『「まあ、日曜早朝の日課になってますね。陰ながら努力してるのですよ……」』

うんうんとシベラーは納得しているが、箒はこの情報を聞いて閃いていた。

（なるほど。竜馬も頑張っているん……はっ！これは好機ではないか！私も起きれば、竜馬とふたりきりで朝トレが出来る！）

『「……」……』

シベラーはニコニコで箒を見ていると、箒はそれに気付いた。

「……はっ！な、何だその目は……」

『「……」いえいえ、何もありませんよ』

シベラーは窓から空を見ると、徐々に朝日は輝きだしていた。

学園内

「はぁ……はぁ……はぁ……」

一方、竜馬は学園内をランニングしていた。

「…あと少し！」

竜馬はスピードを上げ、寮の裏に到着した。

「ふう……。これで…終わり……」

竜馬は首に掛けていたタオルで汗を拭くと、水道が目に入った。

「あー…冷たくていいねえー…」

タオルを水で濡らすと、シャツを脱いで身体を拭いていた。

「朝から自主トレか…」

「えっ？」

突然声を掛けられ竜馬は後ろに振り向くと、そこには千冬がいた。

「おはようございます、織斑先生」

「おはよう。日曜なのに早いな」

「まあ日課ですから。それにオーバースも強くなったから、僕ももっと強くないと…」

そう言うと、竜馬はグッと背筋を伸ばした。

「そうか。……………」

すると、千冬は竜馬をまじまじと見ていた。

15歳の男子よりも身体は鍛えられているが筋肉質ではなく、程よく筋肉が付いていた。

「…先生？」

「ん？ああ、すまない…。それより、もうそろそろ戻れよ」

そう言うと、千冬はその場から離れていった。

「……変な千冬さん。……ああっ！」

竜馬は腕時計を見ると、7時まであと6分だった。

「早く戻らないと！」

竜馬はシャツを着ると、急いで寮に戻って行った。

「ただいまー」

『「――」竜馬殿、お帰りなさい』

竜馬は部屋に戻ると、シベラーが迎えてくれた。

「あれ、箒は？」

『「――」篠ノ之殿はシャワーですよ』

「そつか。そうだ！もうすぐ始まるんだった！」

竜馬は机のiPadを起動すると、テレビを開いた。

〈10数分後〉

「ふう……。竜馬、帰っていたのか」

「ああ、ただいま……」

シャワールームから箒が出てきたが、竜馬はiPadで何か見ていた。

「…何を見ているんだ？」

第も画面を覗くと、特撮ヒーロー番組を放送していた。

『みんな、行くぞ！……変身！』

『『『変身！』『』『』』

5人の俳優が敵に囲まれると、カードデッキのような物を手に取って言うと、5人はヒーローになった。

『レッドリュウキ！』

『ブルータイガ！』

『グリーンゾルダ！』

『ブラックナイト！』

『ホワイトファム！』

『鏡界戦隊！』

『『『『ミラーレンジャー！』『』『』『』』

『親衛隊長シザース！お前達、時界帝国の好きにさせない！』

赤い仮面のヒーロー…レッドリュウキは黄色い敵…親衛隊長シザースに指を差して宣言すると、5人はそれぞれカードを出して機械に入れた。ちなみに、レッドリュウキ、ブラックナイト、ホワイトフアムは剣のカード、グリーンゾルダは銃のカード、ブルータイガは巨大な爪のカードだった。

【【ソードベント】】

【シュートベント】

【ストライクベント】

5人の機械から音声が流れると、それぞれカードに描かれた武器を持っていた。

『はあああああ！』

そして、5人は敵をどんどん薙ぎ倒していった。

「…何だコレは」

「何って、“鏡界戦隊ミラーレンジャー”だよ……」

鏡界戦隊ミラーレンジャーとは、スーパー戦隊シリーズ23隊目の作品。鏡の世界ミラーワールドから来たミラーレンジャー達が、地球侵略をたくらむ時界帝国の大帝オーディン達と戦う、子供や女性に大人気の特撮ヒーロー番組である。

「……まだそんな物を見ていたのか」

「見始めたのは最近だよ。前のシリーズはISの訓練とかで見てないよ……。お、リュウキの十八番だ！」

「そうか。……………」

箒はテレビを見てはしゃいでいる竜馬を見て頬が若干赤かった。明るく笑う竜馬を見て、胸がキュンとなっていた。

（か、かわいい……！普段の竜馬も良いが、コレはなかなか……）

「……箒、どうしたの？」

「い、いや……何でもない！……それより、食堂に行くぞ」

箒は竜馬の手を掴むと、そのまま扉まで引つ張った。

「ちょ、箒！もう少しで終わるから待つ——「駄目だ」——てって、ええっ！シ、シベラー！録画は？」

『「っ」大丈夫、出来てますよ。いつてらっしゃいませ竜馬殿、

篠ノ之殿』

「ああ！」

第は竜馬を連れて食堂に向かった。

『「——」さて…ワタクシは続きますか…』

食堂

「はあ…、もうエンディングかな…」

竜馬は番組を気にしながら朝食を取っていた。ちなみに、2人共和食セットである。

「録画をしているのだろう。それを見れば良いだろう」

「それはそうだけど——」「おはようございます、竜馬さん、篠ノ之さん」——…ん？」

竜馬は挨拶された方に向くと、セシリアが朝食のトレーを持って立っていた。

「おはようセシリア」

「おはよう…」

「隣り、よろしいですか？」

「ああ、いいよ」

竜馬は了承すると、セシリアは竜馬の隣に座った。ちなみに、セシリアの朝食は洋食セットである。

「竜馬さん。今日はお暇ですか？」

「まあ午前中は勉強をするけど……午後は今の所、暇だね」

竜馬はそう言うと、焼鮭を頬張った。

尚、竜馬が言った勉強とは、一般教科の事である。IS学園生とはいえ高校生なので、勉強は必須だ。

「でしたら午後は、わたくしと一緒に出掛けませんか？」

「ぶっ！」

「…箒？」

セシリアの言葉に箒は飲んでいた緑茶を吹いてしまい、食堂にいた女子が一斉に振り向いた。

「…で、何処に行くの？」

竜馬は濡らしてしまったテーブルを拭きながらセシリアに言った。

「実は、駅前のデパートでショッピングをしたいのですが、他の人達は用事がありまして一緒に行けなかったですわ」

言い終わると、セシリアは小さくため息をついた。

「わかった、いいよ」

「本当ですよ!？」

「僕も寄りたいたところがあるしね……って、セシリア？」

竜馬はセシリアを見ると、セシリアは嬉しくて頬を真っ赤にしていた。

（ま、まさか夢と同じ事が起こってしまうなんて……！今日はいいい日になりそうですわ!）

セシリアは今日見た夢を思い出した。それは、竜馬とふたりつきりで出掛けて、最後に竜馬が告白してキスをしようとした夢だった。

「…セシリア、顔が赤いよ？熱があるんじゃない…」

「…っ！いいえ！大丈夫ですわ!で、では……何時に待ち合わせをしま——「んっんん!」——…篠ノ之さん？」

セシリアの話を遮るように、篤はわざとらしく咳込んだ。

「篤、どうしたの?」

「い、いや……。おおそつだ！私も買いたい物があつたのだつた。だから、私も行つても良いか？」

「なっ！！」

その言葉を聞き、セシリアは驚いた。

「そつなんだ？それじゃあ皆で行こうか、セシリア」

「え、ええ……。良いですわよ……（し、篠ノ之さん……。わたくしと竜馬さんのデートを邪魔するなんて！）」

「あ！いたいた」

セシリアが心の中で不満を言っていると、1人のロングヘアの女子が近づいて来た。

「え、部長！」

「ん？知つてる人？」

「ああ。剣道部部長の白鳥先輩だ」

「白鳥 真也まへよ。よろしくね」

真也は竜馬とセシリアに挨拶すると、箒に言った。

「そつだ篠ノ之くん。今日の昼は、ちよつと遅いけど新入部員の歓迎会をするからね。何処にも行っちゃダメよ」

「え！あ、あの部長——」「い・い・わ・ね・！」「——はい……」

「よしっ」それじゃ、私は戻るわね」

真也の笑顔によつて箒は渋々了承すると、真也は食堂を出た。

「……………」

「箒？」

竜馬は箒に声を掛けたが返事はなく、真っ白になっていた……。

竜馬・箒の部屋

朝食後、竜馬と箒は部屋に戻るとそれぞれの机で勉強をしていた。

（…さ…最悪だ…）

だが箒は勉強に手付かずで、先程の出来事に嘆いていた。

（私もまだ竜馬とふたりつきりで買い物も行った事がないのだぞ！
くっ、セシリアめ……！それに竜馬もだ！何故こんな日に限って暇

なんだ！)

箒は心の中で叫ぶが、肝心の竜馬は……。

「シベラー、これってどうするの？」

『「——」そうですね。この文に鍵がありますね』

「あつ、そうか！ありがとうシベラー」

『「っ　っ」いえいえ』

……真面目に勉強していた。すると、竜馬は立ち上がった。

「シベラー。ちょっとトイレに行ってくるよ」

『「——」分かりました』

そして、竜馬は部屋を出た。

『「——」……篠ノ之殿、どうかしましたか？』

「……………」

『「？　？」篠ノ之殿？』

「……………」

シベラーは何度も箒に話し掛けるが、返事はなかった。

『――』………』

『「>”<」篠ノ之殿――!』

「っ!わ、私はいたい……」

『「- -」どうしました?勉強も手付かずなんて……』

「………実は」

箒は食堂で起こった事を話した。

『「――」成る程、オルコット殿が………』

「ああ……。竜馬としては友人の付き合い程度に思っているが、相手はあのセシリアだ。恐らく積極的に竜馬を誘惑するに違いない!」

箒は机を叩くと、シベラーを持ち上げた。

『「。。」し、篠ノ之殿!』

「頼むシベラー!2人の様子を偵察してくれ!」

『「;- -」て、偵察ですか……』

「邪魔をするんじゃないんだ。ただ、このままだったら私が落ち着かんのだ……。だから頼む!」

箒はそう言いながら、シベラーを強く揺すった。

『「× ×」わわ、分かりましたから、そんなに揺らさないで下さい篠ノ之殿！』

シベラーは了承するが、竜馬が戻って来るまで揺さ振られるのだった。

↓数時間後↓

昼 ゲート前

「…まだ来てないか」

あれから数時間後、食堂で昼食を取った竜馬は私服に着替えてゲート前にやって来た。

「お待たせ致しましたわ、竜馬さん」

すると、すぐにセシリアがやって来た。勿論、彼女も私服だ。

「いや、僕も今来たところだよ」

「そうでしたか。それでは、行きましょっか」

すると、セシリアは竜馬の腕をするっと取り、そのまま歩き出した。

「……なあセシリア」

「何ですか？」

「……いや」

セシリアの喜んでいる顔を見て、竜馬は何も言えなかった。

（ふふっ、竜馬さん、わたくしの積極的なアピールに恥ずかしがってますわね。ここで篠ノ之さんとの差を一気に引き離しますわ！）

セシリアは心の中で燃えていると、竜馬は……

（うーん……。この姿勢じゃあ歩き難いなあ……。でもセシリアは喜んでるみたいだし……）

……いつもの事だった。

『「——」竜馬殿、オルコット殿と腕を組んで出発いたしました』

『う、腕だと！』

『「○○」ッー!』

同時刻、上空75mにてシベラーはタカ・カンドロイドに乗っていた。数時間前、箒に頼まれて竜馬達の様子を見て箒に報告していたのだ。

『「……」し、篠ノ之殿。声を抑えて下さい……』

『うつ……すまん……』

『「——」ふむ……。どうやらバスに乗る見たいですね』

『そうか……。では、引き続き様子を探ってくれ』

『「——」御意……』

すると、箒は通信を切った。

『「「……」まったく……。竜馬殿の鈍感には参りますねえ………」』

シベラーは不満を言いながら、竜馬達の後を追った。

竜馬・箒の部屋

同じ頃、箒はバッタ・カンドロイドの電源を切ると溜め息をついていた。

（……………私は何をやっているんだ……。こそこそするのは私には似合わない！）

すると、箒は部屋を出た。

「こうなったら、白鳥部長に話を——「おい、篠ノ之くーん！」——って、部長!？」

部屋を出た瞬間、真也が箒に向かって来た。

「どうしたのですか？」

「いやー。食堂を使う為の申請が下りなくて、歓迎会の場所が変更したんだよ。場所は駅前デパート近くのカラオケボックスになったから、一緒に行こうと思ってね。」

真也はウィンクすると、箒は心の中で喜んでいた。

（その場所って、竜馬達の近くだな。これで竜馬に近づく事が出来る！それで、帰りには買い物に付き合ってもらおうとしようか！）

「……………おい、篠ノ之くーん」

「はっ、はい！」

「ボーっとしてたけど、大丈夫？」

「だ、大丈夫です！それでは、すぐ着替えますので先に行つて下さい！」

そう言うつと、篤は部屋に戻つて服を着替えに行つた。

「……んじゃ、先に行きま——」「お待たせしました！」——つて、早っ！」

バス停 駅前デパート前

その頃、竜馬達はバスを降りたところだつた。

「そういえば、竜馬さんは何処に寄りますの？」

「ああ、僕は——」「イーじゃん、遊びに行こうよ——…ん？」

竜馬は声のする方を向くと、セシリアもそこを見た。すると、モニユメントの前で2人の遊び人といった風体の男が、1人の女の子に声を掛けていた。

「まあ、なんて品の無い方たちなんでしょう……」

「……セシリア、ちょっと待ってて」

「えっ、竜馬さん!」

そう言いつつ、竜馬はモニュメントの前まで歩いて行った。

「俺、向こうに車あるからさあ。どっかパーッと遠くに行こうよ!」

「……………（はぁ……………）」

眼鏡を掛けたセミロングの女の子は無言だったが、心の中で溜め息をついた。

（新作のDVDを買いに来ただけなのに……………なんでこんなめに……）

「なあ、行く——」
「おお、ここにいたんだ!」——「……え?」

チャラ男Aは声の方に振り向くと、竜馬が女の子の前までやってきた。

「いやあ、ちょっと用事が長引いてね。ゴメン!」

「え……」

竜馬は手を合わせて謝ると、小声で言った。

「（僕に合わせて）」

「あ……。っ！」

女の子は竜馬の言葉を聞いた瞬間、右手を竜馬に掴まれた。

「行こうか、向こうで友達が待ってるよ」

竜馬は女の子に笑顔で言い、セシリアの方を指差した。

「は、はい……」

女の子は頬を赤く染めるなか、竜馬はチャラ男達に青い缶を渡した。

「いやーゴメンね。連れが退屈しないように話し相手になってくれて。コレは御礼だから、それじゃ！」

「え……」

「ど、どうも……」

そして、竜馬は女の子を連れてセシリアのところに戻った。

「……もういいかな」

竜馬は戻ってくると、女の子の手を離した。

「大丈夫でしたか？」

「あの……えつと……はい……。あ、ありがとう……」

セシリアは声を掛けると、女の子は戸惑いながらも竜馬に御礼を言った。

「いや、当然の事をしたまでだよ」

そう言うと、竜馬は先程のチャラ男達を見ていた。すると、チャラ男達は竜馬に渡された缶を開けようとしていた。

「竜馬さん、あの方達に何を渡したのですか？」

「ああ、あれは——」「ギヤアアアアアア——」——おっと

竜馬の言葉を遮るように、チャラ男達は叫んでいた。よく見ると、チャラ男達の腕に何かが巻き付いていた。

「な、なんですか？」

「あいつらにあげたのは……コレだよ」

竜馬はセシリアに、先程チャラ男達に渡した青い缶を見せてプルタブを開けた。

【UNAGI KAN】

『ウナギー！』

すると、青い缶…ウナギ・カンドロイドが竜馬の手の平に乗った。

「捕縛用のカンドロイドで、相手に巻き付いて電撃をおみまいするんだ」

「そうなんです…。まあ、あの方達には当然の報いすわね」

「……ふふっ」

2人の会話を聞いて、女の子は小さく笑った。

「それじゃあ、僕達は行くね」

「じぎげんようっ」

竜馬達は女の子と別れると、デパートの中に入って行った。

「……………かつこいい」

しばらく女の子は、頬を赤く染めながら竜馬の背中を見ていた。

デパート 5階

「あの、竜馬さん……どうですか？」

現在、5階のレディースでセシリアが持っている服を、竜馬に見せていた。

「うーん……。僕的にはこっちかな」

「そ、そうなんですか。では、こちらにしましょう」

セシリアは竜馬に選んでもらった服をレジに持って行った。

（楽しそうだなによりだな。さて……）

竜馬は考えながら携帯をいじっていると、あるサイトを見ていた。

（今月発売の《G3マイルド》……。コレは買わないとねえ……）

竜馬は今月発売の模型……ロボットアニメの《機動警察G3》に出て来る量産機、G3マイルドの情報を見て小さく微笑んだ。

「お待たせしましたわ」

セシリアは紙袋を持って戻って来た。

「それじゃあ、行こうか」

2人は店を出ると、下に降りていった。

『「――」ふむ……。オルコット殿も中々やりますねえ……』

一方シベラーは物影に隠れて様子を見てると、箒から通信が入った。

『私だ。今はどうなっているんだ？』

『「？　？」おや？篠ノ之殿、前より電波が強いのですが……』

『ああ。それがだな……』

箒は歓迎会の事をシベラーに言った。

『「♪　♪」カラオケボックスって、デパートの隣にある場所ですよね？』

『ああ。今はトイレで通信しているが、もう戻らなくては』

『「――」分かりました。引き続き様子を伺います』

言い終わると通信は切れて、シベラーは再び2人を見張っていた。

2階

「なっ！今日は臨時休業……だと……！」

2階にやってきた2人は模型店の前にいたが、生憎臨時休業だった。

「……竜馬さんが寄りたい所って、ここですか？」

「……まあ、ね。でも今日は諦めるか……。セシリア、次はどこ行く？」

「でしたら、生活雑貨を見に行きましょうか」

「ああ、いい——「おい、あれって！」——ん？」

近くにいた人が窓の外を見て驚いていた。竜馬達も外の騒ぎを見てみると、デパート近くにあるアニメショップから火が見えていた。

「どうやら火事の様ですわね……」

「……………」

「……竜馬さん？」

セシリアは竜馬を見ると、竜馬は目を細めて火事現場を見ていた。

「……人だ」

「え！」

「いま、2階の窓から人影を見たんだ！」

そう言いながら竜馬はオーバースのドライバーを部分展開し、シャチメダル・トラメダル・バッタメダルをはめ込んで右手をスライドした。

【シャチ！トラ！バッタ！】

音声と共に竜馬はシャチヘッドのみ部分展開をすると、ヘッドライトにエネルギーを送り込んだ。すると、目の前に青い空中投影ディスプレイが浮かんでいた。

「……やっぱり、逃げ遅れた人がいる！」

ディスプレイに映っているのは、建物を透かして反響定位の様に熱源体が映っていた。これがシャチヘッドのもう1つの能力である。オルカエコー

「セシリア、ここで待ってて……」

「えっ、竜馬さん！」

竜馬は直ぐさま火事現場に向かった。

火事現場前

一方、現場の前には人集りがあった。その中には、騒ぎを聞き付けてIS学園剣道部の姿もあった。

「火事の原因って何だろう？」

「話によると、1階にある古い配線から発火したみたいよ……」

「……竜馬」

人集りの話を聞いて、篤はシベラーに連絡をした。

『篠ノ之殿！現在どちらに』

「今は火事現場の前にいるのだが……どうしたんだ？」

『先程、竜馬殿が火事の中に人が取り残されていると言って、そち

らに向かつてます。見かけ次第、止めて下さい!」

「何っ!」

それを聞き、箒は2階を見た。1階は完全に火が回り、入る事さえ難しかった。

「まだ人がいるなん——おい、あれ!」——っ! 竜馬っ!」

箒はギャラリーの1人が指差す方を見てみると、そこにはバケツに水を入れた竜馬が走ってきた。そして竜馬は水を被ると燃えている店内に入っていた。

「竜馬!」

『「——」篠ノ之殿!」』

「篠ノ之さん!?! どうして貴女が…」

「セシリア、シベラー! 竜馬が、あの中に!」

「何ですって!」

『「〇。」ええっ!」』

アニメシヨップ

竜馬は入ってすぐヘッドライトとボンベを部分展開すると、カムイを放水して炎を鎮火していた。

（ある程度消さないと2階に行けない！）

すると2階の階段の火が鎮火されるのを確認して、竜馬は上がって行った。

「誰かいなか！」

2階に上がると、竜馬は大きく叫んだ。

「…ゴホッ、ゴホッ……」

「っ！」

竜馬は音がした方をオルカエコーで見た。すると、そこに人がいた。

「大丈夫か……って、君はさっきの！」

竜馬が見たのは、少し前に助けた女の子だった。女の子は煙を吸っていたので、大分弱っていた。

「……あな……たは……」

「助けに来た。今からここを……っ！」

竜馬は階段を見ると、火が上がってきた。

「ちっ……。だったら……」

竜馬は近くの窓を開けると手に1本、回りに数十本のタコ・カンドロイドを転送した。

「……そらっ！」

【TAKO・KAN】

『タコー！』

竜馬は変形したタコ・カンドロイドを窓に投げると、残りのタコ・カンドロイド達も変形して外に飛び出た。

「しっかり捕まっててよ……っ！」

竜馬は女の子を抱えると、窓から跳び出た。

火事現場前

「何か来たぞ！」

ギャラリーの1人が、窓から放り出された物を指差した。

「あれは！」

『「〇　〇」タコ・カンドロイド！』

すると、タコ・カンドロイド達が集まってなだらかな坂になった。そして、窓から竜馬が跳び出て来た。

「「「キャアアア！」」」

ギャラリーが叫ぶなか、竜馬はタコ・カンドロイド達に着地してゆつくり滑った。

「……ふう」

「「「竜馬^{さん}っ！」」」

筈とセシリアは竜馬に駆け寄ると同時に、消防車と救急車が到着した。

「数十分後」

火事現場跡

あれから数十分後、炎は無事鎮火されたが、竜馬と女の子は念のため病院に搬送された。

「セシリア、何故止めなかったんだ！」

現場跡では箒がセシリアに、何故竜馬を止めなかったのかを問い質していた。

「止めていたら、竜馬はあんな無茶をしなかったんだぞ！」

「ですから！わたくしも最初は戸惑って…」

「……」2人共、少し落ち着いて下さい…」

シベラーは2人に割って入った。

「……」竜馬殿が無茶するのも無理がありません。あの事件が原因で……」

「あの事件？」

第はシベラーの言葉を聞くと、シベラーは話し続けた。

『「- -」あれは3年前……竜馬殿がマスターと白黒会長の仕事に付いて行った時です。小さな村で数ヶ月住んで、その時にも親友と呼べる人ができました……』

『「- -」しかし、偶然にもその村でテロに巻き込まれたんです……』

「テロ……」

『「- -」はい。……お世話になってた村の人達と協力して何週間かもちました。でも、テロは激しくなり、食料もなくなり、竜馬殿達はボロボロになりました……』

「「………」」

2人はシベラーの言葉を聞き、いつも優しい笑顔をする想い人の壮絶な過去に驚愕していた。

『「- -」そして起こりました。その村で最初の親友が、竜馬殿の目の前で亡くなってしまいました……』

「「………！」」

『「- -」その後のテロを収めたのがドイツ軍と、当時決勝戦まで進んでいた千冬殿でした……』

「織斑先生が……」

『「――」千冬殿は白黒会長やマスターと知り合いですからね。しかも、弟のように仲が良かった竜馬殿もいたとしたら、真っ先に来る理由になりますね……』

第は驚くと、セシリアはある事を思い出した。

「では、あの決勝戦棄権の理由は！」

『「――」……はい』

シベラーは小さく頷いた。

当時、第1回IS世界大会優勝者の千冬は大会2連覇も夢じゃないと誰もが思っていた。しかし決勝戦棄権という誰も思えなかった行為が、大きな騒ぎになっていた。

『「――」その時から、竜馬殿は自分の無力差に悔やんでいました。自分のせいで織斑千冬殿の経歴に傷を付けてしまった……あの時ああしていれば、こんな事にならなかったのではないかと……、束殿に出会うまではいつもそんな風でした……』

あれから1年後、竜馬は束と出会いISを扱う事が出来ると言われ、メルダに置いてあったISを動かした。

「……そうだったのか……」

「竜馬さん……」

すると、シベラーは空を見上げた。

『「――」ISを手にしてからも、目の前で危険にさらされてい

るモノがいれば、竜馬殿は命を危険にさらしてまでその手で護るでしょう……。それは、決して戻る事は無い過去の悔しさを償うように……』

寮 竜馬・篤の部屋

「……………」

篤達は寮に戻ると、部屋のベッドには竜馬が寝ていた。とくに外傷は無かったようで、早く病院に戻れたようだ。

「よく寝てますね……」

「そうだな……」

2人はそれぞれ、竜馬の隣に腰掛けると寝顔を見ていた。

「……ねえ、篠ノ之さん」

「……なんだ」

「今からする事は、他言無用でよろしくて」

「そうか。なら、私のする事も他言無用だぞ」

「ええ……」

セシリアがそう言うと、2人は竜馬の左右の頬にキスをした。

「「……………」」

しばらく2人は顔を赤く染めて沈黙すると、箒が口を開いて竜馬の頭を優しく撫でた。

「竜馬……。お前が危険な目に会ったら、私が力を貸すぞ……」

「ふふつ……。篠ノ之さん……。それを言うなら、わたくし達が……でしょ」

「……………ああ。そうだな」

2人は顔を合わせると小さく微笑んだ。新たな決意……無茶をする竜馬を守るために……。

夕方 病院前

「……………」

夕方、女の子は病院を出て診察カードをカバンに直していると、見知った顔を見つけた。

「かーんちゃん〜」

「……………」

女の子は声を掛けられて診察カードを落とした。カードには、更識簪と書かれていた。

「本音……………」

「学園から連絡が来たからー、お迎えに来たよー」

「……………」ありがとう

2人は一緒に歩いていると、本音は声を掛けた。

「かんちゃん、何かいい事でもあったのー？」

「……………」（コクッ）」

簪は小さく頷くと、助けてくれた人物を思い出した。

「そーなんだー！良かったねー」

「…………ん」

表情は変わらないが、簪の頬は赤くなっていた。

(……………ありがとう、龍東さん)

夜 IS 学園 ゲート前

「ふうん、ここがそうなんだ……………」

その夜、ゲート前にはツインテールの少女が立っていた。

「ここに竜馬が……………ふふっ」

そして少女は小さく微笑むと、ゲートをくぐった。

05話【日曜とデパートと竜馬の過去】（後書き）

今回でてきた剣道部部长の名前は、オーズ17話の剣道少女とその役者さんから取りました。

こう原作に無い話を書くと時間がかかります……

まあ、ぼちぼちと頑張っていくしますので……よろしくお願いします。

06話【中国と挑戦状と動き出す者】（前書き）

原作を見ながら書くのって、やっぱり早いんですね……。

あ、6話できました！

06話【中国と挑戦状と動き出す者】

朝 1年1組

「龍東くん、おはよー！ねえ、転校生の噂聞いた？」

デパートから翌日の朝、竜馬は席で箒と話しているとクラスメイトに話し掛けられた。

「転校生？今の時期に珍しいなあ……」

竜馬は少し珍しく思った。今はまだ4月、しかもIS学園の転入はかなり条件が厳しかった。試験は勿論、国の推薦がないと出来ない仕組みなので、つまり……

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「へえ……（中国かあ……。懐かしいなあ……）」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

竜馬は中国と聞いて懐かしむと、セシリアが腰に手を当てながら近づいていた。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐ程の事でもあるまい」

「ふっ…、そうですね。箒さんの言う通りですね」

箒の言葉にセシリアは小さく微笑みながら言った。先日のアレをしてから、2人は少し仲良くなっていた。

「だが、どんな奴だろうか……竜馬？」

「ん？」

箒は話し掛けると、竜馬は考え込んでいた。

「どうしたんだ。もしかして……その奴が気になるのか？」

「まあ、少しは……」

「…………ふん」

竜馬は箒の話に答えたが、箒はむくれてしまった。

「でも、中国は懐かしいかなあ。1年前に3ヶ月程滞在してたからね」

「へー。龍東くん中国に住んでたんだあ」

「うん。その時、小学校の時に仲良くなった親友とも久しぶりに会ってね……。もしかして、その子が代表候補生かも」

「し、親友だと！」

「そ、それはどう言う事ですよ！」

クラスメイトと話していると、箒とセシリアが話し掛けた。

「転校した小学校の5年の時に知り合ったんだ。短かったけど、直ぐに仲良くなってね……」

「そうか…。だが、来月にはクラス対抗戦があるのだぞ。その親友を気にしている余裕があるのか？」

「そう！そうですわ竜馬さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせ——」
「待て、私が竜馬の訓練を務める。訓練機なら私も使えるからな」——むっ」

セシリアの言葉を遮るように、箒も竜馬の訓練に付き合える事を主張した。

ちなみに、クラス対抗戦とはクラス代表同士によるリーグマッチであり、本格的なES学習が始まる前のスタート時点での実力指標を作るためにやるイベントである。これにより、クラス単位での交流及び団結が取れる。

「ハハッ…、2人共ありがとう。頼りにしてるよ」

「ああ！」

「ええ！」

竜馬の言葉に、2人は笑顔で答えた。

「龍東くん、頑張つてねー」

「フリーパスの為にもね！」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って、1組と4組だけだから余裕だよ」

「ああ。任せて！」

竜馬は親指を立てながら返事をした。ちなみにフリーパスとは、1位クラスの優勝賞品で学食デザートの半年フリーパスが配られるのだ。

「——その情報、古いよ」

「ん？（この声は…）」

教室の入口からふと声が聞こえると、竜馬はその声を知っていた。すると腕を組み、片膝を立ててドアにもたれているツインテールの女子がいた。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

すると、竜馬は席を立ち上がるとその女子に近づいた。

「鈴……？もしかして、鈴なの？」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン 鳳 鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ！」

その女子……鈴音はふっと小さく笑みを漏らすと、竜馬は嬉しく思い良い笑顔をした。言った。

「鈴！本当に久しぶりだね。まさかと思ってたけど、やっぱり鈴だったんだ！」

竜馬は拳を出すと、鈴音も拳を出してコツンとぶつけた。どうやら先程言っていた親友とは鈴音の事だった。

ちなみに名前は鈴音だが、竜馬は略して鈴と呼んでいる。

「でも鈴。さっきの気取った喋り方は無いと思うよ」

「んなつ……！？なんてこと言うのよ、アンタは！」

「……うんうん。やっぱり鈴には、その方が合ってるよ」

そう言った竜馬は、鈴の頭を撫でだした。そしてそれを見たクラス全員は驚いていた。

「ちょ、ちょっと……。もう、子供扱いしないでよ！」

鈴はそう言つが、頬を赤くして目を閉じ、気持ち良さそうにしていた。

「おっと、ゴメン」

「あ……」

竜馬は謝ると鈴の頭から手を離すと、鈴は名残惜しそうにした。

（もー！竜馬、まさか分かっててしてるわけ！もっと撫でなさいよ！）

鈴はそう思っていると、後ろから声を掛けられた。

「おい」

「なによ!？」

―バシンッ―

鈴は返事を聞き返した瞬間、頭に痛烈な打撃が入った。

「っっっ! いったいだれ…よ…」

鈴は振り向くと、そこには鬼教官……もとい、千冬が立っていた。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

鈴はすごすごとドアからどくが、その態度は完全に千冬にビビっていた。すると、鈴は竜馬を指差して言った。

「また後で来るからね! 逃げないでよ、竜馬!」

「さつさと戻れ」

「は、はいっ！」

そう言つて、鈴は2組に向かつて猛ダツシュで戻つて行つた。すると、竜馬は千冬に話し掛けた。

「えっと…、織斑先生は鈴を知つてるんですか？」

「……少し前、中国に行つた時出会つてな……、軽くしごいてやつた」

「……………」

それを聞いて竜馬は納得した。誰にでも厳しい千冬の特訓は、それは軽いトラウマになるだろう…。

「……竜馬、今が先程言つていた友か？しかも、頭を撫でるなど羨ま……ゴホンッ！」

「り、竜馬さん！？あの子とは本当に親友というだけなのですか！どのような関係で、頭を撫でていらっしやるので——」

竜馬は箒達を筆頭に、クラスメイト達からの質問が集中砲火で襲ってきた……その時！

——バシンバシンバシンバシン——

「席に着け、馬鹿共……」

千冬の出席簿が火を噴き、それぞれ席に戻った。

（うーん……。しかし何でまたこう親友と再会するんだろうか……意外と世界って狭いなあ……）

竜馬は心の中で考えるなか、今日も授業が始まった。だが2人の親友は授業中、様々な事を思っていた……。

2時間目 教室

第 Side

（何なのだ、あの女子は……）

私は先程の一件が気になって、なかなか授業に集中出来なかった。

（竜馬も竜馬だ……。何故、あの女子には頭を撫でるんだ！私には撫でてくれないではないか……！）

私は込み上げてくる怒りをどうにか抑えながら、ちらりと後ろにい

る竜馬を窺った。

「……………」

流石は竜馬、真面目に授業内容をノートに取っているな……………って！

（違う違う！私は授業に集中できないというのに、お前は……………！）

…ますます腹が立った。少しくらい、私を気にしたらどうだ！私だけを……………

「……………」

しかし……………まあ、冷静に考えてみればたいした事ではないな。何せ、私は竜馬と同じ部屋だ。ふたりきりの時間は何時でも作れるからな。

（……………ふふっ、しょうがない奴だ。また一緒に特訓をするかっ）

そうだ。私のアドバンテージは揺るがない。さっきの凰と言う女子にしてもそうだし、セシリアやクラスメイトにしてもだ！

「——の、答えは？」

（そうだ！何も焦る必要は無い。私の方が1歩……………いや10歩はリードしているんだ！もっと竜馬と特訓して……………ん？今、私を呼んだこの声は……………）

「篠ノ之、答えは？」

「は、はいっ!？」

し、しまった！今は授業中で、しかも織斑先生の時間だ！

「……もう一度言っ。答えは？」

「……き、聞いていませんでした……」

ーバシーンー

……い、痛い……。竜馬、お前のせいだぞ……

第 Side End

3時間目 教室

セシリア Side

（なんなんですよ、さっきの方は！）

あの方……鳳さんは竜馬さんとのようなご関係なのかしら。あんな親密に振る舞うなんて……ああ！ 気になって集中出来ませんわ！

ただえさえ、箒さんという最大のライバルがおりますのに……これ以上競争相手が増えたら、わたくしはピンチですわ！

しかも……、竜馬さんはあの方とお友達と言っていましたわ。それも箒さんのように長い付き合い……

（これじゃあ……一生懸命にマラソンをしていたら、いきなり中間地点から走り出したランナーですわ……。それはズル！ズルですわ！正々堂々と勝負なさい！）

もしそれがマラソンなら、わたくしは負ける気がしません。ですが、これは愛しの殿方を取り合う競争……、なにせ初めてですから思うように状況が進みませんわ……。

（しかも、代表候補生の専用機持ち——）

確か学園に在籍している代表候補生は20数名……。1年では4名で、専用機は竜馬さんを抜かせば……わたくしを入れて2人。

（……最悪ですわ。これでは、わたくしのリードポイントが全て無効になってしまいますわ！いい、インチキですわ！）

わたくしは内心焦っています。なんとかして主導権を取らなくては！しかも、箒さんと鳳さんを大きく突き放す程のモノを……！

（模擬戦だけでは箒さんと大差無いですわ。もっとこう……決定打になるような——）

「オルコット」

（例えばデートに！……いえ、もっと効果的な……ハッ！そうですわ！竜馬さんとの既成事実を……）

「……………」

――バシーン――

「あうっ！」

「馬鹿者。きちんと授業に集中しろ」

うう……。まさか織斑先生が近づいていたなんて……。竜馬さん、貴方のせいですわよ！

セシリア Side End

昼休み 教室

「お前のせいだ！」

「貴方のせいですわ！」

昼休み、開口一番箒とセシリアが竜馬に文句を言っていた。

「えっ？」

だが、竜馬は訳が分からず首を傾げた。ちなみに2人共、午前中だけで真耶に注意5回、千冬に3回叩かれている。

「うーん……。まあ話なら昼食を取りながら聞くから、とりあえず学食に行こうよ」

「む……。ま、まあお前がそう言うのなら、良いだろう」

「そ、そうですね。行って差し上げないこともなくってよ」

竜馬の言葉に、2人は若干頬を赤くして言った。

「それじゃ、行こうか」

竜馬は教室から出ると、そのほかクラスメイトも数名付いてきて、ぞろぞろと学食に移動した。

学食

学食に到着した竜馬は券売機で日替わりランチを買った。ちなみに箸はきつねうどん、セシリアは洋食ランチを買っていた。

「待っていたわよ、竜馬！」

すると、竜馬達の前に鈴が立ち塞がった。その手にはお盆を持っており、ラーメンが鎮座している。

「やあ鈴。とりあえず、そこどいてくれるかな？食券出せないし、通行の邪魔だよ」

「う、うるさいわね！分かってるわよ！」

鈴はその場を少しどくと、竜馬は食券を学食のおばちゃんに渡した。

「それにしても、9ヶ月ぶりになるかな。元気にしてた？」

「元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「ハハッ。どういう希望、それ…」

竜馬は鈴との会話に笑った。

「あー、ゴホンゴホン！」

「ンンンッ！竜馬さん？注文の品、出来てましてよ？」

すると、大袈裟に咳き込んだ箒とセシリアによって会話が中断された。

「ああゴメン。それじゃあ向こうのテーブルが空いてるから、行く」

そして竜馬は3人に言うと、鈴と一緒に空いてるテーブルについた。しばらくして、箒とセシリアもテーブルについた。

「鈴、いつ日本に帰ってきたの？おばさん達は元気？麗々さんとはどうなの？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、もう専用機を持つてるの？」

「ああ、これがオーバースだよ」

竜馬は待機状態のメダルを鈴に見せた。

「竜馬、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですね！……ま、まさか竜馬さん、こちらの方と付き合ってらっしゃるの！？」

ざわ……

ざわ……

セシリアの言葉に、他のクラスメイトも興味津々とばかりにざわついていた。

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ……」

「だから……朝に言った通り、転校した小学校で5年の時に仲良くなった親友だよ。それに、僕みたいな男がモテる訳がないよ」

「……ハア……」

「……？どうしたの？」

竜馬の言葉に3人は深い溜め息をしたが、竜馬は理解出来なくて首を傾げた。

「まあとりあえず。鈴、紹介するよ。こっちが箒。前に話した転校する前にいた学校の親友で、僕の通ってた剣術道場の娘だよ」

「ふうん……、そうなんだ……」

鈴はじろじろと箒を見ると、箒も負けじと鈴を見返していた。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

鈴と箒は挨拶を交わすが、2人の間では火花が散っていた。

「ンンンッ！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、凰 鈴音さん？」

「……誰？」

「なっ！？」

セシリアは驚くと、言葉を続けた。

「わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですよ！？まさか御存じないの？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ……！？」

セシリアは言葉に詰まりながらも、怒りで顔を赤くしていった。

「い、い、言っておきますけど、わたくし貴女のような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

（相変わらずの自信だなあ……）

竜馬は心の中で懐かしく思った。

（前もそうだったなあ……。妙に確信じてるし、しかも嫌味じゃない言い方をする。一緒に訓練した時もそうだったし……）

竜馬は中国に滞在してた頃、鈴と一緒に訓練機の打鉄で戦う時にも同じように言われた。

「い、言ってくれますわね……」

「……………」

鈴の言葉に、セシリアはわなわなと震えながら拳を握りしめ、箸は無言で箸を止めていた。それに対して鈴は、何食わぬ顔でラーメンをすすっていた。

「竜馬。アンタ、クラス代表なんだって？」

「ん？そうだけど……」

「ふーん……」

そう言いながら、鈴はどんぶりを持ってゴクゴクとスープを飲んだ。そしてどんぶりを置くと、顔を竜馬から逸らして視線だけを向けて言った。

「あ、あのさあ……………」

「…なに？」

「久しぶりに、あたしとISの訓練しない？」

「おお！いいこ——」

―ダンッ！ダンッ！―

「っ！……… 箒？セシリア？」

竜馬は音のした方に目を向けると、箒とセシリアがテーブルを叩いて、その勢いのまま立ち上がった。いた。

「竜馬と訓練するのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」

「貴女は2組でしょう！？敵の施しは受けませんわ」

2人は怖い顔で鈴を見た。

「あたしは竜馬に言っただけ。関係ない人は引いてよ」

鈴の言葉に直ぐさまセシリアは言った。

「1組の代表ですから、1組の人間が教えるのは当然ですわ。貴女こそ、後から出てきて何を図々し――「後からじゃないけどね。あたしの方が付き合いは長いんだし」――むっ！」

セシリアは話を遮られるが、続けて箒が言った。

「そ、それ言うなら私の方が早いぞ！それに、竜馬は何度もうちで食事をしている間柄だ。付き合いはそれなりに深い」

「うちで食事？それならあたしもそうだけど？」

「「なっ！？」」

鈴の言葉に2人は言葉を失い、鈴は余裕の表情を見せた。

「まあね。鈴の家は中華料理屋でね、よく影宮さん達と行ってたんだ」

だが竜馬の発言により、余裕だった表情が途端にむすつとふて腐れた。そして対照的に、箒とセシリアはホッとした表情をしていた。

「な、何？店なのか？」

「お店なら、別に不自然な事は何一つありませんわね…」

2人同様、クラスメイト達も同じように緊張と緩和を繰り返している。すると、鈴が話し掛けてきた。

「そ、それよりさ、今日の放課後って時間ある？あるよね。久しぶりだし、どこか——」「生憎だが、竜馬は私とISの特訓をするのだ。放課後は埋まっている」——…」

鈴の言葉を遮るように箒が言うと、続けてセシリアも言った。

「そうですね。クラス対抗戦に向けて、特訓が必要ですよの」

「じゃあそれが終わったら行くから、空けといてね。じゃあね、竜馬！」

鈴はラーメンのスープを飲み干すと、竜馬の答えを待たずに片付けに行ってしまう、そのまま学食を出て行った。

「……こりゃあ、待ってないとなあ……」

竜馬は鈴が出て行った方に目を向けて、鯖の塩焼きを頬張った。

放課後 第3アリーナ・ステージ

放課後、竜馬は箒と共に特訓するためにオーバーズを展開していたが……

「はああああっ！」

「甘いすわ！」

何故か箒はセシリアと戦っていた。

「……どうしてこうなったんだろ……」

竜馬は数分前の事を思った。

〈数分前〉

「では竜馬、始めようという」

「ああ」

箒は打鉄を展開しており、刀型近接ブレードを装備して竜馬と対峙していた。同じく竜馬も、アウエンジャー双槍を装備していた。

「では……参「お待ちなさい！」——…っ！」

「ん？」

2人はつんざく声に気付くと、竜馬の前にセシリアがISを展開した状態で割って入って来た。

「竜馬さんのお相手をするのはこのわたくし、セシリア・オルコツトでしてよ!？」

「ええい、邪魔な!ならば斬る!」

そう言うと箒はセシリアに向かって行った。

「訓練機」ときに後れを取る程、優しくはなくなってよ!」

そして戦闘が開始された。

く現在く

「……………ファ……………」

竜馬は2人の戦いを見ていたが、暇で軽く欠伸をしていた。

（僕の特訓はどうするんだろう？）

そう思っていると、箒とセシリアが話し掛けてきた。

「竜馬！」

「何を黙って見ていますの!？」

「ウエツ!？」

竜馬は突然の言葉に驚いた。

「何を黙ってって……………どっちかに味方したら怒るで——」「当然だ!（ですわ!）」「——……」

竜馬は2人の息ぴったりの言葉に少し沈黙したが、それがいけなかった。

「ええいつ!」

「はつきりしなさいっ!」

箒とセシリアはしびれを切らして、竜馬に向かって攻撃を仕掛けてきた。

「おっと!」

竜馬はセシリアのスターライトmk?による弾丸を避けて、箒の袈裟斬りをアヴェンジャーで受け流した。

「2対1は卑怯でしょ!」

すると竜馬はアヴェンジャーを収納すると、セルメダルをベルトに投入して右手をスライドさせた。

「カポーン!」

オーバーズはバースになると、バースバスターを箒に向けて放った。

「くっ!」

箒はバースバスターの弾丸を避けながら竜馬に近づくが、竜馬はす

かさずセルメダルをベルトに投入した。

【DRILL ARM】

右手にはドリル状の武器が展開されて、ドリルアーム 箒の刀を受け止めた。

「はあああつ！」

「うおおつ！」

ドリルと刀の鏝ぜり合いが続くが、箒に異常が生じた。

「なっ、エネルギーが！」

そっ……。バースのE・D・Aが発動して、箒の打鉄のシールドエネルギーが吸収されていたのだ。

「まずは1人……」

竜馬は言い終わると、箒はその場で停止した。

「くそっ……」

「次はセシリアか……」

竜馬は、またセルメダルをベルトに投入した。

【BREAST CANNON】

すると、胸部にはエネルギー砲が展開された。
プレストキャノン

「ブルー・ティアーズ！」

「だったら！」

【TAKO KAN】

『タコー！』『』『』『』『』『』

セシリアはビットを展開するが、竜馬はタコ・カンドロイドを6体展開させてセシリアに放った。

「ああもつつ！これでは集中出来ませんわ！」

タコ・カンドロイド達はセシリアの周りを飛んで、セシリアの集中を掻き乱していた。それにより、ビットは浮かんだままで攻撃をしてこなかった。

「これでえっ！」

竜馬はベルトにセルメダルを3枚投入すると、エネルギーをプレストキャノンに送り込んだ。

【CELL BURST】

「ブレストキャノンシュート、発射！」

「キャアアアッ！」

竜馬はブレストキャノンのトリガーを引くと、強力なエネルギー弾が発射されてセシリアに直撃した。

「ふう…これで終わり——」「まだだっ！（ですわっ！）」「——
…えっ!?!」

竜馬の言葉を遮るように、箒とセシリアが立ち上がった。

「まだ勝負は…!」

「終わっていませんわっ!」

そして2人は再度竜馬に挑んで行った。

その頃、メルダ・ファウンデーションではある事が起こっていた。

「……おかしい」

前に映し出しているディスプレイを見ながらコーヒーを飲んでいる銀髪の男がいた。

だが男の両腕は肩から指先まで異形であり、まるで機械のような腕だった。

「どうした、金剛 黄金AI開発部主任……」

「あつ、影宮局長……」

男……黄金は影宮に気付いたが、影宮はディスプレイを見ていた。

「何かあったのか？」

「はい。何者かが開発中のヒューマン・ドroidを1体、持ち出しているんです」

「ほう……」

「しかもきちんと開発費用分の金を口座に振り込んでいまして、さらに置き手紙まで……」

「置き手紙？」

黄金は頷くと、その手紙を影宮に見せた。

「影っちゃんのドロイド買ったよーん。ちゃんとお金は払っておいたからね。それじゃ、バイビ〜」

「……………ハア〜」

影宮は手紙の見終わると、深い溜め息を吐いた。

「影宮局長？」

「大丈夫だ。この件については問題ないから、引き続きAIの開発を頼む」

「分かりました。では……………」

黄金は小さく頷くとドロイド開発室を出た。

「……………全く。相変わらずだな、束は……………」

影宮は手紙を見ながら、書いた人物の名前を言いながらコーヒーを飲んだ。

夕方 寮 竜馬・箒の部屋

「ふう……」

竜馬は現在部屋に戻っていた。あれから2対1の模擬戦をしていたが、何とかこなしていた。尚、箒とセシリアは更衣室でシャワーを浴びている。

『「――」そうですか。鳳殿が転入を……』

「ああ。久しぶりに会ったよ。それに、あの事にも大分乗り越える様子だし……」

――コンコン――

竜馬は鈴に関するあの事を思い出そうとすると、ノックの音に気がついた。

「はい！」

「遊びに来たよ、竜馬！」

竜馬は扉を開けるとそこには鈴がいて、ずかずかと部屋に入ってきた。

「鈴！まだ部屋の番号教えて無いのに、どうして分かったの？」

「あたしはコレを使っただのよ。だから竜馬の居場所が分かったの」

鈴の手にはゴリラ・カンドロイドが握られていた。なお、ゴリラ・カンドロイドの能力は探しモノを探知すると反応する仕組みになっているので、竜馬は納得した。

「じゃあ、何か飲む？」

「それじゃあ、烏龍茶ある？」

「ちよつと待つてて、確認してみる」

竜馬は冷蔵庫の中身を確認するなか、鈴は竜馬のベッドに腰掛けた。すると鈴は、机にいたシベラーに気がついた。

「久しぶりね、シベラー」

『「っ」お久しぶりです、鳳殿』

「アンタ、相変わらず堅いわねえ……」

鈴はシベラーと話していると、竜馬が烏龍茶を持ってやってきた。

「お待たせ。はい」

「ありがと」

鈴は渡された烏龍茶を飲むと、竜馬は椅子に掛けた。

「……鈴、親父さんはどうなの？」

「あ……。うん、たまに連絡はしてるよ」

「……そっか」

竜馬は烏龍茶を飲むと、鈴のあの事……鈴の両親が離婚した事を思い浮かべた。

聞いたのは中国で再会して少し経った頃だった。その頃の鈴は暗い陰を落としていたが、竜馬が積極的に鈴と一緒にいて大分明るくなった。

「そういえば、この部屋って竜馬だけなの？」

「いや、もう1人い——「ただいま」——あ、おかえり箒」

鈴の答えを返そうとすると、箒が帰ってきた。

「ふ、凰！貴様、何故ここにいるんだ！？」

「それはこっちのセリフよ！……って、竜馬。まさかそのルームメイトって……」

鈴は箒を指差すと、竜馬は頷いた。

「うん。箒だよ」

「なな、何だよ！何でアンタが女子とルームシェアしてんのよ！」

「いや、急な事で部屋割りになったんだ。まあ箒が同じ部屋で良かったよ」

「えっ、それって……」

竜馬の言葉を聞いて、箒は何かを期待して頬を赤くした。

「知らない子より、親友の方が断然いうしね」

「……はあ……」

だが期待虚しく、箒は溜め息をついた。

「…箒？どうしたの」

「ふーん……親友だったら良い訳ね……」

「え？」

竜馬は鈴の方を見ると、鈴は立ち上がって箒に近づいた。

「という訳だから、部屋代わって」

「なっ！？」

「ぶっ！」

鈴の突然の発言に、箒は驚き、竜馬は烏龍茶を軽く吹いた。

「さっき言ってたわよね。親友ならいいって……」

「ふざけるなっ！」

「何よ！」

箒と鈴は睨み合い、今にも取っ組み合いが始まりそうだった。

「シベラー、どうしようか……」

『「無理ですね。第一、竜馬殿の発言が原因ですからね」

「……まあ、確かに……」

しばらく竜馬は傍観していると、急に鈴が竜馬を指差した。

「だったら竜馬！今度のクラス対抗戦で、あたしが勝ったら同じ部屋になりなさい！」

「はい！？」

「なっ！？」

『「；○」エエッ！？』

鈴の一言で2人と1体は驚くと、箒が突っ掛かってきた。

「待て！何故そうなるんだ！？大体そんな事、私は認めないぞ！」

「なによ、アンタは竜馬が勝つと思わないの？まあ、あたしが負ける訳ないけどね」

ふふんつと鈴は余裕をこくと、箒はその態度が気に入らなかった。

「ふん！お前のような奴に、竜馬が負ける筈がない！」

「そつ。なら文句はないわね。竜馬！対抗戦、楽しみにしてるわね！」

「あ、ああ……」

鈴は竜馬が頷くのを確認すると、そのまま部屋を出て行った。

「……僕の意志は？」

竜馬は小さく呟くと、箒が振り向いた。

「竜馬！」

「ん？」

「絶っつつ対に勝つんだぞ！！」

「う、うん……」

箒の剣幕に、竜馬はただただ頷くしか出来なかった。

???

「むーん……」

同じ頃、奇妙な部屋には誰かがいた。

淀んだツリ目と、童話に出て来るような服装を着ている女性……篠ノ之 束が何やら作業をしていた。

「流石は影っちゃんだねえ。こんなに興味を持ったのは久しぶりだねえ……」

束は目の前に仰向けになっている人……いや、人の形をしたロボット、ヒューマン・ドロイドに手を加えており、束は楽しそうにしていた。

こんなに楽しく興味を持つのは、千冬と影宮を入れて4人しかいなかった。だが影宮の作ったドロイドは、ISや他の企業が作ったドロイドとは違う何かを感じていた。

「さて……学園の方はクラス対抗戦まで後少し。束さん頑張っちゃうぞー!」

束はそう言って、作業を続けるのだった。

第07話【対抗戦と謎のISと重力コンボ】

朝 生徒玄関前廊下

あれから翌日、掲示板の前には人だかりが出来ていた。

「何だろ？」

「あれではないのか？クラス対抗戦の…」

竜馬と箒は人を避けながら掲示板の前に来た。すると、掲示板には大きく張り出された紙があった。

「なにになに？クラス対抗戦日程表……」

表には以下の通りになっている。

組	六	対	組	三	戦	回	四
組	八	対	組	一	戦	回	三
組	五	対	組	四	戦	回	二
組	七	対	組	二	戦	回	一

「なるほど…。流れが良かったら決勝戦で鈴と当たるか…」

「そつみたいだな…」

竜馬と箒は納得すると、その場から離れて行った。

「竜馬。鳳の対策はあるのか？」

「対策か…。中国にいた頃はまだ訓練機だったから分からないなあ。それでも…」

竜馬は1度廊下の天井を見上げると、真っ直ぐ前に向き直った。

「全力で戦う。ただそれだけ、かな……」

「そうか…。なら、今日も特訓だな！」

「ああっ！」

竜馬は笑顔で答えた。そして、対抗戦1週間前まで訓練を行うのだった。

「数週間後」

放課後 廊下 第4アリーナ前

「竜馬、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合用の設定に調整されるから、実質特訓は今日で最後だな」

5月。あれから数週間が経ち、竜馬は更に戦闘技術が上がっていた。微かに空が橙色に染まりはじめながら、竜馬は箒とセシリアと一緒に特訓をするため第4アリーナに向かっていった。

「ISの技術も、格段に上がったな」

「そうかな？ 自覚は無いんだけど、箒が言うならそうなんだろうな」

「まあ、わたくしが訓練に付き合っているんですもの。このくらいは当然、上がらない方が不自然というものですわ」

「ハハッ。確かに、代表候補生の意見にはいつも助かってるよ」

竜馬は立ち止まると、いきなり箒とセシリアの頭を優しく撫でた。

「お、おいつ！」

「あの、竜馬さんっ！」

2人はいきなりの事で驚くなか、竜馬は御礼を言った。

「2人には感謝しているよ。ありがとう」

「あ、ああ……（竜馬の手つき、何だか気持ちいいなあ……）」

篤は気持ち良くて目を細めると、同じく気持ち良くなっているセシリアが言った。

「竜馬さん、初めて撫でてくれましたわね……」

「……いや、多分2回目だと思うけど……」

「「えっ？」」

「ほら、京水さんが来た時に……」

「「京水？………っ！！」」

だが京水の名前を言われて、2人はみるみる内に血の気が引いていった。

「私の方が、おっぱい大きいわ！！」

「あんたレディーに対して最大の侮辱をつ！！ムッキイイイイイイイイ！！」

「「………」」

2人は京水^{トラウマ}を思い出してしまい、ガクガクと震えてしまった。

「……だ、大丈夫？」

竜馬は頭を撫でるのを止めて、心配した

「っ！あ、ああ……大丈夫だ……」

「……わたくしはちょっと……気分が……」

すると、セシリアは上目使いで言葉を続けた。

「でも……竜馬さんが撫でてくれるなら、大丈夫ですわ」

「そうなの？それじゃあ……」

そう言われて、竜馬はセシリアの頭を優しく撫でた。

「……むっ」

すると、それを見た箒は膨れてしまった。

「……箒」

「あっ……」

だが竜馬は箒の機嫌が悪くなったのを感じ取り、セシリアと同じように頭を撫でた。

「それじゃあ、行こうか」

しばらくして、3人は第4アリーナに向かった。

第4アリーナ・Aピット

「待ってたわよ、竜馬！」

竜馬はドアセンサーに触れて中に入ると、腕組みをして不敵な笑みを浮かべた鈴がいた。

あれから鈴は竜馬に会いに来ることなく（廊下や学食では普通に接している）、対抗戦に向けて特訓していた。

「貴様、どうやってここに入った！」

「ここは関係者以外立入禁止ですわよ！」

箒とセシリアが顔をしかめながら言うと、鈴は「はんっ」と挑発的な笑いととも、自信満々に言い切る。

「あたしは関係者よ。竜馬関係者。だから問題無しね」

「ほほう、どういう関係かじっくり聞きたいものだな……」

「盗っ人猛々しいとは、まさにこの事ですわね！」

鈴の発言により、箒はぴくぴくと口元が引き攣り、セシリアはキレてしまった。

「まあまあ……」

竜馬は2人を宥めていると、鈴が言った。

「竜馬！勝負の約束、忘れてないわよね！」

「ああ。鈴が勝ったら一緒に部屋になるんだろ？」

「ええ。もちろん、決勝戦まで来なくてもあたしの勝ちよ！」

「分かった。でもね鈴、ちょっと納得出来ない所があるんだ……」

「……？何よ？」

鈴は首を傾げると竜馬は言った。

「鈴は自分が勝った事しか言っていないけど、負けたら何かしてくれるのかい？」

「……へっ？」

「こっちは負けたら同じ部屋になるけど、勝っても何も無いのは不公平だと思うんだ。だから僕が勝ったら奢って欲しい物がある！」

「なっ、何よ……」

鈴はたじろぐと、竜馬は言った。

「@クルーズの……」

（@クルーズって、美味しいパフェがある喫茶店よね。まさか、1番高いパフェを奢れって言うの！）

鈴はそう考え込むが、竜馬は以外な事を言った。

「……隣にあるウサオちゃん喫茶で販売している“ウサオちゃんスペシャル”を奢ってもらうよ」

「やっぱ……って、何？」

「ウサオちゃん……」

「喫茶？」

竜馬の発言により、3人は頭にハテナを浮かべた。

「前デパートに来た時に見つけたんだ。そこにあった“甘辛い初恋の味”ってのが気になったからね……」

「ま、まあそれぐらいなら……」

鈴は戸惑いながら言った。

「とにかく、決勝は楽しみにしてるわ！それじゃあ！」

鈴はそう言って、Aピットを出た。

「よしっ！それじゃあ、特訓に取り掛かるつか！」

竜馬はやる気が出て、特訓に取り掛かった。

く 対抗戦前日く

夜 竜馬・箒の部屋

「うーん……」

竜馬はベッドに座り込み、コアメダルを見て悩んでいた。あれから数日経つが、竜馬は特訓を欠かしていなかった。箒には剣術を、セシリアには技術を教わっていた。

「どうしたんだ？」

箒は竜馬が気になり、机から離れて近づいた。

「ん？実は影宮さんから連絡が来てね……」

「影宮さんが？」

『「——」「そうなんですよ」』

その時、シベラーが話し掛けてきた。

『「－」マスターは明日の各試合に条件を付けたのですよ』

シベラーは影宮が送ってきたデータを紙に書いて簿に見せた。

「何々？」

条件は以下の通りだった。

？１回戦ではオーバースのままで戦うこと。

？準決勝ではバースモードで戦うこと。

？決勝戦ではオーズモードで戦うこと。純正コンボの使用も許可。

「成る程。で、竜馬は何で悩んでいるんだ？」

「……純正コンボは何にしようか迷ってるんだ」

「純正コンボ？」

竜馬は小さく頷き、１５枚のコアメダルを並べて見せた。

「同じ系統のコアメダルを使用した姿の事を言うんだ。資料によると……各純正コンボが成立した場合エネルギーは完全回復して、オーバース・オーズモードの性能が上昇及び各コンボによってワンオフ・

アビリティーが発動される…らしいんだ」

「聞くだけで凄いな…」

「ただ、その能力が何なのか分からなくてね……。それで悩んでたんだ」

そう言いながら、竜馬はコアメダルをメダルホルダーに直し始めた。

「どうしたんだ？」

「もう寝ようと思ってね。明日から対抗戦だし——「ま、待て！」——ん？」

竜馬の言葉を遮り、箒は顔を赤くして言った。

「い、今から寝間着に着替えるのだから、むこうを向いてくれ！」

「あ、ああ…。ゴメン…」

『「」では、ワタクシも就寝いたします。おやすみなさいませ…』

竜馬はそう言うのと体の向きを変えて、シベラーは待機状態になった。

「……………」

「……………（むう…………）。着替えは僕がない時にしてほしいなあ…………）」

「い、いいぞ」

竜馬は体の向きを戻すと、箒は寝間着浴衣を着用していた。だが竜馬はある事に気が付いた。

「あれ？帯が新しいね」

「よ、よく見ているな」

竜馬は新品の帯に気が付いて箒に指摘すると、箒はちょっと上機嫌に言った。

「色も模様も違ったから。それに、箒を毎日見てるしね」

「そ、そうか。私を毎日見ている……か。そうかそうか……」

「？」

竜馬は上機嫌で何度も頷いている箒を見て首を傾げた。

「よし！では眠るとしよう！」

そう言いながら箒は自分の布団に入って消灯した。

（うーん……タイミングを逃したかなあ……）

竜馬は寝るタイミングを逃してしまったが、箒が話し掛けてきた。

「……竜馬」

「うん？」

「対抗戦、頑張れよ……」

「……ああ」

「そ、それだけだ。……で、ではなっ」

「うん。おやすみ……」

そう言っつて、竜馬は少しずつ睡眠へと落ちていった。

〵翌日〵

朝 第2アリーナ・Bピット

翌日、クラス対抗戦が始まった。現在試合は鈴と7組が行っていた。

「あれが鈴のISか……」

竜馬は鈴が展開しているISをリアルタイムモニターで見ながら、ハイパーセンサーで確認していた。

戦闘状態IS感知。操縦者、凰 鈴音。ISネーム《シエンロン甲龍》。
戦闘タイプ近接格闘型。特殊装備有り

「特殊装備か……おそらく、あの棘付き装甲に何かありそうだな」
スパイク・アーマー

竜馬は肩の横に浮いたアンロック・ユニットを見ていたが、鈴は巨大な青龍刀《双天牙月》を使うだけで7組の代表を倒してしまった。

『試合終了。勝者、凰 鈴音』

ピット

一方、千冬達がいるピットでは試合のデータを取っていた。尚、現在2回戦の最中である。

「すごいですね、凰さんのIS……」

真耶が關心していると、千冬は言った。

「だが、まだ凰は実力を出していないな……」

『「——」確かに……。おそらく竜馬殿と戦うまでは、全力でいきませんね』

「えっ……!」

真耶はいきなりの声に驚くと、パソコンのすぐ横にシベラーがいた。すると、千冬はシベラーに言った

「…何故お前がここにいる」

『「――」竜馬殿の戦闘データを取る為です。ワタクシは情報解析に長けてますので、ここにいます。勿論、申請許可は出しました』

シベラーは千冬に敬礼して言った。

「そうか…」

「あ、次は龍東くんの試合ですよ！」

真耶はモニターを見る既に2回戦が終わっており、竜馬がオーバーズを展開してステージに出て来た。

第4アリーナ・ステージ

竜馬はピット・ゲートからステージに出ると、対戦相手の8組代表と対峙した。

相手のISは学園でも訓練機で使われる《ラファールリヴァイヴ》（通称リヴァイヴ）。安定した性能と高い汎用性、操縦の簡易性によって操縦者を選ばない第2世代のISである。

「よろしくね、龍東くん」

「ああ。こちらこそ」

8組のクラス代表は竜馬に挨拶すると、竜馬も返した。

『それでは両者、試合を開始して下さい』

ービーツーー

試合のブザーが鳴り響くと、8組代表は機関銃を竜馬に向けて連射してきた。

「なんのっ!」

だが竜馬は撃たれる前に、展開していたブースター^{ソニックアックス}内蔵型斧のブースターを起動して回転させ、機関銃の弾丸を防いだ。

「いくよっ!」

竜馬は弾丸を防ぎながら加速して近づいて来ると、ソニックアックスを振り下げて機関銃を叩き落とした。

「きゃあっ!」

「まだまだ!」

さらに竜馬は振り下げた勢いで、ソニックアックスを1回転するよ

うに8組代表に叩き付けた。

―ズドオオンッ―

「あいたたた……」

8組代表は地面に叩き付けられて仰向けになっていたが、竜馬はそれを見過ごさなかった。

「これで……終わり！」

竜馬は4連ランチャー《フォークラスター》を展開して、ミサイルを全弾発射した。

「キャアアア！」

8組代表の叫びと共に、リヴァイヴのシールドエネルギーがゼロになった。

『試合終了。勝者、龍東 竜馬』

ピット

「龍東くんもすごいですね。オルコットさんと戦った時より、さら

に動きが良くなってます」

「当然ですわ！わたくしが直々に教えていますからね！」

「ん？お前たちか…」

千冬は振り返ると、そこにはセシリアと箒がいた。

『「？？」オルコット殿に篠ノ之殿。何故ここに？」』

「おおかた、観客席で見るよりここで見た方が龍東がどれほど強くなったか知りたいだけだろう」

「……………」

「図星か…」

千冬は小さくため息をすると、第4試合が開始しているモニターを見た。

（数十分後）

第4アリーナ・ステージ

あれから数十分が経ち、鈴は1回戦と同じ戦法で勝利を収めて決勝に進めていた。

（この試合はバースで行うのか……。あれを試してみるかな）

竜馬はそう考えながら、目の前にいる6組代表と対峙していた。尚、6組代表のISは打鉄である。

「手加減はしないわよ！」

「大丈夫。戦うのに手加減しないのは、僕もだよ」

竜馬は言いながらセルメダルを親指で弾いて、キャッチして言った。

「…変身」

そしてベルトにセルメダルを投入すると、右手をスライドした。

—カポーン—

音と共に竜馬は光に包まれ、オーバースはバースに変身した。

『それでは両者、試合を開始して下さい』

—ビーン—

「はああああっ！」

「まずは、コレだ！」

竜馬はバースバスターを発射するが、6組代表は刀で弾丸を弾きながら竜馬に向かって行った。

「なら！」

竜馬はセルメダルを3枚ベルトに投入した。

【BREAST CANNON
】

【CRANE ARM】

【CUTTER WING】

竜馬は3つのバースCLAWSを装備すると、背中に装着された力ッターウイングを取り外して投擲した。

「くっ！」

6組代表はカッターウイングを刀で弾いた瞬間、クレーンアームの

ワイヤーが右腕に巻き付かれた。

「円の動きで追い込む！」

竜馬はワイヤーで巻き付いた6組代表を軸にして、大きく時計回りで回りながらバースバスターを連射した。

「そこへ集中砲火！」

半分回った所でワイヤーを離れた瞬間、ブレストキャノンを一定の間隔で撃ち込んだ。

「うわぁっ！」

そしてブレストキャノンのエネルギー弾は6組代表に当たり、周りは煙に包まれた。

（くっ！すぐにこの中から出ないと！）

そう考えた6組代表は煙から出るが、竜馬はそれを待っていた。

「締めは……」

そう言いながら、竜馬はバースバスターのバレルポッドを銃口に接続した。

「出て来た所に撃ち込む！」

【CELL BURST】

そして竜馬はトリガーを引き、6組代表に直撃させた。

「キヤアアア！」

叫びと共にシールドエネルギーが無くなったが、威力が強かったのか6組代表はそのまま墜落してしまった。

「やばっ！」

それに気付いた竜馬はカッターウイングのブースターを起動させて加速し、地上に激突する前にキヤッチした。

「……………あれっ？」

6組代表は目を開くと、すぐそこには竜馬の横顔が見えた。

「大丈夫？ゴメンね」

「……………っ！は、はい……」

竜馬は小さく笑みを零すと、6組代表は顔を赤くした。

『試合終了。勝者、龍東 竜馬』

ピット

『「っ」おお！CLAWSでアサルトコンバットを再現すると
は、スゴイですね篠ノ……』

「……………」

『「……」ウツ！』

シベラーは竜馬の戦法に関心して幕達を見ると、幕とセシリアは怒りのオーラ垂れ流しだった。

（竜馬め……。また他の女子を墮としたな！）

（またライバルが増えてしまうではありませんかっ！）

2人は怒りの視線を、モニターに映っている竜馬に送った。

「……………ふう」

その様子を見た千冬は小さくため息をして、モニターを見直すとハーフタイムに入っていた。

数十分後

昼 第4アリーナ・ステージ

ハーフタイムが終わる頃、やはり噂の新入生同士の戦いとあってアリーナの客席は満員御礼。それどころか通路まで立って見ている生徒で埋め尽くされており、会場入りが出来なかった生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞していた。

尚、ハーフタイムの時に客席を《指定席》として売っていた2年生があり、千冬に制裁を下された事はまだ知られてなかった。

「……………」

「……………」

ステージでは、竜馬と鈴が試合開始の時を静かに待っていた。

『それでは両者、規定の位置まで移動して下さい』

アナウンスに促された2人は空中で向かい合った。その距離約5m。
そして2人は開放回線オープン・チャンネルで言葉を交わしていた。

「竜馬、今ここであたしと同じ部屋になるって言うなら、少しでも痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

そう言いながら、鈴は双天牙月の刃を竜馬に向けた。

「それは雀の涙くらいでしょ。いいから、久々に全力でいくよ!」

そう言いながら、ベルトにタカメダル・トラメダル・バッタメダルを転送すると、右手をスライドした。

「変身！」

【カタ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！ タトバ タ・ト・バ！！】

竜馬は金色の光に包まれると、オーバーズはオーズ・タトバコンボに変身した。

「ちよっ！さっきの歌は何なのよ！」

「歌は気にしないで」

「…まあいいわ。一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。“シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる”」

「……………」

竜馬は鈴の言葉を真剣に聞いていた。

鈴の言葉は本当のことだった。噂では、IS操縦者に直接ダメージを与える“ためだけ”の装備が存在するらしいが、それは競技規定違反であり、何より人命に危険が及んでしまう。

けれど、『殺さない程度にいたぶる事は可能』という現実には、変わりようがない。

『それでは両者……………』

アナウンスがすると2人は構えた。そして……

『決勝戦、開始です!』

―ビーツ―

決勝戦のブザーが鳴り響き、それが切れる瞬間に竜馬と鈴は動いた。

―ガギンツ!―

「くっ!」

竜馬は瞬時に展開したメダジャリバーで双天牙月の初撃を防ぐが、鈴の甲龍のパワーがオースより高かったせいで弾き返された。

「パワーが違いすぎるな……」

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない」

「そりゃどうも」

そう言いながら、竜馬はトラメダルからウナギメダルに変えて右手をスライドした。

【タカ！ウナギ！バッタ！】

「いくぞっ！」

竜馬はウナギアームにエネルギーを送り込むとメダジャリバーが青い電撃を纏い、その状態で鈴に仕掛けて行った。

ーガギイインッー

「くっ！パワーが上がった！」

メダジャリバーのパワーが上がっているのを感じた鈴は、双天牙月をバトンでも扱うように回して自在に角度を変えながら斬り込むが、竜馬もメダジャリバーを自在に扱い刃を捌いていった。

（一旦離れるか…）

竜馬は考えながら捌くと、一瞬の隙をついて双天牙月の刀身を踏み付けてショートバーニア・ブーストを起動した。

「きゃっ！」

鈴は弾かれるが、クロス・グリッド・ターン三次元躍動旋回をこなして竜馬を正面に捉えた。

「なかなかやるわね……。でも、甘いわっ！！」

そう言うと、甲龍の肩アーマーがばかっスライドして開いた。

「ん？………！」

中心の球体が光る瞬間、竜馬は何かを感じ取りメダジャリバーで防御体勢を取った時、目に見えない衝撃に殴り飛ばされた。

「くっ！」

「今のはジャブだからね」

鈴はニヤリと不敵な笑みを浮かべると、また球体が光った。

「まさか…！」

竜馬はヘッドギアとスラスターにエネルギーを送り込んでホークアイを起動させた。そこから見ると、肩アーマー部分の空間に歪みが生じていた。

「喰らいなさいっ！」

そう言った鈴は何かを発射した。しかし……

「見える！」

竜馬はその何かを見破り、ショートバーニア・ブーストを駆使して多角移動で回避して地表に着地した。

「うそ！まさか《衝撃砲》が見破られるなんて…」

鈴は驚きを隠せなかった。

「完成してたのか……衝撃砲……」

ピット

「なんだあれは……？」

ピットからリアルタイムモニターを見ていた箒が呟く。それに答えたのはシベラーだった。

『「——」衝撃砲ですね。空間自体に圧力を掛けて砲身を生成、余剰で生じる衝撃自体を砲弾仮して撃ち出す第3世代型兵器……。近接戦闘メインのオーズでは、少々分が悪いですね』

シベラーはデータを取りながら話していたが、もう箒は聞いてはいなかった。モニターには回避に専念している竜馬が映し出されていた。

（竜馬……）

セシリアの時よりも激しい戦闘を目の当たりにして、箒は勝利より

もただただ無事を願っていた。

第4アリーナ・ステージ

「よくかわすじゃない！衝撃砲《龍咆》は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに！」

「まあね！こっちは良い眼があるから、そんな砲弾に当たらないよ！」

2人は話し掛けながら攻防を繰り返していた。鈴が衝撃砲を撃つ度に竜馬は回避し、隙をみて電気ウナギウィップで攻撃を仕掛けるが、鈴は双天牙月でそれを弾き返す繰り返しだった。

（流石に長期戦になるのはヤバイな……。だったら！）

あることを思い付いた竜馬は、回避しながらタカメダルをサイメダルに変更して右手をスライドした。

【サイ！ウナギ！バッタ！】

だがタカヘッドからサイヘッドに変えた事で、ホークアイが無効になってしまった。

「鈴」

「なによ？」

鈴は竜馬に呼ばれると攻撃を止めると、竜馬は真剣に鈴を見つめて言った。

「本気で行くよ」

「来なさい。返り討ちよ！」

そう言った鈴はバトンのように双天牙月を構え直すと、肩アーマーがスライドして中心の球体が見えた。

「そこだ！」

「えっ!？」

だが竜馬は電気ウナギウィップを鈴ではなく、甲龍の肩アーマーに巻き付いて強制的に閉じさせた。

「しまっ——」「うおおおっ!——…っ!」

鈴は動揺していると竜馬の叫びが聞こえた。すると竜馬は電気ウナギウィップを引き、最大出力のショートバーニア・ブーストによって頭から鈴に突っ込んできた。

―ドゴオンッ―

だが鈴は間一髪、双天牙月でグラビドホーンによる頭突きを防ぐが大きく弾き飛ばされ、双天牙月が大きく刃毀れした。

（やばい！）

鈴は心の中で思うと、竜馬はもう1度仕掛けた。

「これで、どうだああ！」

竜馬は鈴に再度電気ウナギウィップを巻き付かそうと思った…次の瞬間！

―ズドオオオオンッ！！！！―

「！！？」

突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。

「な、何だ！？」

竜馬はステージ中央を見ると、そこからもくもくと煙が上がっていた。どうやら、さっきの衝撃は“それ”がアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきたようだ。

「うつ……」

竜馬は先程の衝撃と立ち上る煙を見て、ある出来事と重なって見えた。まるで、あの時巻き込まれたテロのように……

（くそっ…収まれ…収まってくれ…！）

竜馬は身体が震えてしまい、右手で強く左腕を掴んだ。

『竜馬！』

「っ！？」

突然、鈴からプライベート・チャンネルが送られると竜馬は震えが収まった。

『竜馬、試合は中止よ！すぐにピットに戻って！』

鈴が言い出すと、オーバーズのハイパーセンサーが緊急通告を行ってきた。

ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています

「なっ——「竜馬、早く！」——…鈴っ！」

すると、竜馬と所属不明ISの間に鈴が割り込んだ。

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」

「逃げるって……親友を置いてそんなこと出来ないよ！」

「馬鹿！さっきあんなに震えてたでしょ！アンタこの場面を見て、あの事を思い出したんでしょ！」

竜馬の言葉に、鈴は思いつきり言った。尚、鈴は竜馬に昔の事を聞いているので知っていたのだ。

「別に、あたしも最後までやり合うつもりはないわよ。こんな異常事態、すぐに学園の先生達がやってきて——「危ないっ！——」——っ！」

竜馬は間一髪、鈴の体を抱き抱えて掠った。その直後に、先程鈴がいた空間が熱線で砲撃された。

「ビーム兵器……。しかもセシリアのISより出力が高いな」

竜馬はハイパーセンサーの簡易解析で熱量を知ると、背中に冷たいものが伝わった。

「ちよっ、ちよっと、馬鹿！離しなさいよ！」

「お、落ち着いて——「う、うるさいうるさいっ！——」——ちよっ、殴らないでっ！」

流石にシールドエネルギーで守られているが、鈴はパンチを連射砲の如く竜馬の顔に放っていた。

「だ、大体どこ触って——「来るよ！」——っ！」

竜馬は鈴の言葉を遮るとビームを回避した。だがビームは煙を晴らすかのように連射されると、その射手たるISがふわりと浮かび上がってきた。

「なんなんだ、こいつ……」

竜馬達はそのISを見て驚いた。

姿から異形だった。深い灰色をしたそのISは、手が異常に長くて爪先よりも下まで伸びており、人間の胸程の巨大な拳を持っていた。しかも首というものが無く、肩と頭が一体化しているような形をしていた。そして何より特異なのが、肌を1mmも露出していない“フル・スキン 全身装甲”だった。

（デカイな…）

竜馬は所属不明ISを見て、その巨大な姿に驚いた。

腕を入れると2mを超える巨体は、姿勢維持のためか全身にスラスト・口が見て取れ、頭部には剥き出しのセンサーレンズが不規則に並び、腕には先程のビーム砲口が左右合計4つあった。

「……何者なんだ、あなたは」

「……………」

竜馬の呼びかけに、所属不明ISは答えなかった。

『龍東くん！鳳さん！』

すると、真耶がプライベート・チャンネルで話してきた。心なしか、

いつもより声に威厳があった。

『今すぐアリーナから脱出して下さい！すぐに先生達がISで制圧に——「いや、先生達に来るまで僕達で食い止めます」——えっ！……り、龍東くん！？』

竜馬の発言に、真耶は驚いた。

「あのISは遮断シールドをも突破するパワーがあります。今ここで誰かが食い止めないと、観客席にいる人達に被害が及ぶ可能性があります。シベラー！」

『はいっ！』

「今から所属不明ISのデータを取るから、解析を頼むよ」

『御意！』

「いいかい、鈴」

「だ、誰に言ってるのよ。そ、それより離しなさいってば！動けないじゃない！」

「ああ、ゴメン」

竜馬が腕を放すと、鈴は頬を赤くして自分の体を抱くような格好で離れた。

『龍東くん！？だ、ダメですよ！生徒さんにもしもの事があつたら

』

竜馬は真耶の言葉をそこまで聞くと、敵ISが体を傾けて突進してきた。

「くっ！」

だが竜馬はそれを回避すると、鈴と横並びになった。

「ふん、向こうはヤル気満々みたいね」

「みたいだね」

竜馬はウナギメダルをゴリラメダルに、サイメダルをタカメダルに変更すると右手をスライドした。

【タカ！ゴリラ！バッタ！】

頭部と腕部の装甲を変更すると、竜馬はホークアイを起動して敵ISを見つめた。

「竜馬、あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさいよ。アンタの武器、近接戦闘がメインみたいだしね」

「まあね。それじゃあ……」

竜馬はゴリバゴーンを、鈴は双天牙月の切っ先をキンツと当てると竜馬は言った。

「敵ISの信号を《ジェントルハーツ》と固定！行くよ、鈴！」

「わかったわ！」

そして2人は即席コンビネーションで飛び出した。

ピット

「もしもし！？龍東くん聞いてます！？鳳さんも！聞いてますー！？」

「本人達がやると言っているのだから、やらせてみても良いだろう」

「お、お、織斑先生！何を暢気な事を言ってるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

千冬はコーヒーに砂糖を入れてもう1度スプーンで掬うと、真耶はある事に気が付いた。

「……あの、先生。それ塩ですけど……」

「……………」

真耶に指摘された千冬は、ぴたりとコーヒーに運んでいたスプーンを止め、白い粒子を大きく塩と書かれた容器に戻した。

「あつ！やっぱり龍東くん達の事が心配なんですね！？だからそんなミスを……………」

「……………」

……イヤな沈黙だった。何かまずい事が起きる気がして、真耶は話を逸らそうと試みた。

「あ、あのですねっ——」山田先生、コーヒーをどうぞ「——…へ？あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ……………」

「どうぞ」

だが真耶の努力虚しく、千冬はずっとコーヒー（微塩）を押し付け、真耶は涙目で受け取った。

「い、いただきます……………」

「熱いので一気に飲むと良い」

（…あ、悪魔だ）

真耶は心の中でそう呟くと、セシリアが千冬に話し掛けた。

「先生！わたくしにIS使用許可を！すぐに出撃できますわ！」

「そうしたいところだが……」

そう言いながら、千冬はブック型端末の画面を数回叩いて表示される情報を切り替えた。

「これを見る」

千冬はそれをセシリアに見せた。画面に表示されているのは、この第4アリーナのステータスチェックだった。

「遮断シールドがレベル4に設定……？しかも、扉が全てロックされて……あのISの仕業ですよ！？」

「そのようだ。これでは避難する事も救援に向かうことも出来ないな」

実に落ち着いた調子で話す千冬だったが、よく見るとその手は苛立ちを抑えきれないばかりに忙しく画面を叩いている。

「で、でしたら！緊急事態として政府に助勢を——「やっている。現在も3年の精鋭がシステムクラクを実行中だ。遮断シールドを解除出来れば、すぐに部隊を突入させる」——…っ」

千冬は言葉を続けるが、益々募る苛立ちに眉がぴくつと動いた。すると、画面に解析中と表示しているシベラーが話し掛けた。

『「解析中」ワタクシも敵ISの解析とロック解除を進行中なのですが、なにぶんこの身体では満足に力を発揮できませんねえ……』

それを聞いたセシリアは、頭を押さえながらベンチに座った。

「はぁぁ……。結局、待っている事しか出来ないのですね……」

「何、どちらにしてもお前は突入隊に入れないから安心しろ」

「な、なんですって!？」

セシリアは怒りながらベンチを立った。

「お前のＩＳは１対多向きだ。多対１では寧ろ邪魔になる」

「そんな事ありませんわ！このわたくしが邪魔だなどと——」では連携訓練はしたか？その時のお前の役割は？ビットをどういう風に使う？味方の構成は？敵はどのレベルを想定してある？連続稼働時間——」……わ、分かりました！もう結構です!」

するとセシリアは、千冬の指導を両手を揺らして止めた。

「ふん。分かれば良い」

「はぁ……。言い返せない自分が悔しいで……。あら？」

先程よりも深い溜め息をしたセシリアはベンチに座ろうとしたが、あることに気がついた。

「あら？箒さんはどこへ……」

キヨロキヨロと周囲を見回すセシリアとは対照的に、千冬だけはさ

つきまでと違う異様に鋭い視線をしていた。しかし、現時点ではそれに誰も気がつかなかった。

第4アリーナ・ステージ

「うおおおおっ！」

その頃、竜馬はゴリラアームによる連続攻撃を行っているが、ジェントルハーツはそれをするりと避けていた。

「竜馬！」

鈴は竜馬に言うのと衝撃砲を撃ち込むが、ジェントルハーツは全身に付けたスラスターを駆使して一気に回避行動を行った。

（エネルギー残量80を切ったか…。鈴との対戦でメダルを変えすぎたな）

「竜馬っ、離脱！」

「ああっ！」

ジェントルハーツは回避後、でたために長い腕を振り回して接近してきた。

「ああもうつ、めんどくさいわねコイツ！」

鈴は焦れたように衝撃砲を展開し、砲撃を行った。だがジェントルハーツの腕はその見えない衝撃を叩き落とした。

「……鈴、後エネルギーは殿くらい残ってる？」

「180つてところね」

鈴もだいぶ削られているが、それでも竜馬よりはマシだった。甲龍は燃費と安定性を第一に考えて作られているので、エネルギーの減りは少ないのだ。

「ちょっと、厳しいわね……。現在の火力でアイツのシールドを突破して機能停止させるのは確率的に一桁台つてどこじゃない？」

「ゼロじゃなきゃいいよ」

竜馬の言葉に、鈴は呆れて言った。

「あつきた。確率はデカイ程いいに決まってるじゃない。アンタつて、宝くじ買うタイプ？」

「それを買ったつたら、@クルーズのパフェを買うよ」

「あつそ。……で、どうすんの？」

「逃げたかったら逃げてもいいよ」

「なっ!?!」

竜馬の発言に、鈴は怒鳴るように言った。

「馬鹿にしないでくれる!?!あたしはこれでも代表候補生よ。それが尻尾巻いて退散なんて、笑い話にもならないわ!」

「分かった。じゃあ、鈴の背中くらいは守ってみせるよ」

「え?あ。う、うん……。ありが——」

鈴は頬を赤くした瞬間、横をビームが掠めた。

「ちっ!厄介だな……(しかしあのIS、こっちが会話してる時はあまり攻撃してこないな……。興味でも持っているのか?それに行動が機械じみて——)」

『竜馬殿!』

竜馬が考えていると、シベラーからプライベート・チャンネルで連絡してきた。

「何だい!」

『敵ISの解析が完了しました。今からデータを送ります』

送られたデータを見ると、竜馬は驚くと同時に納得した。

「…なるほど。これで合点がいった!」

「竜馬、どうしたの?」

「鈴。敵の正体があった」

「ホントに!」

鈴が驚くなか、竜馬は話し続けた。

「ホークアイから見た記録をシベラーに解析してもらった結果、あのIS……ジエントルハーツは………、ドロイドが操縦している事が分かった!」

「ええっ!? そんな、あり得ない。 “ ISは人が乗らないと絶対に動かない” のに……」

鈴は真剣にジエントルハーツを見つめた。

そう…… ISは人が乗らないと絶対に動かないと、教科書に載っている。だが、今最先端の研究でそれが不可能かどうかは分からない。その事を黙れば、誰も知る事も無いのだから…。

「竜馬」

「ん?」

「どうしたらいい?」

竜馬と鈴は目が合った。鈴は竜馬が何か策を持っていると悟り、竜馬は鈴がそのサポートをしてくれると悟った。

「ジェントルハーツが飛び上がるのを衝撃砲で防いでほしい」

「当てなくていいの？」

「当てなくてもいいんだ。地上にいれば、こっちの勝ちだ」

すると竜馬はベルトのメダルを全て変更しようとしたその時、アリーナのスピーカーから大声が響いた。

「竜馬あつ！」

——キーン……—

「っ！ほ、箒っ！」

竜馬は発声源を探ると、Bピット・ゲートにはマイクを持った箒が立っていた。さらに数十倍に拡大して箒を見ると、はあはあと肩で息をして、怒っているような焦っているような不思議な様相をしていた。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

「……………」

ジェントルハーツは興味を持ったのか、竜馬たちからセンサーレンズをそらしてじっと箒の方を見た。

「まずい!!」

それに気付いた竜馬は、バツタメダルをチーターメダルに変更して移動しながら右手をスライドした。

【タカ!ゴリラ!チーター!】

チーターレッグに変更した瞬間、ジェントルハーツは左腕のビーム砲口を箒に向けて撃ってきた。

「っ!？」

「箒いつ!」

「竜馬っ!？」

竜馬は鈴の言葉を聞かず、チーターレッグを最大速度で加速して箒の前に割り込んだ。

―ズドオオォン―

「……………っ!竜馬っ!？」

「くっ…、今のは…効いたね……………」

竜馬はなんとかビームをゴリバゴーンで防いだが、腕部の装甲は焦

げる他、エネルギーが一桁になってしまった。

「大丈夫かい……箒」

竜馬は箒を見て優しく微笑みながら言うと、箒は小さく頷いた。

「そうか……」

そして竜馬は再びジェントルハーツに向くと、先程の表情と違い、怒りをあらわにして言った。

「許さない……。僕は、あんたを許さない!!」

そして竜馬はタカメダルをサイメダル、チーターメダルをゾウメダルに変更して右手をスライドした。すると、亜種コンボとは違って銀色の光りに包まれると、タトバコンボの時と同じような不思議な歌が聞こえた。

【サイ！ゴリラ！ゾウ！……サッゴーズ……サッゴーズ！】

光りが収まると、竜馬の口には白銀のマスクをしており、サイヘッド・ゴリラアーム・ゾウレッグの装甲を纏った姿を現して地上に降り立った。

そしてハイパーセンサーには、《サッゴーズコンボ》の成立を表示していた。

「……………」

ジェントルハーツは再び竜馬に興味を示しビームを撃ってきた。

「「竜馬っ！？」」

箒と鈴は叫ぶが、竜馬は1歩も動かなかった。そして誰もがビームの直撃を逃れないと思った、その時だった。

「…えっ？」

「ビームが…曲がった！？」

箒は不思議がり、鈴は目の前で起こった出来事に驚いた。
竜馬の約2m手前で、ビームが曲がったのだ。

「…ッ！ウオオオオオオオオオ！！」

すると竜馬は物凄い雄叫びを発すると、その振動でステージ全体を揺るがした。

「ウオオオオオオッ！ウオオオオッ！ウオッ！ウオッ！ウオオオオオオオッ！」

そして竜馬はゴリラ特有のドラミングをジェントルハーツに見せながらした。

| ” ” ” ” ” ” |

「何、この音…」

鈴は竜馬が発しているドラミングとは別の音に気付いた瞬間、甲龍のハイパーセンサーから緊急通告を行っていた。

ジェントルハーツ周辺の空間に異常発生。至急退避して下さい

「退避つて……ええっ!？」

鈴は退避しながらジェントルハーツに目を向けると驚いた。

その周辺の地盤は砕けて浮かび上がり、ジェントルハーツ自体も身動き取れないようにジタバタするだけで、竜馬のドラミングによる振動に成すすが無かった。

そう……これがサゴーズコンボの能力。

周囲の重力場を自在に操って相手のP I Cをも無効化にし、特定の対象の周囲を高重力・無重力にしてしまうワンオフ・アビリティー……《Sun goes up》である。

―ドガガガンッ―

竜馬はドラミングを止めると、ジェントルハーツと砕けた地盤は地表に叩き付けられた。

「まだだっ!」

竜馬は高くジャンプしてジェントルハーツを踏み潰そうとすると、ジェントルハーツは右拳を叩き付けようとした。

—グシャアッ—

だがサゴーズコンボになった事で、オーズ自身を高重量に変えてズ
オーストンプの威力が上がり、ジェントルハーツの右拳を完全に破
壊した。

「おらあっ!!」

—ドガン—

そしてゴリラアームの一撃でジェントルハーツを約10m殴り飛ば
した。

「鈴っ!」

「オツケー!!」

鈴は竜馬に呼ばれると、すぐさまジェントルハーツに衝撃砲を連射
して飛び立たせないようにした。それを見た竜馬はベルトにエネル
ギーを送り込むと、右手をスライドした。

【SCANNING CHARGE!】

「はあっ!!」

音声が発したその瞬間、竜馬はその場で跳躍した。

―ズドオオオオンッ！―

着地と共に銀色の波紋状のリングが発生してジェントルハーツに触れた瞬間、ジェントルハーツは地面に減り込みながら竜馬に引き寄せられていた。

「ハアアアアア……！」

竜馬はエネルギーをグラビドホーンに送り込むと、それは輝き出してエネルギー状の角が形成された。そしてジェントルハーツが手前1mのところで、エネルギー状の角を突き出した。

「セイヤアアアアッ！」

さらに竜馬は叫びながらその角を両拳で叩き込んだ、次の瞬間！

―ドオオオ……ン”ッ―

「「きゃっ！」「」

角が砕け散り、そこから凄まじい衝撃波が生み出された。そして至近距離にいたジェントルハーツはその衝撃で吹っ飛ばされると同時に、左拳が吹き飛び装甲が半分以上も剥がされ、全身装甲

の中身を見せながら仰向けで地面に叩き付けられた。

これがサゴーズコンボの必殺技、《サゴーズインパクト》である。

「ハアッ、ハアッ……」

竜馬は荒く息をしていると、ボロボロだった地面が元に戻っていた。

「……やったの？」

「……まだだっ！」

鈴と箒はジェントルハーツを見た数秒後、微かだがジェントルハーツは動いて立ち上がろうとしていた。

「「竜馬っ！」」

2人は叫ぶと、竜馬は上を見上げて言った。

「……狙いは？」

『完璧ですわ！』

——キュインッ——

刹那、上空から4つの光りがジェントルハーツを貫いた。その光り……ブルー・ティアーズの4機同時狙撃による攻撃だった。

—ボンッ—

ジェントルハーツの身体から小さな爆発が起こり、再度仰向けで倒れてしまった。

「アンタ、どうやって入って来たのよ？」

鈴はセシリアに言うと、セシリアは高度を下げながら近付いていった。

「竜馬さんが敵ISの右手を破壊した時に、箒さんとは反対側のピットから出て来ましたわ」

そして2人は一緒に竜馬の所へと行った。

「ナイスタイミングだよセシリア。君ならやれると思ってたよ」

竜馬はぐつと親指を立てながら笑顔で答えると、セシリアは頬を赤くして言った。

「そ、そうですよ……。とっ、当然ですわね！何せわたくしはセシリア・オルコット。イギリス代表候補生なのですから！」

「ハハッ……。鈴もナイスフォローだったよ」

「何よ、その“も”って！あたしはついでのの！」

竜馬の発言に、鈴は頬を膨らませた。

「じめんじめん……」

竜馬は鈴の機嫌を治すように頭を撫でようとした、その時だった。

—グラリツ—

「……っ！」

竜馬は突然の目眩に襲われるとオーバーズが強制的に解除され、竜馬は倒れてしまった。

「ちよっ！竜馬っ！」

「しっかりして下さい！竜馬さんっ！」

2人は気を失った竜馬を箒がいるピットに運ぶと、箒も気が動転するような取り乱しっぷりだった。

「……う……………」

あれから気を失った竜馬は、保健室のベッドの上で目を覚ました。

「気がついたか」

「……影宮さん？」

竜馬は体を起こすと、ベッドの横には影宮がいた。

「学園から連絡を貰ってな。千冬さんとシベラーから話を聞いているぞ」

「……気を失ってたみたいです」

「しかたないさ。純正コンボを初めて使ったんだ。あれらは強力な分、精神を一気に使うから多様するなよ……」

影宮は言い終わると、竜馬の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「…無事でよかった。お前の関わる人もその手で守れて、良かったな」

「影宮さん」

「ん？」

「……心配かけて、すみません」

「……ふっ」

影宮は竜馬の言葉にキョトンとした後、小さく微笑んだ。

「んじゃ、俺は千冬さんに呼ばれてるから行くぜ。少し休んだら部屋に戻るんだぞ」

そう言っつて影宮は保健室から出て行った。

「あー、ゴホンゴホン！」

すると影宮との入れ違いに誰かが入ってきたが、竜馬は誰か分かっていた。

「…箒」

「ジャッ！」

箒は半分だけ開いていたカーテンを両手で開けた。

「やあ、箒」

「う、うむ……」

すると箒は腕組みをして言った。

「あ、あのだなっ。今日の戦いだがつ」

「ん？そついえば試合はどうなったの？やっぱり無効試合かな？」

「あ、ああ……。あんな事が起きては当然だな」

「そうかあ……」

竜馬は小さく溜め息をすると、箒が話し掛けてきた。

「……………竜馬」

「何？……………っ！」

竜馬はいきなりの事で驚いた。話し掛けた直後、箒が竜馬に抱き着いたのだ。

「え、えっと、箒さん？」

「…ありがとう。守ってくれて」

「え……。……うん」

箒はそれだけ言うと竜馬から離れた。竜馬は箒を見ると、恥ずかしいあまり顔を真っ赤にしていた。

「で、ではな！」

そして箒は逃げるような早足で保健室を出て行った。竜馬は見送ると急に眠気が来て眠りに落ちていった。

「十数分後」

「……………」

（……ん？）

竜馬は寝ていると、右頬に何かが触れたのを感じた。

「竜馬……………」

竜馬は名前を呼ばれると目を開けた。すると顔の間近に鈴の顔があった。

「鈴？」

「っ！？」

いきなり目を開けた竜馬を見て、鈴は頬を赤くしながら驚いた。

「……………何してんの？」

「おっ、お、おっ、起きてたの！？」

「いや、呼ばれたから起きたんだよ。で、何か焦ってるみたいだけど、どうしたの？」

「あ、焦ってないわよ！勝手な事言わないでよ、馬鹿！」

「馬鹿はヒドイなあ…」

竜馬は人差し指で右頬を掻きながら言うと、鈴は「ふんっ」と言いながらベッド脇の椅子に腰掛けた。

「……あ」

「な、なに？」

「勝負の決着ってどうする？試合も無効になったし…」

「その事なら、別にもういいわよ。あたしは我慢するわ」

「そっか……。あ」

竜馬は何かを閃くと鈴に話し出した。

「ねえ、鈴」

「ん、なに？」

「次の日曜、僕が言った喫茶店に行こうか」

その言葉に、鈴は表情をぱあっと明るくした。

「え！？それって、そのデー——」

——バーンッ——

だが鈴の言葉を遮るかのように保健室のドアが思いっきり開け放たれると、セシリアがつかつかと入ってきた。

「竜馬さん、具合はいかがですか？わたくしが看護に来て——あら？」

セシリアはベッドの傍らにいる鈴を見つけると、その場で止まってしまった。

「どうして貴女が……？竜馬さんは1組の人間、2組の人にお見舞いされる筋合いはなくてよ」

「何言ってるの？あたしは親友だからいいに決まってるでしょ。あんたこそただの他人じゃん」

「わたくしだって親友ですわ！それに、今は竜馬さんの“特別”コーチでしてよ！代表候補生ですし……」

「じゃあ明日からあたしが特別コーチになったげる。代表候補生だし」

「そ、そんなのダメですわ！」

「……………はあ」

鈴とセシリアが言い争いを始めると、竜馬はぽつんとため息を落とした。

学園 地下研究室

学園の地下50m。そこにはレベル4権限を持つ関係者しか入れない隠された部屋に千冬と真耶がいた。機能停止したジェントルハーツはすぐさまそこへと運び込まれ、シベラーと共にさらに詳しく調べていた。

「…来たか」

ドアが開くと、影宮が入ってきた。

「これがISを動かしたドロイドか……」

影宮はジェントルハーツをまじまじと見てみると、千冬が質問をした。

「これは、お前が作ったのか？」

「外部装甲は確かに俺が開発してる物だが……内部システムは弄られてるな」

言い終わると、影宮はフツと小さく笑った。

（まさかドロイドにISを操縦させるなんてな。……相変わらず凄いな、束……。まっ、俺の方が早いけどな……）

影宮は同い年の天才を思い浮かんでいると、真耶が千冬に話し掛けた。

「龍東くんの最後の攻撃で機能中枢が完全に破壊されていました。修復も、恐らく無理かと……」

「コアはどうだった？」

「……それが、登録されていないコアでした」

「そうか。……やはりな」

どこか確信じみた発言をする千冬に、真耶は怪訝そうな顔をして言った。

「何か心当たりがあるんですか？」

「いや、無い。今はまだ——な」

そう言っただけはディスプレイの映像に視線を戻すと、それは教師の顔ではなく、戦士の顔に近かった。

かつて世界最高位の座にあった、伝説の操縦者。その現役時代を思

わせる鋭い瞳は、ただただ映像を見つめ続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6059x/>

I・O・O・S - インフィニット・オーズ・ストラトス -

2011年11月24日10時00分発行